



Informatica® MDM Multidomain Edition
10.2 HotFix 2

**バージョン 9.7.1 からの ア
ップグレード**

Informatica MDM Multidomain Edition バージョン 9.7.1 からの アップグレード

10.2 HotFix 2

2018 年 3 月

© 著作権 Informatica LLC 1998, 2020

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、および ActiveVOS は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新リストは、Web (<https://www.informatica.com/trademarks.html>) にあります。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

発行日: 2020-05-08

目次

序文	7
Informatica のリソース.....	7
Informatica Network.....	7
Informatica ナレッジベース.....	7
Informatica マニュアル.....	8
Informatica 製品可用性マトリックス.....	8
Informatica Velocity.....	8
Informatica Marketplace.....	8
Informatica グローバルカスタマサポート.....	8
 第 1 章 : アップグレードの概要	9
Informatica MDM Multidomain Edition のアップグレード.....	9
アップグレードプロセスの選択.....	10
アップグレードプロセスの選択についてのガイドライン.....	10
クリーンアップグレードのアップグレードプロセス（推奨）.....	11
インプレースアップグレードのアップグレードプロセス.....	11
アップグレードの記録.....	12
 第 2 章 : アップグレード前のタスク	13
アップグレード前のタスク.....	13
アップグレードの準備.....	13
環境の準備.....	15
既存のジョブの処理.....	17
MDM Hub 構成の更新.....	18
元のスキーマ所有者によるオペレーショナルリファレンスストアの登録.....	18
BPM アップグレードの準備.....	21
 第 3 章 : インストール前のタスク	23
インストール前のタスク.....	23
 第 4 章 : Hub ストアのアップグレード	24
Hub ストアのアップグレードの概要.....	24
Hub ストアのクローン作成（クリーンアップグレード）.....	24
データベースを英語以外のロケールに設定.....	25
Verbose モードでの MDM Hub マスターデータベースのアップグレード.....	25
サイレントモードでの MDM Hub マスターデータベースのアップグレード.....	28
Verbose モードでのオペレーショナルリファレンスストアのデータベースのアップグレード.....	29
サイレントモードでのオペレーショナル参照ストアデータベースのアップグレード.....	32
アップグレードスクリプトが正常に実行されたことの確認.....	33

第5章: Hub サーバーのアップグレード（インプレースアップグレード）	34
Hub サーバーのアップグレードの概要	34
グラフィカルモードでの Hub サーバーのアップグレード	35
コンソールモードでの Hub サーバーのアップグレード	38
サイレントモードでの Hub サーバーのアップグレード	41
プロパティファイルの設定	41
サイレントアップグレードの実行	43
patchInstallSetup スクリプトの実行	44
アップグレードドキュメントフォルダへの Hub サーバーのログファイルのコピー	45
Hub Server のアップグレードの再適用（オプション）	46
第6章: プロセスサーバーのアップグレード（インプレースアップグレード）	47
Process サーバーアップグレードの概要	47
グラフィカルモードでの プロセスサーバーのアップグレード	48
コンソールモードでの プロセスサーバーのアップグレード	50
サイレントモードでの プロセスサーバーのアップグレード	51
プロパティファイルの設定	51
プロセスサーバーのサイレントアップグレードの実行	52
Informatica Address Verification 5 統合へのアップグレード手順	53
一致ポピュレーションの設定	55
一致ポピュレーションの有効化	55
アップグレードドキュメントディレクトリへのプロセスサーバーのログファイルのコピー	57
プロセスサーバーのアップグレードの再適用（オプション）	57
第7章: リソースキットのアップグレードインプレースアップグレード	59
リソースキットのアップグレードの概要	59
リソースキットのアンインストール（インプレースアップグレード）	59
リソースキットのインストール	60
第8章: アップグレード後のタスク	64
アップグレード後のタスク	64
更新プロパティ	65
MDM Hub 環境の再起動	65
アプリケーションサーバーの再起動	65
インプレースアップグレードのアップグレード後のタスクを実行する	66
Oracle 互換モードを無効にした状態でデータベースを IBM DB2 に移行	66
手順 1. ターゲットディレクトリの作成	66
手順 2. MDM Hub マスターデータベースの DDL とデータの抽出	67
手順 3. オペレーショナルリファレンスストアの DDL とデータの抽出	67

手順 4. IBM DB2 の Oracle 互換モードの無効化.	68
手順 5. Hub ストアの作成.	68
手順 6. ソースの DDL とデータを使った MDM Hub マスターデータベーススキーマの更新.	73
手順 7. ソースの DDL とデータを使ったオペレーショナルリファレンスストアの更新.	74
手順 8. テーブル制約の調整の確認.	75
手順 9. データベースを使用するようにアプリケーションサーバーの設定.	75
オブジェクト、カラム、および廃止されたオブジェクトへの参照の削除.	76
odjbc6 JAR ファイルの削除.	77
Hub サーバーをデプロイするための PostInstall スクリプトの実行（条件による）.	77
WebSphere 管理セキュリティの設定.	78
オペレーショナルリファレンスストアの登録解除.	78
EAR ファイルのアンインストールおよびデータソースの削除.	79
WebSphere 管理コンソールでの WebSphere 管理セキュリティの有効化.	79
Hub サーバーとプロセスサーバーのプロパティの設定.	79
Hub サーバーの PostInstallSetup スクリプトの手動実行.	80
プロセスサーバーの PostInstallSetup スクリプトの実行.	80
オペレーショナルリファレンスストアの登録.	81
プラットフォームトランスフォーメーションに対するクレンジング関数の設定.	86
アップグレードされたメタデータの検証.	87
メタデータの検証.	87
検証結果の保存.	87
メタデータ検証メッセージの解決.	87
MDM Hub 環境レポートの確認.	88
MDM Hub 環境レポートの保存.	88
更新済のユーザー出口メソッドの実装.	89
EJB プロトコルのための SiperianClient ライブラリクラスのアップグレード.	89
MDM Hub メタデータを準備する.	90
アップグレードテスト.	90
Informatica Data Director のアップグレードテスト.	90
MDM Hub アップグレードテスト.	91
カスタムコードのアップグレードのテスト.	91
Informatica Data Director および Hub サーバーのプロパティ.	91

第 9 章 : アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク. 93

アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク.	93
--	----

第 10 章 : ビジネスエンティティアダプタ用の ActiveVOS アップグレード後タスク. 94

ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク.	94
ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定.	95
ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定.	95
カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新.	96

カスタマイズしたビジネスエンティティの ActiveVOS ワークフローの更新.	98
ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定.	100
カスタム BeMDMWorkflow プロジェクト（インプレースアップグレード）.	101
マージ解除ワークフローおよびマージワークフローのトリガの設定（インプレースアップグレード）.	102
Add the Entity 360 Framework Task Manager.	102

第 11 章: サブジェクト領域アダプタ用の ActiveVOS アップグレード後タスク. 103

サブジェクト領域アダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク.	103
ActiveVOS URN の更新.	104
ActiveVOS の信頼されたユーザーの確認.	104
サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの Informatica Data Director タスク設定の更新.	105
サブジェクト領域ベースの ActiveVOS アダプタの IDD 設定の更新.	105
サブジェクト領域ワークフローアダプタのタスクトリガの設定.	106
カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新.	107
カスタマイズしたサブジェクト領域の ActiveVOS ワークフローの更新.	110
サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの再デプロイ.	111
ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成ファイルの生成.	111

付録 A: トラブルシューティング. 113

アップグレードプロセスのトラブルシューティング.	113
----------------------------------	-----

付録 B: アップグレードの FAQ（よくある質問）. 119

FAQ（よくある質問）.	119
----------------------	-----

付録 C: 既存の ActiveVOS タスクの処理. 121

既存の ActiveVOS タスクの処理の概要.	121
移行プロパティ.	121
移行スクリプトの実行プロパティファイルを指定.	122
移行スクリプトの実行プロパティをコマンドラインに指定.	123

付録 D: メタデータキャッシュの設定. 124

メタデータキャッシュの構成（オプション）.	124
Infinispan 属性.	125
Infinispan 属性の編集.	126

索引. 127

序文

『Informatica MDM Multidomain Edition Upgrade Guide』へようこそ。このガイドでは、Informatica^(R) MDM Multidomain Edition の実装を最新バージョンにアップグレードする方法について説明します。現在インストールされているバージョンの『Informatica MDM Multidomain Edition Upgrade Guide』を使用してください。

このガイドは、Informatica MDM Multidomain Edition の実装のアップグレードを担当する技術者を対象としています。

Informatica のリソース

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica グローバルカスタマサポート、Informatica ナレッジベースなどの製品リソースをホストします。Informatica Network には、<https://network.informatica.com> からアクセスしてください。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- ドキュメント、FAQ、ベストプラクティスなどの製品リソースをナレッジベースで検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

ドキュメント、ハウツー記事、ベストプラクティス、PAM などの製品リソースを Informatica Network で検索するには、Informatica ナレッジベースを使用します。

ナレッジベースには、<https://kb.informatica.com> からアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

使用している製品の最新のドキュメントを取得するには、
https://kb.informatica.com/_layouts/ProductDocumentation/Page/ProductDocumentSearch.aspx にあ
る Informatica ナレッジベースを参照してください。

このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム
(infa_documentation@informatica.com) です。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス（PAM）には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベ
ースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica Network メンバである場合は、
PAM
(<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>) に
アクセスできます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスによって開発されたヒントおよびベスト
プラクティスのコレクションです。数多くのデータ管理プロジェクトの経験から開発された Informatica
Velocity には、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を
行ってきた弊社コンサルタントの知識が集約されています。

Informatica Network メンバである場合は、Informatica Velocity リソース
(<http://velocity.informatica.com>) にアクセスできます。

Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から
Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を強化したり拡張したりするソリューションを検索
できるフォーラムです。Informatica の開発者およびパートナーの何百ものソリューションを利用して、プロ
ジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、
<https://marketplace.informatica.com> からアクセスできます。

Informatica グローバルカスタマサポート

Informatica Network の電話またはオンラインサポートからグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト
(<http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers>) を参
照してください。

Informatica Network メンバである場合は、オンラインサポート (<http://network.informatica.com>) を使用
できます。

第 1 章

アップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica MDM Multidomain Edition のアップグレード, 9 ページ](#)
- [アップグレードプロセスの選択, 10 ページ](#)
- [アップグレードの記録, 12 ページ](#)

Informatica MDM Multidomain Edition のアップグレード

Informatica MDM Multidomain Edition をアップグレードしていただきありがとうございます。インストールされているバージョンから MDM Multidomain Edition バージョン 10.2 HotFix 1 に直接アップグレードできます。

重要: すべての MDM コンポーネントは、同じバージョンの MDM Multidomain Edition にアップグレードする必要があります。

MDM Multidomain Edition 環境には、開発環境、テスト環境、および運用環境を含めることができます。これらの各環境をアップグレードする必要があります。ベストプラクティスとして、開発環境を最初にアップグレードします。アップグレードに関する問題を特定し、解決します。開発環境を正常にアップグレードしたら、テスト環境と運用環境を高度な信頼性でアップグレードできます。

はじめる前に

開始する前に、必要なガイドがあることを確認し、製品の可用性マトリックスを確認してください。

- インストールされている MDM Multidomain Edition のバージョンの正しいアップグレードガイドがあることを確認します。タイトルページで、タイトルの「バージョンからのアップグレード」にあるメジャーバージョン番号を確認します。それがインストールされている製品のメジャーバージョン番号と一致していることを確認します。インストールされている製品のバージョン番号を確認するには、MDM Hub コンソールで、[ヘルプ] > [バージョン情報] をクリックします。[インストールの詳細] をクリックします。バージョン番号がリリース名のカラムに表示されます。アップグレード目的では、インストールされている製品に Hotfix が適用されているかどうかは問題になりません。
- ご使用のデータベースおよびアプリケーションサーバーに対応する『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』をダウンロードします。スムーズなアップグレードを実現するには、インストールガイドに記載されているいくつかのタスクを実行する必要があります。
- 「製品の可用性」マトリックスを確認し、MDM Multidomain Edition バージョン 10.2 HotFix 1 のシステム要件の変更について確認します。このマトリックスは、Informatica Network で見つけることができます。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>。

アップグレードプロセスの選択

MDM Multidomain Edition のアップグレードには、次のオプションがあります。

クリーンアップグレード（推奨）

クリーンアップグレードでは、現在の MDM システム要件を満たすマシンで新しい環境を準備します。既存の環境から MDM Hub マスターデータベースとオペレーショナルリファレンスストアのクローンを作成し、クローンのデータベースを新しい環境にコピーし、Hub ストアアップグレードを実行します。『インストールガイド』の指示に従って、Hub サーバーとプロセスサーバーを新しい環境にインストールします。インフラストラクチャの計画の詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition* インフラストラクチャ計画ガイド』を参照してください。

インプレースアップグレード

インプレースアップグレードでは、現在の MDM システム要件に準拠するように、MDM Multidomain Edition を実行するマシンを更新します。その後 MDM コンポーネントをアップグレードします。

アップグレードプロセスの選択についてのガイドライン

アップグレードのタイプによって、選択できるアップグレードプロセスのタイプが決定します。すべての場合において、クリーンアップグレードが推奨されます。

次の表に、アップグレードのタイプと、使用できるアップグレードプロセスを記載します。

アップグレードのタイプ MDM Multidomain Edition	クリーンアップグレード (推奨)	インプレースアップグレード
MDM のメジャー/マイナーバージョンへのアップグレード	○	×
インストールされている MDM のバージョンの HotFix へのアップグレードで、MDM システム要件を満たすためにアプリケーションサーバーをメジャーバージョンに更新する必要がある場合	○	×
インストールされている MDM のバージョンの HotFix へのアップグレードで、MDM システム要件を満たすためにアプリケーションサーバーをメジャーバージョンに更新する必要がない場合	○	○

クリーンアップグレードのアップグレードプロセス（推奨）

クリーンアップグレードのプロセスは、次のフェーズで構成されています。

フェーズ	タスク	手順の場所
1	インストール前のタスク	インストールガイド
2	アップグレード前のタスク	アップグレードガイド
3	Hub ストアのバックアップとクローンを作成し、Hub ストアを新しいマシンにコピーする	このタスクの実行は DBA に依頼
4	Hub ストアのアップグレード	アップグレードガイド
5	Hub サーバーのインストールとインストール後のタスク	インストールガイド
6	プロセスサーバーのインストールとインストール後のタスク	インストールガイド
7	アップグレード後のタスク	アップグレードガイド
8	アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク	インストールガイド
9	ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク	アップグレードガイド
10	サブジェクト領域アダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク	アップグレードガイド
11	リソースキットのインストールタスクと、必要に応じて、リソースキットのインストール後のタスク	インストールガイド

インプレースアップグレードのアップグレードプロセス

インプレースアップグレードのプロセスは、次のフェーズで構成されています。

フェーズ	タスク	手順の場所
1	インストール前のタスク	インストールガイド
2	アップグレード前のタスク	アップグレードガイド
3	Hub ストアのアップグレード	アップグレードガイド
4	Hub サーバーのアップグレード	アップグレードガイド
5	プロセスサーバーのアップグレード	アップグレードガイド
6	リソースキットのアップグレード	アップグレードガイド
7	アップグレード後のタスク	アップグレードガイド

フェーズ	タスク	手順の場所
8	アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク	インストールガイド
9	ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のインストール後のタスク	アップグレードガイド
10	サブジェクト領域アダプタに対する ActiveVOS のインストール後のタスク	アップグレードガイド

アップグレードの記録

アップグレードする前、アップロード中およびアップロード後に、Informatica MDM Hub 環境の詳細をキャプチャして、アップグレードを確認（および必要に応じてトラブルシューティング）する必要があります。アップグレードのトラブルシューティングに対するサポートが必要な場合、この情報のコピーを Informatica グローバルカスタマサポートに提供できます。

以下の表に、アップグレードに関する情報の参照先を示します。

アップグレード情報	確認できる場所
オペレーショナルリファレンスストア（ORS）メタデータ	Hub コンソールのリポジトリマネージャツールによる検証結果 アップグレード前とアップグレード後に ORS メタデータの検証結果を生成します。
構成設定	Hub コンソールのエンタープライズマネージャツールによる環境レポート 環境レポートには、Hub サーバー、Process サーバー、マスターデータベースおよび ORS データベースの情報が記録されています。アップグレード前とアップグレード後に環境レポートを保存します。
Hub サーバーおよび Process サーバーのアップグレードのアップグレードイベント	Informatica MDM Hub インストーラのログファイル
Hub サーバーと Process サーバーの情報	Hub サーバーと Process サーバーのログファイル
Hub コンソール情報	Hub コンソールのログファイル

関連項目：

- [「MDM Hub 環境レポートの保存」](#)（ページ 88）

第 2 章

アップグレード前のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [アップグレード前のタスク, 13 ページ](#)
- [アップグレードの準備, 13 ページ](#)
- [環境の準備, 15 ページ](#)
- [既存のジョブの処理, 17 ページ](#)
- [MDM Hub 構成の更新, 18 ページ](#)
- [BPM アップグレードの準備, 21 ページ](#)

アップグレード前のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらず、環境が適切に構成されていることを確認するため、アップグレード前のタスクを実行します。

アップグレードの準備

アップグレードを準備するには、次のタスクを実行します。

アップグレード タスク	詳細
リリースノート の確認	リリースノートには、インストールおよびアップグレードプロセスの更新に関する情報が含まれています。
リリースガイド の確認	リリースガイドには、新しい機能と変更された動作に関する情報が含まれています。
最新のライセン スファイルの入 手	バージョン 10.2 で、ライセンスファイルが更新されました。MDM Multidomain Edition のアップグレードソフトウェアを要求するときに、最新のライセンスファイルを要求し てください。

アップグレード タスク	詳細
アップグレード 制限の確認	<p>アップグレードを開始する前に、次の条件を確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Informatica MDM Multidomain Edition 実装では、すべてのコンポーネントを同じバージョンで構成する必要があります。複数のバージョンの Informatica MDM Multidomain Edition がある場合は、各バージョンを別々の環境にインストールする必要があります。同じ環境に異なるバージョンの Informatica MDM Multidomain Edition を共存させることはできません。 - Informatica MDM Multidomain Edition のアップグレード中に、環境に大きな変更を加えることはできません。例えば、アップロード・プロセス中に Oracle、IBM DB2、または Microsoft SQL Server データベースをアップグレードすることはできません。 - 付属しているアップグレードスクリプトを使用して、オペレーショナルリファレンスストア（ORS）をアップグレードしておく必要がある。アップグレードツールとしてリポジトリマネージャは使用することを想定されていない。これは、バージョン間で、アーティファクトが一部継承されない場合があったり、継承されてもアーティファクトの内容が不正確な場合があったりするためである。詳細については、『<i>Informatica MDM Multidomain Edition リリースノート</i>』を参照してください。
アップグレード ドキュメントフ ォルダの作成	<p>upgradedoc というフォルダを作成し、メタデータの検証結果、環境レポート、およびログファイルなど、アップグレードの全アーティファクトのコピーを保存します。アップグレード中に問題が発生した場合は、このディレクトリのコピーを Informatica グローバルカスタマサポートに送付して問題を分析してもらう必要があります。</p>
MDM Hub 環境 レポートの確認	<p>Hub コンソールのエンタープライズマネージャツールを使用して、Hub サーバー、プロセスサーバー、MDM Hub マスターデータベース、およびオペレーショナルリファレンスストアのデータベースに対する MDM Hub の現在の設定を確認します。コンポーネントのバージョン履歴も確認します。</p> <p>環境レポートのコピーをアップグレードドキュメントフォルダに保存します。</p>

環境の準備

次のタスクを実行して、環境を準備します。

アップグレードタスク	アップグレードプロセス	詳細
システム要件を満たすための MDM 環境の更新	クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレード	<p>オペレーティングシステム、アプリケーションサーバー、JDK、およびデータベースサーバーの更新が必要になる場合があります。システム要件については、本バージョンの MDM (MDM Multidomain Edition) の「製品可用性マトリックス」を Informatica Network (https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview) で参照してください。</p> <p>選択したアップグレードプロセスに基づいて、次の手順のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none">- [クリーンアップグレード]。現在の MDM システム要件を満たすマシンで新しい環境を準備します。- [インプレースアップグレード]。現在の MDM システム要件に準拠するように、MDM を実行するマシンを更新します。
Visual Studio 2015 の Visual C++ 再頒布可能パッケージのインストール (Windows のみ)	クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレード	<p>Windows システムでは、MDM Multidomain Edition は名前検索機能と照合機能をサポートするために Visual Studio 2015 の Visual C++ 再配付可能パッケージが必要です。</p>
メタデータの検証	クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレード	<p>オペレーショナルリファレンスストア (ORS) に検証エラーがないことを確認します。ORS に無効なメタデータが含まれる場合に Hub ストアをアップグレードすると、予期しない結果が生成される場合があります。ハブコンソールでリポジトリマネージャを使用して、メタデータを検証します。検証上のすべての問題を解決し、メタデータを再検証して、検証上の問題が解決されていることを確認します。</p> <p>最終的な検証結果のコピーをアップグレードドキュメントフォルダ upgradedoc に保存します。</p> <p>MDM Hub コンソールのリポジトリマネージャツールを使用して、検証結果を検証して保存します。</p>
永続的な ID 実装の更新	クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレード	<p>永続的な ID を使用する場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。MDM Multidomain Edition のアップグレードされたバージョンと互換性があるように、永続的な ID 実装を更新する必要があります。</p>

アップグレード タスク	アップグ レードプ ロセス	詳細
実装のバックア ップ	インプレ ースアッ プグレー ド	<p>カスタマイズを保持し、環境を復元できるようにするには、現在の実装をバックアップします。アップグレード中に問題が発生した場合に、バックアップから環境を復元できます。</p> <p>スキーマのバックアップ</p> <p>スキーマのフルバックアップを実行します。アップグレードプロセスで行われたスキーマ変更はロールバックできません。アップグレード中に問題が発生した場合には、スキーマはバックアップからリストアできます。スキーマのバックアップ手順については、データベースのマニュアルを参照してください。</p> <p>Hub Server とプロセスサーバーがインストールされているディレクトリのバックアップ</p> <p>Hub サーバーとプロセスサーバーをインストールする前に、ご使用の環境の Hub サーバーとプロセスサーバーのインストールフォルダをバックアップします。</p> <p>Informatica Data Director アプリケーションのバックアップ</p> <p>Informatica Data Director (IDD) アプリケーションをバックアップします。</p> <p>IDD アプリケーションのエクスポートの詳細については、『<i>Informatica MDM Multidomain Edition Informatica Data Director 実装ガイド</i>』を参照してください。</p> <p>カスタマイズの登録またはバックアップ</p> <p>カスタムクエリ、カスタム関数、ユーザーイグジットなど、ハブコンソールに登録するカスタマイズは、アップグレードプロセス時に保持されます。</p> <p>Hub コンソールに登録していないカスタマイズの最新ソースコードをバックアップします。登録していないカスタマイズは、アップグレード後には使用できなくなります。</p> <p>カスタマイズしたクレンジングエンジン設定ファイルのバックアップ</p> <p>カスタマイズしたクレンジングエンジン設定ファイルをすべてバックアップします。</p>

アップグレード タスク	アップグ レードプ ロセス	詳細
JAVA_HOME 環 境変数の設定	インプレ ースアップ グレード	JBoss または WebLogic。アップグレードを既存のインストールディレ クトリに適用する場合、次の手順を実行します。 1. JBoss 環境で、次のファイルから JAVA_HOME 環境変数を手動で削除し ます。 - Windows: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレ クトリ>\setSiperianEnv.bat - UNIX: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレク トリ>/setSiperianEnv.sh 2. JBoss または WebLogic の環境では、JAVA_HOME 環境変数を、サポー トされている JDK のバージョンのパスに設定します。
JBoss 管理ポー トの設定	インプレ ースアップ グレード	JBoss 環境では、アップグレードする前に、JBoss 管理ポートを cmxserver.properties ファイルで設定する必要があります。このプロパ ティを設定しない場合は、アップグレードが失敗し、エラーが表示されま す。 1. 次のディレクトリに移動します。 <infamdm_install_directory>/hub/server/resources 2. テキストエディタで cmxserver.properties ファイルを開きます。 3. 次のプロパティを追加し、JBoss 管理ポート番号を指定します。 cmx.jboss7.management.port=[port] 4. ファイルを保存します。

既存のジョブの処理

既存のジョブを処理するには、次のタスクを実行します。

アップグレードタ スク	詳細
レコードを含むス テージングテー ブルでのロードジョ ブの実行	Microsoft SQL Server 環境において、レコードを含むステージングテーブル上でロー ドバッチジョブを実行します。 ステージングテーブルにレコードが含まれる場合にオペレーショナル参照ストアを アップグレードすると、ログファイルのサイズが利用可能なハードドライブの容量 を超えるためにアップグレードが失敗する可能性があります。
ステージジョブの 完了とステージテ ーブルの内容の削 除	オペレーショナル参照ストアをアップグレードする前に、実行中のステージジョブ を完了し、ステージテーブルの内容を削除します。 ステージテーブルの内容を削除しないと、Microsoft SQL Server 環境では、オペレ ーショナル参照ストアのアップグレード完了時間が、予期される時間より長くなりま す。

MDM Hub 構成の更新

MDM Hub 構成を更新するには、次のタスクを実行します。

アップグレードタスク	詳細
ORS ユーザーに SYS.V_\$PARAMETER の選択権限を付与する	選択権限を付与するには、以下の SQL 文を実行します。 grant select on SYS.V_\$PARAMETER to <Operational Reference Store user>;
サブジェクト領域の設定で名前から特殊文字を削除する	プロビジョニングツールでは、名前に特殊文字を使用することはできません。サブジェクト領域の設定からビジネスエンティティスキーマを生成する場合は、最初に、サブジェクト領域の設定で名前に特殊文字があれば削除しておく必要があります。
カラム名に予約語が含まれないようにする	MDM Multidomain Edition の最近のバージョンでは、追加のキーワードが予約済みとしてマークされています。実装で予約済みのキーワードを使用しないようにします。 予約語の完全な一覧については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide</i> 』の「Requirements for Defining Schema Objects」セクションを参照してください。 データが含まれるカラムの名前を変更するスクリプトを要求するには、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。
マップされたカラムのデータ型の互換性を確認する	オペレーショナルリファレンスストアに Oracle データベースを使用する場合、ランディングテーブルからステージングテーブルへのマッピングをチェックして、マップされたカラムのデータ型に互換性があるかどうかを確認します。 以前のバージョンでは、マップされたカラムのデータ型に互換性がない、ランディングテーブルからステージングテーブルへのマッピングを作成できましたが、このバージョンから、マップされたカラムのデータ型は互換性があることが必須になっています。データをロードする際にデータ型が一致していないと、ロードは失敗し、ログファイルにエラーが記録されます。 カラムのマッピングの詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide</i> 』を参照してください。
ユーザーに有効な電子メールアドレスがあることを確認する	既存のユーザーが、Hub コンソールのユーザー名に関連付けられた有効な電子メールアドレスを持っていることを確認します。MDM Hub にアクセスするためのパスワードをリセットするには、ユーザーは有効な電子メールアドレスを持っている必要があります。 Hub コンソールのユーザー情報の編集の詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition セキュリティガイド</i> 』を参照してください。 注: Hub コンソールの管理者ユーザーの電子メールアドレスは変更できません。管理者ユーザーの電子メールアドレスを変更するには、CMX_SYSTEM スキーマの C_REPOS_USER テーブルを
インデックスを登録する	カスタムインデックスを含むスキーマをアップグレードする場合は、カスタムインデックスを登録しておく必要があります。カスタムインデックスを登録するには、SIF の API の RegisterCustomIndex を使用します。 RegisterCustomIndex SIF API の詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition サービス統合フレームワークガイド</i> 』を参照してください。

元のスキーマ所有者によるオペレーショナルリファレンスストアの登録

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）データベースのいずれかがプロキシユーザーで登録されている場合は、ORS データベースを元のスキーマ所有者で登録してください。アップグレード操作の実行に必要な特

権を確実に得るには、元のスキーマ所有者で ORS を登録する必要があります。アップグレード後は、ORS をプロキシユーザーで登録してもかまいません。元のデフォルトのスキーマ所有者は CMX_ORS です。

1. Hub コンソールを起動します。
[データベースの変更] ダイアログボックスが表示されます。
2. MDM Hub マスタデータベースを選択して、[接続] をクリックします。
3. 設定ワークベンチにあるデータベースツールを選択します。
4. [書き込みロック] > [ロックの取得] の順に選択します。
5. [データベースの登録] ボタンをクリックします。

Informatica MDM Hub 接続ウィザードが表示され、データベースタイプの選択が求められます。

6. データベースのタイプを選択して [次へ] をクリックします。
7. データベースの接続プロパティを設定します。
 - a. Oracle の接続方式を選択して、[次へ] をクリックします。

以下の Oracle 接続方式を選択できます。

サービス

サービス名を使用して Oracle に接続します。

SID

Oracle のシステム ID を使用して Oracle に接続します。

サービス名と SID 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

[接続プロパティ] ページが表示されます。

- b. 選択する接続タイプの接続プロパティを指定し、[次へ] をクリックします。
以下の接続プロパティを設定することができます。

データベース表示名

Hub コンソールに表示する必要があるオペレーショナルリファレンスストアの名前。

マシン識別子

Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに割り当てられるプレフィックス。

データベースホスト名

Oracle データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。

SID

サーバー上で実行される Oracle データベースのインスタンスを参照する Oracle システム識別子。 [SID] フィールドは、[SID] 接続タイプを選択した場合に表示される。

サービス

Oracle データベースへの接続に使用する Oracle サービスの名前。 [サービス] フィールドは、 [サービス] 接続タイプを選択した場合に表示される。

ポート

Oracle データベースサーバー上で実行される Oracle リスナの TCP ポート。デフォルトは 1521。

Oracle TNS 名

ネットワーク上で認識されているデータベースの名前（アプリケーションサーバーの TNSNAMES.ORA ファイルで定義）。

例: mydatabase.mycompany.com

Oracle TNS 名は、Oracle データベースのインストール時に設定します。Oracle TNS 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

スキーマ名

オペレーショナルリファレンスストアの名前。

ユーザー名

ORS の元のユーザー名を指定する。デフォルトは CMX_ORS。

パスワード

ORS の元のユーザーに関連付けられているパスワード。

サマリページが表示されます。

- c. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。
以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。次のリストに、Oracle 接続タイプの接続 URL のフォーマットを示します。 サービス接続タイプ jdbc:oracle:thin:@//database_host:port/service_name SID 接続タイプ jdbc:oracle:thin:@//database_host:port:sid [サービス] 接続タイプの場合、カスタマイズし、後で別の接続 URL をテストするオプションがあります。
登録後にデータソースを作成する	登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。 注: このオプションを選択しない場合、手動でデータソースを設定する必要があります。

- d. サービス接続タイプには、デフォルトの URL を変更する場合、**【編集】** ボタンをクリックし、URL を指定して **【OK】** をクリックします。
8. **【完了】** をクリックします。
【データベースの登録】 ダイアログボックスが表示されます。
9. **【OK】** をクリックします。
MDM Hub で ORS が登録されます。

BPM アップグレードの準備

BPM アップグレードの準備を行うには、次のタスクを実行します。

ワークフローアダプタの選択

ワークフローアダプタの次のアップグレードオプションを確認し、ニーズに合ったアップグレードオプションを選択します。

現在のワークフローアダプタ	アップグレードオプション
SIPERIAN	<p>推奨されていません。</p> <p>オプション 1</p> <p>SIPERIAN をプライマリワークフローアダプタとして保持します。</p> <p>オプション 2</p> <p>ビジネスエンティティに基づいて、BE ActiveVOS ワークフローアダプタにアップグレードします。BE ActiveVOS ワークフローアダプタを使用するには、ビジネスエンティティ構成が必要です。</p> <p>詳細については、「<i>Migrating IDD Applications to the Business Entity Data Model</i>」を参照してください。</p>
Informatica ActiveVOS	<p>このワークフローアダプタはサブジェクト領域に基づいており、SIF API を使用して動作します。</p> <p>オプション 1</p> <p>Informatica ActiveVOS をプライマリワークフローアダプタとして保持します。</p> <p>オプション 2</p> <p>ビジネスエンティティに基づいて、BE ActiveVOS ワークフローアダプタにアップグレードします。BE ActiveVOS ワークフローアダプタを使用するには、ビジネスエンティティ構成が必要です。</p> <p>詳細については、「<i>Migrating IDD Applications to the Business Entity Data Model</i>」を参照してください。</p>
BE ActiveVOS	<p>このワークフローアダプタは、ビジネスエンティティに基づいており、ビジネスエンティティサービスを使用して動作します。</p> <p>製品可用性マトリックスで定義されている ActiveVOS のバージョンを使用する必要があります。環境内で古いバージョンが検出された場合は、アップグレードプロセスによって必要なバージョンの ActiveVOS がインストールされます。</p>

スタンドアロン ActiveVOS から埋め込みの ActiveVOS への移行を準備する（インプレースアップグレード）

既存のマシンをアップグレードし、スタンドアロン ActiveVOS から埋め込みの ActiveVOS に移行する場合は、次のアップグレードタスクを実行します。

アップグレードタスク	説明
ActiveVOS データソースの削除	スタンドアロン ActiveVOS サーバーが MDM Multidomain Edition と同じ JBoss インスタンス、WebSphere プロファイル、または WebLogic ドメインにある場合、ActiveVOS のデータソースをアプリケーションサーバーから削除します。
WebSphere 環境での URN マッピングの編集	<ol style="list-style-type: none">ActiveVOS コンソールを起動します。ブラウザで、正しいホスト名とポート番号に置き換えて、以下の URL を入力します。<ul style="list-style-type: none">保護されている接続。https://<host>:<port>/activevos保護されていない接続。http://<host>:<port>/activevosActiveVOS コンソールのホームページで、[Administration] > [Configure Server] > [URN Mappings] をクリックします。URN java:comp/env/jdbc/ActiveVOS が URL java:comp/env/jdbc/ActiveVOS にマッピングされていることを確認します。

build.properties ファイルの編集（インプレースアップグレード）

ActiveVOS を使用する場合は、次のタスクを実行して build.properties ファイルを編集します。

アップグレードタスク	詳細
IBM DB2 へのデータベース接続プロパティの設定	<p>IBM DB2 環境では、アップグレード前に、ActiveVOS データベース接続プロパティを <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin の build.properties ファイルに追加します。</p> <p>次のサンプルは、サンプルエントリが含まれる ActiveVOS データベース接続プロパティを示しています。</p> <pre>activevos.db.type=db2 activevos.db.server=localhost activevos.db.port=50000 activevos.db.user=AVOS activevos.db.dbname=INFA102 activevos.db.schemaname=AVOS activevos.db.jdbc.url=jdbc:db2://localhost:50000/INFA102 activevos.b4p.url=http://localhost:9080/active-bpel/services/AeB4PTaskClient-taskOperations</pre>
ActiveVOS インストールディレクトリの構成	<p>アップグレードプロセスでインストールされている ActiveVOS のバージョンがシステム要件を満たしていないことが検出されると、アップグレードプロセスによって、必要なバージョンの ActiveVOS が新しいディレクトリにインストールされます。</p> <p>以前のインストールと同じディレクトリに ActiveVOS をインストールするには、build.properties ファイル内の次のエントリを削除するか、コメントアウトします。</p> <pre>activevosinstall.dir=<ActiveVOS installation directory></pre>

第 3 章

インストール前のタスク

- [インストール前のタスク, 23 ページ](#)

インストール前のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらず、環境が適切に構成されていることを確認するため、インストール前のタスクを実行します。

インストール前のタスク手順については、ご使用の環境に対応する『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』で「インストール前のタスク」の章を参照してください。

第 4 章

Hub ストアのアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Hub ストアのアップグレードの概要, 24 ページ](#)
- [Hub ストアのクローン作成（クリーンアップグレード）, 24 ページ](#)
- [データベースを英語以外のロケールに設定, 25 ページ](#)
- [Verbose モードでの MDM Hub マスターデータベースのアップグレード, 25 ページ](#)
- [サイレントモードでの MDM Hub マスターデータベースのアップグレード, 28 ページ](#)
- [Verbose モードでのオペレーショナルリファレンスストアのデータベースのアップグレード, 29 ページ](#)
- [サイレントモードでのオペレーショナル参照ストアデータベースのアップグレード, 32 ページ](#)
- [アップグレードスクリプトが正常に実行されたことの確認, 33 ページ](#)

Hub ストアのアップグレードの概要

Hub ストアとは、MDM Hub マスターデータベースおよび 1 つまたは複数のオペレーショナルリファレンスストア（ORS）のデータベースが含まれたデータベースです。データベースをアップグレードするには、配布内容に含まれているスクリプトを使用します。

データベース環境を英語以外のロケールに設定する場合は、Hub ストアをアップグレードする前に、必ず文字セットを Unicode 文字にします。アップグレードが正常に完了したら、設定するロケールを選択できます。ロケールは、データベースレベルにおいてでなく、ユーザーアカウント設定として保存されます。

注: データベースディレクトリまたはフォルダ名へのパスにスペースを含めないようにしてください。ディレクトリまたはフォルダ名にスペースがあるパスを指定すると、アップグレードは失敗します。

Hub ストアのクローン作成（クリーンアップグレード）

クリーンアップグレードを実行する場合は、DBA に依頼して、マスターデータベースとオペレーショナルリファレンスストアのバックアップとクローンを作成します。クローンのデータベースを新しい環境にコピーします。マスターデータベースとオペレーショナルリファレンスストアが新しい環境でアップグレードされます。

データベースを英語以外のロケールに設定

Hub ストアデータベースの環境を英語以外のロケールに設定する場合は、アップグレードスクリプトを実行する前に、データベースの環境で Unicode 文字セットが使用されていることを確認します。文字セットを設定するには、データベースの環境変数を使用します。

アップグレードスクリプトにより、メタデータが英語に翻訳され、翻訳キーがメタデータに関連付けられます。アップグレードが成功したら、各 MDM Hub コンソールユーザーはユーザーインターフェースとデータベース用にサポートされているロケールを選択できるようになります。各ユーザーのロケール選択はあらゆるユーザーデータとともにマスターデータベースに保存されます。

例えば、Oracle データベース環境に韓国語ロケールで作成されている MDM Hub ストアを考えます。アップグレードする前に、データベースの環境変数 `NLS_LANG` を必ず `KOREAN_KOREA.AL32UTF8`（韓国語の Unicode）に設定しておきます。アップグレード後は、ロケールを韓国語のままにすることも、サポートされている別のロケールを選択することもできます。

次の表に、文字セットを設定するのに使用できるデータベース環境変数を示します。

データベース	環境変数名
Oracle	<code>NLS_LANG</code>
IBM DB2	<code>DB2CODEPAGE</code>
Microsoft SQL Server	<code>SET LANGUAGE</code> 句（セッションのみ）

データベース環境変数の詳細については、使用するデータベースのマニュアルを参照してください。

Verbose モードでの MDM Hub マスタデータベースのアップグレード

MDM Hub マスタデータベースをアップグレードするには、アップグレードスクリプトを実行します。

注: Hub コンソールを使用してメタデータの変更を行わなかった場合、データベースのアップグレードスクリプトが失敗する可能性があります。スクリプトが失敗した場合、Informatica グローバルカスタマサポートに連絡してください。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX の場合: `<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin`
 - Windows の場合: `<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\database\bin`
3. 次のコマンドを使って MDM Hub マスタデータベースのアップグレードスクリプトを実行します。
 - UNIX の場合: `sip_ant.sh updatemasterdatabase`
 - Windows の場合: `sip_ant.bat updatemasterdatabase`
4. プロンプトに回答します。

Oracle 環境の場合、MDM Hub マスターデータベースに次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。ORACLE を指定する。
Oracle 接続タイプ (SERVICE、SID) を入力。[SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 SERVICE Oracle に接続するサービス名を使用します。 SID Oracle に接続する Oracle システム ID を使用します。 デフォルトは SERVICE。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
データベースのポート番号を入力。 [1521]	データベースリスナが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
データベースサービス名を入力 [orcl]	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。デフォルトは orcl。
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]	Oracle データベースに接続するために使用される TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@//<host_name>:<port>/<service_name>"。	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。
データベース SID を入力。 [orcl]	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。
マスターデータベースのユーザー名 [cmx_system]	MDM Hub のマスターデータベース名は変更できない。
マスターデータベースのユーザーのパスワードを入力	MDM Hub マスターデータベースにアクセスするためのパスワード。

IBM DB2 環境の場合、MDM Hub マスターデータベースに次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
データベースのポート番号を入力。 [50000]	データベースリスナが使用するポート番号。デフォルトは 50000。

プロンプト	説明
データベース名を入力 [SIP97]	データベースの名前。デフォルトは SIP97。
スキーマ所有者のユーザー名を入力 [DB2ADMIN]	cmx_system スキーマの所有者名。
スキーマ所有者のユーザーパスワードを入力。	スキーマ所有者のパスワード。

Microsoft SQL Server 環境の場合、MDM Hub マスターデータベースに次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。MSSQL を指定する。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
データベースのポート番号を入力 [1433]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1433。
マスターデータベースのユーザーのパスワードを入力	MDM Hub マスターデータベースにアクセスするためのパスワード。

5. マスターデータベースのアップグレード時に次のプロンプトが表示されたら、下記のように回答します。

This upgrade should be performed by a DBA to grant 'create sequence' privileges for the master database. The master database does not have 'create sequence' privileges, you can either grant it now (manually) and then move forward or re-start the upgrade, or direct this process to do so for you now, and continue the current upgrade.

Do you want the process to create this privilege? Yes/No

- **No** と回答すると、アップグレードプロセスは、特権が確かにユーザーに付与されたかどうかを再びチェックし、TNS 名のプロンプトに戻る。
- **Yes** と回答した場合には、アップグレードプロセスを続行するために、次のプロンプトに回答する必要がある。

DBA のユーザー名を入力してください。

DBA パスワードを入力してください。

6. JBoss 環境で、アプリケーションサーバーを再起動します。
7. CMX_SYSTEM アップグレードログファイルのコピーをアップグレードドキュメントディレクトリに保存します。変更スクリプトごとにログファイルが 1 つずつあります。

これらのファイルはアップグレードプロセスによって次の場所に保存されます。

- UNIX の場合:
`<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/resources/database/db_changes/<database name: データベース名>/Master`
- Windows の場合:
`<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\server\resources\database\<db_changes>\<database name: データベース名>\Master`

サイレントモードでの MDM Hub マスターデータベースのアップグレード

サイレントモードで MDM Hub マスターデータベースをアップグレードするには、環境に応じた適切なコマンドでアップグレードスクリプトを実行します。

注: コマンドラインにサイレントアップグレードプロセスを表示するには、`-Dnoprompt` を `true` に設定します。コマンドラインに開始時刻と終了時刻のみを表示するには、`-Dnoprompt` を `true -silent` に設定します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX。 <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
 - Windows。 <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\database\bin
3. Oracle 環境で MDM Hub マスターデータベースをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updatemasterdatabase -Dmaster.tnsname=<TNS name> -Dmaster.connectiontype=<SID or SERVICE> -Dmaster.server=<host name> -Dmaster.port=<port> -Dmaster.sid=<SID name> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Dcmx.username=<administrator username> -Dcmx.password=<administrator password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=ORACLE -Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updatemasterdatabase -Dmaster.tnsname=<TNS name> -Dmaster.connectiontype=<SID or SERVICE> -Dmaster.server=<host name> -Dmaster.port=<port> -Dmaster.sid=<SID name> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Dcmx.username=<administrator username> -Dcmx.password=<administrator password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=ORACLE -Dnoprompt=true
```
4. IBM DB2 環境で MDM Hub マスターデータベースをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updatemasterdatabase -Dcmx.server.masterdatabase.type=DB2 -Dmaster.hostname=<host name> -Dmaster.server.port=<port> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Ddba.username=<DBA username> -Ddba.password=<DBA password> -Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updatemasterdatabase -Dcmx.server.masterdatabase.type=DB2 -Dmaster.hostname=<host name> -Dmaster.port=<port> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Ddba.username=<DBA username> -Ddba.password=<DBA password> -Dnoprompt=true
```
5. Microsoft SQL Server 環境で MDM Hub マスターデータベースをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updatemasterdatabase -Dmaster.hostname=<hostname> -Dmaster.port=<port> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Dcmx.username=<administrator username> -Dcmx.password=<administrator password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=MSSQL -Dmaster.database=<MDM Hub Master Database name> -Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updatemasterdatabase -Dmaster.hostname=<hostname> -Dmaster.port=<port> -Dmaster.username=<MDM Hub Master Database username> -Dmaster.password=<MDM Hub Master Database password> -Dcmx.username=<administrator username> -Dcmx.password=<administrator password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=MSSQL -Dmaster.database=<MDM Hub Master Database name> -Dnoprompt=true
```

Verbose モードでのオペレーショナルリファレンスストアのデータベースのアップグレード

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）のデータベースをアップグレードするには、アップグレードスクリプトを実行します。ORS のデータベースをアップグレードする前に、MDM Hub マスターデータベースをアップグレードします。

注: Hub コンソールを使用してメタデータの変更を行わなかった場合、データベースのアップグレードスクリプトが失敗する可能性があります。スクリプトが失敗した場合、Informatica グローバルカスタマサポートに連絡してください。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. コマンドプロンプトを開きます。
3. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
 - Windows の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\database\bin
4. 次のコマンドを使って、オペレーショナルリファレンスストアのアップグレードスクリプトを実行します。
 - UNIX。 ./sip_ant.sh updateorsdatabase
 - Windows。 sip_ant.bat updateorsdatabase
5. プロンプトに回答します。
Oracle 環境の場合、次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力（ORACLE、MSSQL、DB2）	データベースタイプ。ORACLE を指定する。
Oracle 接続タイプ（SERVICE、SID）を入力。 [SERVICE]	接続タイプ。以下の値を使用する。 SERVICE Oracle に接続するサービス名を使用する。 SID Oracle に接続する Oracle システム ID を使用する。 デフォルトは SERVICE。
オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
オペレーショナルリファレンスストアデータベースのポート番号を入力 [1521]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1521。
オペレーショナル参照ストアのデータベースサービス名を入力 [orcl]	Oracle サービスの名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SERVICE の場合に表示される。

プロンプト	説明
Oracle Net の接続 ID (TNS 名) を入力。[orcl]	Oracle TNS 名。デフォルトは orcl。
マスターデータベースの接続 URL: "jdbc:oracle:thin:@//<host_name>:<port>/<service_name>"。 接続 URL を変更しますか (y/n) [n]	Oracle 接続タイプ SERVICE の接続 URL。デフォルトの接続 URL を変更する場合は、y を入力する。デフォルトの接続 URL を使用する場合は、n を入力する。
データベース SID を入力。[orcl]	Oracle システム ID の名前。このプロンプトは、選択した Oracle 接続タイプが SID の場合に表示される。
オペレーショナル参照ストアのデータベース名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアのデータベースの名前。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。
リストからロケール名を入力します (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。
DBA ユーザー名を入力 [sys]	DBA レベルの権限を持つユーザーの名前。
DBA のパスワードを入力	DBA レベルの権限を持つユーザーのパスワード。
ORS タイムラインの粒度の整数コードを次のように入力: 年 5、月 4、日 3、時 2、分 1、秒 0 [3]	使用するタイムラインの単位を指定する。タイムラインの粒度に入力した値は、アップグレードプロセスでは無視される。インストール時に設定したタイムラインの粒度は変更できない。

IBM DB2 環境の場合、次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプの入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
オペレーショナルリファレンスストアデータベースのポート番号を入力 [50000]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 50000。
オペレーショナルリファレンスストアのデータベース名を入力 [SIP97]	データベースの名前。デフォルトは SIP97。
オペレーショナル参照ストアのデータベース名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアのデータベースの名前。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。

プロンプト	説明
リスト (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) からロケール名を入力。[en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。
DBA ユーザー名を入力 [sys]	DBA レベルの権限を持つユーザーの名前。
DBA のパスワードを入力	DBA レベルの権限を持つユーザーのパスワード。
ORS タイムラインの粒度の整数コードを次のように入力: 年 5、月 4、日 3、時 2、分 1、秒 0 [3]	使用するタイムラインの単位を指定する。 タイムラインの粒度に入力した値は、アップグレードプロセスでは無視される。インストール時に設定したタイムラインの粒度は変更できない。

Microsoft SQL Server 環境の場合、次の情報を提供してください。

プロンプト	説明
データベースタイプの入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。MSSQL を指定する。
オペレーショナル参照ストアのデータベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
オペレーショナルリファレンスストアデータベースのポート番号を入力 [1433]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 1433。
オペレーショナル参照ストアのデータベース名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアのデータベースの名前。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアのデータベースのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。
リスト (de、en_US、fr、ja、ko、zh_CN) からロケール名を入力。[en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。
DBA ユーザー名を入力 [sys]	DBA レベルの権限を持つユーザーの名前。
DBA のパスワードを入力	DBA レベルの権限を持つユーザーのパスワード。
ORS タイムラインの粒度の整数コードを次のように入力: 年 5、月 4、日 3、時 2、分 1、秒 0 [3]	使用するタイムラインの単位を指定する。 タイムラインの粒度に入力した値は、アップグレードプロセスでは無視される。インストール時に設定したタイムラインの粒度は変更できない。

- Hub コンソールで、アップグレードされた ORS を登録します。
- アプリケーションサーバーを再起動します。
- CMX_ORS アップグレードログファイルのコピーをアップグレードドキュメントディレクトリに保存します。変更スクリプトごとにログファイルが 1 つずつあります。

これらのファイルはアップグレードプロセスによって次の場所に保存されます。

- UNIX の場合:

```
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/resources/database/  
db_changes/<database name: データベース名>/ORS
```

- Windows の場合:

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\server\resources\database
 \db_changes\<database name: データベース名>\ORS

重要: sip_ant ログファイルは、コマンドラインから sip_ant を実行するたびに上書きされます。sip_ant スクリプトを実行して別の ORS をアップグレードする前に、バックアップコピーを保存する必要があります。

関連項目：

- [「MDM Hub 環境レポートの保存」 \(ページ 88\)](#)

サイレントモードでのオペレーショナル参照ストアデータベースのアップグレード

サイレントモードでオペレーショナル参照ストアデータベースをアップグレードするには、環境に応じた適切なコマンドでアップグレードスクリプトを実行します。

注: コマンドラインにサイレントアップグレードプロセスを表示するには、-Dnoprompt を true に設定します。コマンドラインにサイレントアップグレードプロセスの開始時刻と終了時刻のみを表示するには、-Dnoprompt を true -silent に設定します。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 次のディレクトリに移動します。
 - UNIX。<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/database/bin
 - Windows。<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\database\bin

3. Oracle 環境でオペレーショナル参照ストアをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updateorsdatabase -Dors.tnsname=<tns name> -Dors.connectiontype=sid -Dors.hostname=<hostname> -Dors.port=<port> -Dors.sid=<Oracle SID> -Dors.username=<ORS username> -Dors.password=<ORS password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=oracle -Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updateorsdatabase -Dors.tnsname=<tns name> -Dors.connectiontype=sid -Dors.hostname=<hostname> -Dors.port=<port> -Dors.sid=<Oracle SID> -Dors.username=<ORS username> -Dors.password=<ORS password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=oracle -Dnoprompt=true
```

4. IBM DB2 環境でオペレーショナル参照ストアをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updateorsdatabase -Dors.hostname=<host name> -Dors.database=db2database% -Dors.port=<port> -Dors.username=<ORS username> -Dors.password=<ORS password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=db2 -Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updateorsdatabase -Dors.hostname=<host name> -Dors.database=db2database% -Dors.port=<port> -Dors.username=<ORS username> -Dors.password=<ORS password> -Dcmx.server.masterdatabase.type=db2 -Dnoprompt=true
```

5. Microsoft SQL Server 環境でオペレーショナル参照ストアをアップグレードするには、次のコマンドを実行します。

UNIX。

```
sip_ant.sh updateorsdatabase -Dors.hostname=<hostname> -Dors.port=<port> -Dors.username=<ORS username>  
-Dors.password=<ORS password> -Dors.database=<database name> -Dcmx.server.masterdatabase.type=MSSQL  
-Dnoprompt=true
```

Windows。

```
sip_ant.bat updateorsdatabase -Dors.hostname=<hostname> -Dors.port=<port> -Dors.username=<ORS username>  
-Dors.password=<ORS password> -Dors.database=<database name> -Dcmx.server.masterdatabase.type=MSSQL  
-Dnoprompt=true
```

アップグレードスクリプトが正常に実行されたことの確認

C_REPOS_DB_CHANGE テーブルをチェックして、Hub ストアのアップグレードスクリプトが正常に実行されたことを確認します。

スクリプトは、前回のアップグレード中に実行されなかった場合には、アップグレードプロセス中に実行されます。スクリプトが失敗したことが C_REPOS_DB_CHANGE テーブルで示された場合は、Informatica グローバルカスタマサポートに連絡してください。

第 5 章

Hub サーバーのアップグレード (インプレースアップグレード)

この章では、以下の項目について説明します。

- [Hub サーバーのアップグレードの概要, 34 ページ](#)
- [グラフィカルモードでの Hub サーバーのアップグレード, 35 ページ](#)
- [コンソールモードでの Hub サーバーのアップグレード, 38 ページ](#)
- [サイレントモードでの Hub サーバーのアップグレード, 41 ページ](#)
- [patchInstallSetup スクリプトの実行, 44 ページ](#)
- [アップグレードドキュメントフォルダへの Hub サーバーのログファイルのコピー, 45 ページ](#)
- [Hub Server のアップグレードの再適用 \(オプション\) , 46 ページ](#)

Hub サーバーのアップグレードの概要

Hub サーバーでは MDM のコア/一般サービス（アクセス、セキュリティ、およびセッション管理など）が実行されます。Hub サーバーはアプリケーションサーバー環境にデプロイされます。

注: 本章はインプレースアップグレードについてのみです。クリーンアップグレードについては、『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』の手順に従って、ご使用のアプリケーションサーバーおよびデータベース環境に Hub サーバーをインストールしてください。

Hub サーバーは、グラフィカルモード、コンソールモード、またはサイレントモードでアップグレードできます。Hub サーバーをグラフィカルモードまたはコンソールモードでアップグレードするには、ディストリビューション内に用意されている Hub サーバーのインストーラを実行します。Hub サーバーをサイレントモードでアップグレードするには、サイレントインストーラのプロパティファイルを設定します。

サポートされていないバージョンの ActiveVOS サーバーを使用する場合、Hub サーバーのアップグレード中に、ActiveVOS サーバーをインストールするように求められます。

Hub サーバーのインストーラでは、パッチインストールとフルインストールが区別され、インストール時にユーザーは既存の MDM Hub インストールをターゲットとして指定します。既存の Hub サーバーインストールを上書きする前に、MDM Hub インストーラは重要なファイルのバックアップを作成します。

グラフィカルモードでの Hub サーバーのアップグレード

Hub サーバーをグラフィカルモードでアップグレードするには、Hub サーバーのインストーラを実行します。

1. Hub サーバーのインストールに使用したユーザー名を使用してログインします。
2. Hub サーバーがデプロイされているアプリケーションサーバーを起動します。
3. コマンドプロンプトを開き、配布ディレクトリ内の Hub サーバーのインストーラに移動します。デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。
 - UNIX の場合: <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmsserver
 - Windows の場合: <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\windows\mrmsserver
4. 次のコマンドを実行します。
 - UNIX の場合: hub_install.bin
 - Windows の場合: hub_install.exe
5. **【概要】** ウィンドウで **【次へ】** をクリックします。
【使用許諾契約】 ウィンドウが表示されます。
6. 使用許諾契約の条件を確認して同意します。**【次へ】** をクリックします。
7. Hub サーバーのインストール場所を選択します。Hub サーバーのインストールフォルダには siperian-mrm.ear ファイルが含まれます。**【次へ】** をクリックします。
バージョン警告メッセージが表示されます。
8. **【OK】** をクリックして既存の Hub サーバーのインストールをアップグレードします。
9. 以前のインストールで WebLogic をアプリケーションサーバーとして使用した場合、WebLogic Admin のパスワードを入力するように求めるメッセージが Hub サーバーのインストーラに表示されます。WebLogic のパスワードを入力します。
10. 埋め込み ActiveVOS をインストールする場合は、**【はい】** を選択して以下の手順を実行します。
 - a. インストールフォルダを指定します。以前の ActiveVOS のインストールと同じフォルダに ActiveVOS をインストールすることはできません。**【ActiveVOS インストールフォルダを選択】** ページで、デフォルトのインストールパスを受け入れるか、または希望する場所を指定します。**【次へ】** をクリックします。
 - b. **【データベース情報】** ページで、ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、**【次へ】** をクリックします。
 - c. **【アプリケーションサーバー Web URL】** ページで、デフォルトの URL を受け入れるか、または ActiveVOS Web サービスを呼び出すのに使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。**【次へ】** をクリックします。

この URL は、インストール後のセットアップスクリプトによって、ActiveVOS Web サービスの呼び出し、定義済みの MDM ワークフローの ActiveVOS へのデプロイ、および URN マッピングの作成に使用されます。
 - d. **【ActiveVOS インストーラ】** ページで **【選択】** をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS_Server インストールファイルを指定します。**【次へ】** をクリックします。
 - e. 管理者ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。

- f. **【次へ】** をクリックします。
11. 旧バージョンの埋め込み ActiveVOS がインストールされている場合は、以下の手順を実行します。

注: アップグレードプロセスで古いバージョンの埋め込み ActiveVOS が検出された場合、Hub サーバーインストーラからは ActiveVOS を新しいディレクトリにインストールするように求めるメッセージが表示されます。埋め込み ActiveVOS を以前のインストールと同じディレクトリにインストールするには、[「BPM アップグレードの準備」 \(ページ 21\)](#) を参照してください。

 - a. インストールフォルダを指定します。以前の ActiveVOS のインストールと同じフォルダに ActiveVOS をインストールすることはできません。[ActiveVOS インストールフォルダを選択] ページで、望ましい場所を指定します。**【次へ】** をクリックします。
 - b. **【データベース情報】** ページで、ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、**【次へ】** をクリックします。

注: スタンドアロン ActiveVOS から埋め込み ActiveVOS に移行する場合、スタンドアロン ActiveVOS スキーマの詳細を入力します。
 - c. **【アプリケーションサーバー Web URL】** ページで、デフォルトの URL を受け入れるか、または ActiveVOS Web サービスを呼び出すのに使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。**【次へ】** をクリックします。

この URL は、インストール後のセットアップスクリプトによって、ActiveVOS Web サービスの呼び出し、定義済みの MDM ワークフローの ActiveVOS へのデプロイ、および URN マッピングの作成に使用されます。
 - d. **【ActiveVOS インストーラ】** ページで **【選択】** をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS_Server インストールファイルを指定します。**【次へ】** をクリックします。
 - e. 管理者ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
 - f. **【次へ】** をクリックします。
12. 正しいバージョンの埋め込み ActiveVOS がインストールされている場合は、以下の手順を実行します。
 - a. 管理者ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS コンソールの管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
 - b. ActiveVOS データベーススキーマ作成時に指定した ActiveVOS データベースの資格情報を入力します。**【次へ】** をクリックします。
 - c. **【次へ】** をクリックします。
13. Informatica Platform の次のいずれかのインストールオプションを選択します。
 - **【はい】**。Informatica Platform をインストールする。
 - **【いいえ】**。Informatica Platform をインストールしない。
14. 前の手順で **【はい】** を選択した場合は、**【選択】** をクリックして、次の Informatica Platform のファイルの場所を参照します。
 - インストール応答ファイル
 - Platform インストールファイル
15. **【製品使用ツールキット】** ページで、組織が属する業種と環境タイプを選択します。

16. プロキシサーバーを使用する場合は、**【はい】** を選択してプロキシサーバーの詳細情報を入力します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択します。

次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。

- プロキシサーバーの名前/IP
- プロキシサーバーのポート
- プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
- プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
- プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。

17. **【次へ】** をクリックします。

【デプロイ】 ウィンドウが表示されます。

18. Hub Server EAR ファイルのデプロイを自動にするか手動にするかを選択してから **【次へ】** をクリックします。

オプション	条件
スクリプトをこのインストール中に実行する	<p>インストールが正常終了したら Hub Server EAR ファイルが自動でデプロイされます。</p> <p>次の ActiveVOS シナリオのいずれかで、次のアプリケーションサーバー環境のいずれかを使用する場合は、このオプションを選択します。</p> <p>アプリケーションサーバー環境:</p> <ul style="list-style-type: none">• JBoss スタンドアロン環境• WebSphere スタンドアロン環境 <p>ActiveVOS シナリオ:</p> <ul style="list-style-type: none">• ActiveVOS をインストールすることを選択し、ActiveVOS の他のバージョンはこの環境にインストールされていない。• ActiveVOS をインストールすることを選択し、環境には ActiveVOS のサポート対象バージョンがある。サポート対象バージョンについては、PAM（製品可用性マトリックス）で確認してください。• ActiveVOS をインストールしないことを選択する。 <p>重要: ActiveVOS をインストールすることを選択しているが、環境には ActiveVOS のサポート対象外バージョンがある場合は、【後で実行する】 を選択します。</p>
後で実行する	<p>Hub Server EAR ファイルを手動でパッケージ化してデプロイします。</p> <p>ActiveVOS の有無にかかわらず、次のアプリケーションサーバー環境のいずれかを使用する場合は、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">• Weblogic スタンドアロン環境• Weblogic クラスタ化環境• JBoss クラスタ化環境• WebSphere クラスタ化環境 <p>ActiveVOS のサポート対象外バージョンがあるアプリケーションサーバー環境を使用している場合は、このオプションを選択します。ActiveVOS スキーマをサポート対象バージョンにアップグレードしてから手動でデプロイする必要があります。</p>

【インストール前のサマリ】 ウィンドウが表示されます。

19. いずれかのオプションを変更するには、**【前へ】** ボタンをクリックして前の選択を変更します。
20. サマリウィンドウで設定内容を確認したら、**【インストール】** をクリックしてインストールプロセスを開始します。

Hub サーバーのインストーラがシステムを設定する間、インストーラには【しばらくお待ちください】画面が表示されます。Hub サーバーのインストーラは重要なファイルを、MDM Hub インストールディレクトリのバックアップフォルダに格納されているアーカイブにバックアップします。アーカイブのファイル名には、次の例に示す形式が使用されます。

Informatica MDM Hub Server-2010-09-27_12-13.jar

インストールが完了すると、【インストールの完了】ウィンドウが表示されます。

21. 【完了】をクリックして Hub サーバーインストーラを終了します。

注: アップグレードが正常に完了しなかった場合、アップグレードが失敗したことを示すウィンドウが表示され、エラーメッセージを含むログファイルの場所が示されます。

22. 【後で実行する】を選択した場合は、Hub Server EAR ファイルを再パッケージ化してデプロイします。

- a. 環境に ActiveVOS のサポート対象外バージョンがある場合は、ActiveVOS スキーマをサポート対象バージョンに更新します。
- b. 次のコマンドを実行して、EAR ファイルを再パッケージします。

UNIX の場合:

```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
./sip_ant.sh repack
```

Windows の場合:

```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin
sip_ant.bat repack
```

- c. アプリケーションサーバーの管理コンソールで、Hub サーバーの EAR ファイルを手動でデプロイします。アプリケーションサーバーのドキュメントを参照してください。

23. アプリケーションサーバーを再起動します。

コンソールモードでの Hub サーバーのアップグレード

UNIX では、Hub サーバーをコンソールモードでアップグレードできます。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. MDM Hub ディストリビューション内の次のディレクトリに移動します。
UNIX の場合: <MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmsrver
3. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。
./hub_install.bin -i console
4. アップグレードで選択するロケールに対応する番号を入力し、**Enter** キーを押します。
アップグレードに関する概要情報が表示されます。
5. **Enter** キーを押します。
使用許諾契約が表示されます。
6. 使用許諾契約に目を通します。使用許諾契約の条項に同意する場合は **Y** と入力し、同意しない場合は **N** と入力してインストールプログラムを終了します。
7. **Enter** キーを押します。
前の手順で **Y** と入力した場合、インストールフォルダに関する情報が表示されます。

8. Hub サーバーをインストールしたディレクトリを指定します。
 - デフォルトのフォルダを選択する場合は、**Enter** キーを押す。
 - パスを変更する場合は、インストールフォルダの絶対パスを入力し、**Enter** キーを押します。
9. インストールフォルダの場所を確認します。インストールフォルダを確認して **Y** と入力するか、または **N** と入力してインストールフォルダを変更します。

バージョン警告メッセージが表示されます。
10. **Enter** キーを押して、続行することを確認します。
11. WebLogic 環境では、WebLogic パスワードを入力して **Enter** キーを押します。
12. 埋め込み ActiveVOS をインストールする場合は、**Enter** キーを押して [はい] を選択し、以下の手順を実行します。
 - a. ActiveVOS サーバーをインストールする場所を指定します。以前の ActiveVOS のインストールと同じフォルダに ActiveVOS をインストールすることはできません。
 - b. ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、[次へ] をクリックします。
 - c. MDM Web サービスおよび ActiveVOS Web サービスを呼び出すのに使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。
 - d. [ActiveVOS インストーラ] ページで [選択] をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS_Server インストールファイルを指定します。
 - e. ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS サーバー管理コンソールで管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
13. 旧バージョンの ActiveVOS がインストールされている場合は、以下の手順を実行します。
 - a. ActiveVOS サーバーをインストールする場所を指定します。以前の ActiveVOS のインストールと同じフォルダに ActiveVOS をインストールすることはできません。
 - b. ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、[次へ] をクリックします。

注: スタンドアロン ActiveVOS から埋め込み ActiveVOS に移行する場合、スタンドアロン ActiveVOS スキーマの詳細を入力します。
 - c. MDM Web サービスおよび ActiveVOS Web サービスを呼び出すのに使用する URL を指定します。URL にアプリケーションサーバーに接続するための正しいポート番号が含まれていることを確認します。
 - d. [ActiveVOS インストーラ] ページで [選択] をクリックし、配布パッケージ内の ActiveVOS_Server インストールファイルを指定します。
 - e. ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS サーバー管理コンソールで管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
14. 正しいバージョンの埋め込み ActiveVOS がインストールされている場合は、以下の手順を実行します。
 - a. ユーザー名とパスワードを入力し、ActiveVOS サーバー管理コンソールで管理者ユーザーを作成します。

重要: このユーザー名とパスワードは、アプリケーションサーバーで作成した ActiveVOS コンソールのユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。

- b. ActiveVOS データベーススキーマを作成したときに指定したデータベース情報を入力し、**【次へ】** をクリックします。
15. **Enter** キーを押します。
Informatica Platform のインストールプロンプトが表示されます。
16. Informatica Platform をインストールする場合、続行するには **Enter** キーを押します。インストールせずにキャンセルする場合は、2 を入力して **Enter** を押します。
Informatica Platform のインストール応答ファイルおよびアーカイブファイルの場所に関するプロンプトが表示されます。
17. Informatica Platform のインストール応答ファイルおよびアーカイブファイルの場所を入力して、**Enter** キーを押します。
18. 製品使用ツールキットオプションを指定します。
- 組織が属する業界を入力し、**Enter** キーを押します。
 - 環境タイプを入力します。Production に 1、Test/QA に 2、Development に 3 を入力してから **Enter** キーを押します。
19. プロキシサーバーがあるかどうかを選択します。ある場合は、**Enter** キーを押します。そうでない場合は、2 を入力して **Enter** キーを押します。
次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
- プロキシサーバーの名前/IP
 - プロキシサーバーのポート
 - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
 - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
 - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。
- インストールの設定のサマリが表示されます。
20. Hub Server EAR ファイルのデプロイを自動にするか手動にするかを選択してから **【次へ】** をクリックします。

オプション	条件
スクリプトをこのインストール中に実行する	<p>インストールが正常終了したら Hub Server EAR ファイルが自動でデプロイされます。 次の ActiveVOS シナリオのいずれかで、次のアプリケーションサーバー環境のいずれかを使用する場合は、このオプションを選択します。 アプリケーションサーバー環境:</p> <ul style="list-style-type: none"> JBoss スタンドアロン環境 WebSphere スタンドアロン環境 <p>ActiveVOS シナリオ:</p> <ul style="list-style-type: none"> ActiveVOS をインストールすることを選択し、ActiveVOS の他のバージョンはこの環境にインストールされていない。 ActiveVOS をインストールすることを選択し、環境には ActiveVOS のサポート対象バージョンがある。サポート対象バージョンについては、PAM（製品可用性マトリックス）で確認してください。 ActiveVOS をインストールしないことを選択する。 <p>重要: ActiveVOS をインストールすることを選択しているが、環境には ActiveVOS のサポート対象外バージョンがある場合は、【後で実行する】 を選択します。</p>

オプション	条件
後で実行する	<p>Hub Server EAR ファイルを手動でパッケージ化してデプロイします。</p> <p>ActiveVOS の有無にかかわらず、次のアプリケーションサーバー環境のいずれかを使用する場合は、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Weblogic スタンドアロン環境 • Weblogic クラスタ化環境 • JBoss クラスタ化環境 • WebSphere クラスタ化環境 <p>ActiveVOS のサポート対象外バージョンがあるアプリケーションサーバー環境を使用している場合は、このオプションを選択します。ActiveVOS スキーマをサポート対象バージョンにアップグレードしてから手動でデプロイする必要があります。</p>

【インストール前のサマリ】ウィンドウが表示されます。

21. **Enter** キーを押します。
アップグレードの設定のサマリが表示されます。
22. アップグレード前のサマリの情報を確認します。情報が正しければ、**Enter** キーを押してアップグレードを開始します。変更する必要がある場合は、特定の情報に対して BACK と入力して変更を行います。
プロセスが完了すると、アップグレードの完了に関する情報が表示されます。
23. **Enter** キーを押してインストーラを終了します。

サイレントモードでの Hub サーバーのアップグレード

サイレントモードでは、ユーザーとの対話なしで Hub サーバーをアップグレードできます。複数のインストールがある場合や、マシンクラスタでアップグレードする必要がある場合は、サイレントモードを実行できます。サイレントアップグレードでは、進捗やエラーメッセージは表示されません。

Hub サーバーのサイレントアップグレードを実行する前に、サイレントアップグレードのプロパティファイルを設定しておく必要があります。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントアップグレードのプロセスは、不正なアプリケーションサーバーパスまたはポートなど、設定が正しくない場合でも正常に完了する場合があります。プロパティファイルに正しい設定がされていることを確認する必要があります。

Hub サーバーのインストール先となるマシンのハードディスクに、Hub サーバーアップグレードファイルをコピーします。サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. インストールプロパティファイルを設定し、そのプロパティファイル内でインストールオプションを指定する。
2. インストールプロパティファイルを使用してアップグレードを実行する。

プロパティファイルの設定

サイレントアップグレードプロセスに影響を与えるプロパティファイルのパラメータの値を確認します。

1. Hub サーバーのインストール時に設定したプロパティファイルを検索します。

2. テキストエディタを使用してファイルを開き、サイレントアップグレードプロセスに影響を与えるパラメータの値を確認します。

次の表で、確認するアップグレードパラメータについて説明します。

プロパティ名	説明
USER_INSTALL_DIR	Hub サーバーをインストールしたディレクトリ。 例: C:\><MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server。 プロパティファイルでは、バックスラッシュ文字をエスケープする必要があります。インストールディレクトリパスを指定する際は、二重バックスラッシュを使用します。
SIP.APPSERVER.PASSWORD	WebLogic にアクセスするためのパスワード。WebLogic 環境用です。
RUN_DEPLOYMENT_FLAG	サイレントアップグレードの一部として、postInstallSetup スクリプトを実行します。サイレントアップグレードの最後に postInstallSetup を実行する場合は、1 を設定します。postInstallSetup を実行しない場合は、0 を設定します。

3. バンドルとしてライセンス供与された ActiveVOS サーバーのバージョンをインストールする場合は、ActiveVOS のプロパティをプロパティファイルに追加します。

- a. このリリースに付属している silentInstallServer_sample.properties ファイルを開きます。
- b. ActiveVOS を検索します。
- c. [ActiveVOS のインストール] セクションをプロパティファイルにコピーします。

```
#####
##### ActiveVOS Server installation #####
#####

## Do you want to install ActiveVOS (Yes/No)
AVOS.INSTALL=Yes
## Path to ActiveVOS Installer (ActiveVOS_Server_windows_9.2.4.3.exe for Windows or
ActiveVOS_Server_unix_9.2.4.3.sh for Linux/UNIX)
AVOS_INSTALLER_PATH=c:\>\ActiveVOS_Server_windows_9.2.4.3.exe
## ActiveVOS server install directory
AVOS_INSTALL_DIR=C:\>\infamdm\avos\server

## Database type is the same as for HUB (There is no ability to set a different database type for
ActiveVOS)
## Oracle connection data
## Connection Type SID or Service Name
AVOS.ORACLE.CONNECTION.TYPE="Service Name"
AVOS.DB.SERVER=localhost
AVOS.DB.PORT=1521
## Oracle SID name or service name
AVOS.DB.SID=orcl
AVOS.DB.SCHEMA_NAME=avos
AVOS.DB.PASSWORD=!!cmx!!

## DB2 connection data
AVOS.DB.SERVER=localhost
AVOS.DB.PORT=50000
AVOS.DB.DBNAME=AVOS
AVOS.DB.SCHEMA_NAME=AVOS
AVOS.DB.USER=avos
AVOS.DB.PASSWORD=!!cmx!!

## MSSQL connection data
```

```
AVOS.DB.SERVER=localhost
AVOS.DB.PORT=1433
AVOS.DB.DBNAME=avos
AVOS.DB.USER=avos
AVOS.DB.PASSWORD=!!cmx!!
```

##If you are moving from standalone ActiveVOS to embedded ActiveVOS, enter the details for the standalone ActiveVOS schema.

- d. プロパティファイルで、ActiveVOS データベースの情報を指定するとともに、サポートされている他のデータベースのプロパティを削除します。プロパティのヘルプが必要な場合は、環境に合わせて『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』を参照してください。

4. Informatica Platform をインストールする場合、Informatica Platform の次のプロパティをサイレントインストールのプロパティファイルに追加して設定します。

```
## If you want to install Informatica Platform, set to 1
## If you DO NOT want to install Informatica Platform, set to 0
INSTALL.PLATFORM.YES=1
## Path to the Informatica Platform installer (zip or tar file)
INFA.PLATFORM.ZIP=C:\\961HF1_Server_Installer_winem-64t.zip
## For UNIX: INFA.PLATFORM.ZIP=/export/home/user/961HF1_Server_Installer_linux-x64.tar
## Path to silent installer properties file
INFA.PLATFORM.PROPERTIES=C:\\SilentInput.properties
```

5. 次の製品使用ツールキットのプロパティをサイレントインストールのプロパティファイルに追加して設定します。

```
#Product Usage Toolkit Installation
#CSM_TYPE is the type of Product Usage Toolkit installation.
# valid values are:Production,Test,Development. Should not be blank.
CSM_TYPE=Production
```

If the network has a proxy server, fill in the following parameters (leave empty if no proxy):

```
# proxy server host
CSM_HOST=
# proxy server port
CSM_PORT=
# Proxy server domain name (leave blank, if not applicable)
CSM_DOMAIN=
# Proxy server user name (leave blank, if not applicable)
CSM_PROXY_USER_NAME=
#Proxy server password (leave blank, if not applicable)
CSM_PROXY_PASSWORD=
```

6. ライセンス供与された ActiveVOS サーバーのバージョンを使用する場合は、サイレントインストールのプロパティファイルに以下のプロパティを追加して設定します。

```
SIP.APPSERVER.WEB.URL=http://localhost:8080
## Avos console's administrator username
AVOS.CONSOLE.USER=aadmin
## Avos console's administrator password
AVOS.CONSOLE.PASSWORD=admin
##The user name and password must be the same as the ActiveVOS Console user name and password
that was created in the application server during the pre-installation process.
```

サイレントアップグレードの実行

プロパティファイルの設定後、サイレントアップグレードを開始できます。

1. アプリケーションサーバーが動作していることを確認します。
2. コマンドウィンドウを開きます。

3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: `./hub_install.bin -f <location of silent properties file for hub server: Hub サーバーのサイレントプロパティファイルの場所>`

Windows の場合: `hub_install.exe -f <location of silent properties file for hub server: Hub サーバーのサイレントプロパティファイルの場所>`

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Hub サーバーの `postInstallSetup` スクリプトをサイレントインストールの一部として実行した場合、`postinstallSetup.log` ファイルをチェックしてアップグレードが正常に行われたことを確認します。

ログファイルは、以下のディレクトリから利用できます。

UNIX の場合: `<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/logs/`

Windows の場合: `<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\logs\`

patchInstallSetup スクリプトの実行

Hub サーバーのインストール中に手動デプロイを選択した場合、`patchInstallSetup` スクリプトを実行する必要があります。

1. 次のディレクトリに移動します。 `<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server`
2. 次のコマンドを実行して、Hub サーバーアプリケーションをデプロイし、アプリケーションサーバーの設定に変更を適用します。

UNIX の場合:

注: UNIX でパスワードに感嘆符 (!) を含める場合、感嘆符の前にバックスラッシュを付ける必要があります。例えば、パスワードが `!!cmx!!` の場合は、`\!\\cmx\\! \\` と入力します。

WebLogic

```
patchInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<WebLogic password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

重要: WebLogic 12.2.1.3 以降の環境で、ActiveVOS をインストールすることにした場合、または WebLogic T3S プロトコルを使用することにした場合は、決定に一致するオプションを追加します。

- インストールした ActiveVOS。 `-Dinstall.avos.patch=true`
- 使用した T3S プロトコル。 `-Dweblogic.naming.protocol=t3s`

WebSphere (セキュリティ有効)

```
patchInstallSetup.sh -Dwebsphere.password=<WebSphere password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ無効)

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

Windows の場合:

WebLogic

```
patchInstallSetup.bat -Dweblogic.password=<WebLogic password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

重要: WebLogic 12.2.1.3 以降の環境で、ActiveVOS をインストールすることにした場合、または WebLogic T3S プロトコルを使用することにした場合は、決定に一致するオプションを追加します。

- インストールした ActiveVOS。-Dinstall.avos.patch=true
- 使用した T3S プロトコル。-Dweblogic.naming.protocol=t3s

WebSphere (セキュリティ有効)

```
patchInstallSetup.bat -Dwebsphere.password=<WebSphere password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ無効)

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

アップグレードドキュメントフォルダへの Hub サーバーのログファイルのコピー

Hub サーバーのログファイルのコピーを保存します。これらのログファイルは、アップグレードのトラブルシューティングを行う場合に使用します。

Hub サーバーのログファイルを upgradedoc アップグレードドキュメントフォルダにコピーします。これらのファイルは hub_server_upgrade などの別のフォルダに保存してください。クラスタ内の複数の Hub サーバーをアップグレードした場合は、Hub サーバーの各インスタンスのファイルを個別のフォルダに保存します。

次の表に、コピーするログファイルを示します。

ファイル	説明
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/Infamdm_Hub_Server_InstallLog.xml	Hub サーバーのインストールに関するログメッセージを含む。
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/infamdm_installer_debug.txt	デバッグメッセージと、アップグレードプロセスの実行時に選択したすべてのオプションが含まれる。
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/logs/patchInstallSetup.log	patchInstallSetup スクリプトの実行結果が含まれる。

ファイル	説明
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/logs/cmserver.log	Hub サーバーログが含まれる。このファイルは、Hub サーバーの起動時に Hub サーバーにより作成される。
アプリケーションサーバーのログファイル。	ツリーの、アプリケーションサーバーのインストールディレクトリ内にあります。

Hub Server のアップグレードの再適用（オプション）

Hub サーバーのアップグレードが完了した場合に、Hub サーバーのアップグレードを再適用することはアップグレードプロセスによって許可されません。Hub サーバーのアップグレードを再適用する例は、アップグレードプロセス中にハードウェアが故障した場合などです。また、このプロセスは、アップグレードのテストを行って、前のバージョンのソフトウェアに戻す場合にも実行できます。

- 次のディレクトリにある siperian-mrm.ear ファイルをバックアップします。
 - UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server
 - Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server
- アップグレード手順を繰り返します。インストールコマンドにパラメータ-DSIPERIAN_FORCED_PATCH_INSTALL=true を追加します。
例えば、UNIX でアップグレードをグラフィカルモードで再適用する場合は、次のコマンドを実行します。
hub_install.bin -DSIPERIAN_FORCED_PATCH_INSTALL=true

第 6 章

プロセスサーバーのアップグレード ド（インプレースアップグレード）

この章では、以下の項目について説明します。

- [Process サーバーアップグレードの概要, 47 ページ](#)
- [グラフィカルモードでのプロセスサーバーのアップグレード, 48 ページ](#)
- [コンソールモードでのプロセスサーバーのアップグレード, 50 ページ](#)
- [サイレントモードでのプロセスサーバーのアップグレード, 51 ページ](#)
- [Informatica Address Verification 5 統合へのアップグレード手順, 53 ページ](#)
- [一致ポピュレーションの設定, 55 ページ](#)
- [アップグレードドキュメントディレクトリへのプロセスサーバーのログファイルのコピー, 57 ページ](#)
- [プロセスサーバーのアップグレードの再適用（オプション）, 57 ページ](#)

Process サーバーアップグレードの概要

Process サーバーは、データクレンジング操作、一致操作、およびバッチジョブを取り扱うサプレットです。Process サーバーをアップグレードするには、配布内容に含まれている Process サーバーのインストーラを実行します。アップグレードプロセス時に既存の MDM Hub インストール先をターゲットの場所として選択すると、Process サーバーのインストーラにより、フルインストールでなくアップグレードと認識されます。既存の Process サーバーインストールを上書きする前に、Process サーバーインストーラは重要なファイルのバックアップを作成します。

注: 本章はインプレースアップグレードについてのみです。クリーンアップグレードについては、『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』の手順に従って、ご使用のアプリケーションサーバーおよびデータベース環境にプロセスサーバーをインストールしてください。

グラフィカルモードでのプロセスサーバーのアップグレード

プロセスサーバーをグラフィカルモードでアップグレードするには、プロセスサーバーのインストーラを実行します。

1. Process サーバーのインストール時に使用したユーザー名でログインします。
2. Process サーバーがデプロイされているアプリケーションサーバーを起動します。
3. コマンドプロンプトを開き、配布ディレクトリ内のプロセスサーバーのインストーラに移動します。デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。
 - UNIX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ><operating system name: オペレーティングシステム名>/mrmlcleanse
 - Windows の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\windows\mrmlcleanse
4. 次のコマンドを実行します。
 - UNIX の場合:hub_cleanse_install.bin
 - Windows の場合:hub_cleanse_install.exe
5. **【概要】** ウィンドウで **【次へ】** をクリックします。
【使用許諾契約】 ウィンドウが表示されます。
6. **【使用許諾契約に同意する】** オプションを選択し、**【次へ】** をクリックします。
【インストールフォルダの選択】ウィンドウが表示されます。
7. プロセスサーバーのインストール場所を選択します。プロセスサーバーのインストールフォルダには siperian-mrm-cleanse.ear ファイルが含まれます。
 - デフォルトの場所を選択するには、**【次へ】** をクリックします。
 - 別の場所を指定するには、**【選択】** をクリックして **【次へ】** をクリックします。**バージョン警告メッセージ**が表示されます。
8. **【OK】** をクリックして、続行することを確認します。
【ライセンスファイルの場所の入力】 ウィンドウが表示されます。
9. ライセンスファイルの場所を選択して、**【次へ】** をクリックします。
10. 以前のインストールで WebLogic をアプリケーションサーバーとして使用した場合、WebLogic Admin のパスワードを入力するように求めるメッセージが Process サーバーのインストーラに表示されます。WebLogic のパスワードを入力します。
11. **【製品使用ツールキット】** ページで **【環境タイプ】** を選択します。
12. プロキシサーバーがある場合は、**【はい】** を選択してプロキシサーバーの詳細を入力します。そうでない場合は、**【いいえ】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。
次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
 - プロキシサーバーの名前/IP
 - プロキシサーバーのポート
 - プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
 - プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
 - プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。

13. **【次へ】** をクリックします。
[デプロイ] ページが表示されます。
14. 自動または手動のどちらでデプロイするかを選択します。自動的にデプロイするには **【はい】** をクリックし、手動でデプロイするには **【いいえ】** をクリックした後、**【次へ】** をクリックします。
- WebSphere スタンドアロン環境または JBoss スタンドアロン環境では、自動的にデプロイするために **【はい】** をクリックして、**【次へ】** をクリックします。
 - WebLogic またはクラスタ環境では、手動でデプロイするために **【いいえ】** をクリックして、**【次へ】** をクリックします。
- 【インストール前のサマリ】** ウィンドウが表示されます。
15. いずれかのオプションを変更するには、**【前へ】** ボタンをクリックして前の選択を変更します。
16. サマリウィンドウで設定内容を確認したら、**【インストール】** をクリックしてインストールプロセスを開始します。
- Process サーバーのインストーラがシステムを設定する間、インストーラには **【しばらくお待ちください】** 画面が表示されます。Process サーバーのインストーラは重要なファイルを、MDM Hub インストールディレクトリのバックアップフォルダに格納されているアーカイブにバックアップします。アーカイブのファイル名には、次の例に示す形式が使用されます。
- Siperian Hub Cleanse Match Server-2010-05-12_18-09.jar
- インストールが完了すると、**【インストールの完了】** ウィンドウが表示されます。
17. **【完了】** をクリックして Process サーバーインストーラを終了します。
- 注:** アップグレードが正常に完了しなかった場合、アップグレードが失敗したことを示すウィンドウが表示され、エラーメッセージを含むログファイルの場所が示されます。
18. 手順 [14](#) で **【いいえ】** を選択した場合は、EAR ファイルを再パッケージして手動でデプロイします。
- a. 次のコマンドを実行して、EAR ファイルを再パッケージします。
- UNIX の場合:
- ```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/bin
./sip_ant.sh repack
```
- Windows の場合:
- ```
cd <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse\bin
sip_ant.bat repack
```
- b. アプリケーションサーバーの管理コンソールでプロセスサーバーの EAR ファイルを手動でデプロイします。アプリケーションサーバーのドキュメントを参照してください。
19. SSA-Name3 ライブラリファイルを<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/lib/upgrade/SSA から<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/lib にコピーします。
20. アプリケーションサーバーを再起動します。

コンソールモードでのプロセスサーバーのアップグレード

UNIX では、Process サーバーをコンソールモードでアップグレードできます。

注: RedHat Linux で Process サーバーをアップグレードする場合は、ルートユーザーを使用しないでください。ルートユーザーには、InstallAnywhere に必要な.profile がありません。代わりに、別のユーザープロファイルを作成して、Process サーバーをアップグレードします。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. MDM Hub ディストリビューション内の次のディレクトリに移動します。
Solaris の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/solaris/
mrmcleanse
HP-UX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/hpux/mrmcleanse
Linux の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/linux/mrmcleanse
AIX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/aix/mrmcleanse
3. コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。
./hub_cleanse_install.bin -i console
4. インストールで選択するロケールに対応する番号を入力し、**Enter** を押します。
インストールに関する概要情報が表示されます。
5. **Enter** キーを押します。
使用許諾契約が表示されます。
6. 使用許諾契約に目を通します。**Y** と入力して、使用許諾契約に同意するか、または使用許諾契約に同意しない場合は、**N** と入力してインストールプログラムを終了します。
7. **Enter** キーを押します。
前の手順で **Y** と入力した場合、インストールフォルダに関する情報が表示されます。
8. プロセスサーバーをインストールしたディレクトリを指定します。
 - デフォルトの場所を選択する場合は、**Enter** キーを押します。
 - パスを変更する場合は、インストールフォルダの絶対パスを入力し、**Enter** キーを押します。
9. インストールフォルダの場所を確認します。インストールフォルダを確認して **Y** と入力するか、または **N** と入力してインストールフォルダを変更します。
バージョン警告メッセージが表示されます。
10. **Enter** キーを押して、続行することを確認します。
ライセンスファイルの場所を尋ねるプロンプトが表示されます。
11. ライセンスファイルの場所を絶対パスで入力し、**Enter** を押します。
12. WebLogic 環境では、WebLogic パスワードを入力して **Enter** キーを押します。
13. [製品使用ツールキット] オプションから、環境タイプを選択します。Production に 1、Test/QA に 2、Development に 3 を入力してから **Enter** キーを押します。
14. プロキシサーバーがあるかどうかを選択します。ある場合は、**Enter** キーを押します。そうでない場合は、2 を入力して **Enter** キーを押します。
次のプロキシサーバーの詳細を入力できます。
 - プロキシサーバーの名前/IP

- プロキシサーバーのポート
- プロキシサーバーのドメイン名。不要な場合は空白のままにします。
- プロキシサーバーのユーザー名。不要な場合は空白のままにします。
- プロキシサーバーのパスワード。不要な場合は空白のままにします。

インストールの設定のサマリが表示されます。

15. インストール中に `postInstallSetup` を実行するか、後で手動で実行するか、いずれかの方法を選択します。
16. **Enter** キーを押します。
アップグレードの設定のサマリが表示されます。
17. アップグレード前のサマリの情報を確認します。情報が正しければ、**Enter** キーを押してアップグレードを開始します。変更する必要がある場合は、特定の情報に対して `BACK` と入力して変更を行います。
プロセスが完了すると、アップグレードの完了に関する情報が表示されます。
18. **Enter** キーを押してインストーラを終了します。

サイレントモードでのプロセスサーバーのアップグレード

サイレントモードでは、ユーザーとの対話なしで Process サーバーをアップグレードできます。複数のインストールがある場合や、マシクラスタでアップグレードする必要がある場合は、サイレントモードを実行できます。サイレントアップグレードでは、進捗やエラーメッセージは表示されません。

Process サーバーのサイレントアップグレードを実行する前に、サイレントアップグレードのプロパティファイルを設定する必要があります。インストーラはファイルを読み込んでアップグレードオプションを確認します。サイレントアップグレードのプロセスは、不正なアプリケーションサーバーパスまたはポート設定など、設定が正しくない場合でも正常に完了する場合があります。プロパティファイルに正しい設定がされていることを確認する必要があります。

Process サーバーのアップグレード先となるマシンのハードディスクに、Process サーバーのアップグレードファイルをコピーします。サイレントモードでアップグレードするには、以下のタスクを実行します。

1. インストールプロパティファイルを設定し、そのプロパティファイル内でインストールオプションを指定する。
2. インストールプロパティファイルを使用してアップグレードを実行する。

プロパティファイルの設定

サイレントアップグレードプロセスに影響を与えるプロパティファイルのパラメータの値を確認します。

1. プロセスサーバーのインストール時に設定したプロパティファイルを検索します。
2. テキストエディタを使用してファイルを開き、サイレントアップグレードプロセスに影響を与えるパラメータの値を確認します。

次の表で、確認するアップグレードパラメータについて説明します。

プロパティ名	説明
USER_INSTALL_DIR	プロセスサーバーをインストールしたディレクトリ。 例: C:\>\<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\cleanse。 プロパティファイルでは、バックスラッシュ文字をエスケープする必要があります。インストールディレクトリパスを指定する際は、二重バックスラッシュを使用します。
SIP.APPSERVER.PASSWORD	WebLogic にアクセスするためのパスワード。WebLogic 環境用です。
RUN_DEPLOYMENT_FLAG	サイレントアップグレードの一部として、postInstallSetup スクリプトを実行します。サイレントアップグレードの最後に postInstallSetup を実行する場合は、1 を設定します。postInstallSetup を実行しない場合は、0 を設定します。

3. 次の製品使用ツールキットのプロパティをサイレントインストールのプロパティファイルに追加して設定します。

```
#Product Usage Toolkit Installation
#CSM_TYPE is the type of Product Usage Toolkit installation.
# valid values are:Production,Test,Development. Should not be blank.
CSM_TYPE=Production

# If the network has a proxy server, fill in the following parameters (leave empty if no proxy):
# proxy server host
CSM_HOST=
# proxy server port
CSM_PORT=
# Proxy server domain name (leave blank, if not applicable)
CSM_DOMAIN=
# Proxy server user name (leave blank, if not applicable)
CSM_PROXY_USER_NAME=
#Proxy server password (leave blank, if not applicable)
CSM_PROXY_PASSWORD=
```

プロセスサーバーのサイレントアップグレードの実行

プロパティファイルの設定後、サイレントアップグレードを開始できます。

1. アプリケーションサーバーが動作していることを確認します。
2. コマンドウィンドウを開きます。
3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: ./hub_cleanse_install.bin -f <location of silent properties file for process server: プロセスサーバーのサイレントプロパティファイルの場所>

Windows の場合: hub_cleanse_install.exe -f <location of silent properties file for process server: プロセスサーバーのサイレントプロパティファイルの場所>

サイレントアップグレードがバックグラウンドで実行されます。プロセスにしばらく時間がかかる場合があります。Process サーバーのインストール後スクリプトをサイレントインストールの一部として実行した場合には、postinstallSetup.log ファイルをチェックしてアップグレードが正常に行われたことを確認します。

ログファイルは、以下のディレクトリから利用できます。

UNIX の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/logs/

Windows の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse\logs\

Informatica Address Verification 5 統合へのアップグレード手順

この節では、MDM Hub 実装で Informatica Address Verification 5 を使用するようにアップグレードする手順について説明します。

注: この節は、Informatica Address Verification を使用するライセンスを持つユーザーに適用されます。

Informatica Address Verification 5 統合にアップグレードするには、次の手順を実行する必要があります。

1. cmxcleanse.properties ファイルを開きます。このファイルは次の場所にあります。

Windows: <infamdm_install_directory>\hub\cleanse\resources

UNIX: <infamdm_install_directory>/hub/cleanse/resources

2. 次の Informatica Address Verification 5 のプロパティが cmxcleanse.properties ファイルに設定されていることを確認します。

Windows:

```
cleanse.library.addressDoctor.property.SetConfigFile=C:\infamdm\hub\cleanse\resources\AddressDoctor\5\SetConfig.xml
cleanse.library.addressDoctor.property.ParametersFile=C:\infamdm\hub\cleanse\resources\AddressDoctor\5\Parameters.xml
cleanse.library.addressDoctor.property.DefaultCorrectionType=PARAMETERS_DEFAULT
```

UNIX:

```
cleanse.library.addressDoctor.property.SetConfigFile=/u1/infamdm/hub/cleanse/resources/AddressDoctor/5/SetConfig.xml
cleanse.library.addressDoctor.property.ParametersFile=/u1/infamdm/hub/cleanse/resources/AddressDoctor/5/Parameters.xml
cleanse.library.addressDoctor.property.DefaultCorrectionType=PARAMETERS_DEFAULT
```

3. プロパティファイルを保存して閉じます。
4. SetConfig.xml および Parameters.xml を、cmxcleanse.properties ファイルで指定された場所にコピーします。

SetConfig.xml ファイルのサンプルは次のとおりです。

```
<!DOCTYPE SetConfig SYSTEM 'SetConfig.dtd'>
<SetConfig>
  <General WriteXMLEncoding="UTF-16LE" WriteXMLBOM="NEVER"
    MaxMemoryUsageMB="600" MaxAddressObjectCount="10" MaxThreadCount="10" />

  <UnlockCode>79FYUAXAVSR0KLV1TDC6PAQVVC3KM14FZC</UnlockCode>

  <DataBase CountryISO3="ALL" Type="BATCH_INTERACTIVE" Path="c:\addressdoctor\5"
    PreloadingType="NONE" />

  <DataBase CountryISO3="ALL" Type="FASTCOMPLETION" Path="c:\addressdoctor\5"
    PreloadingType="NONE" />

  <DataBase CountryISO3="ALL" Type="CERTIFIED" Path="c:\addressdoctor\5"
    PreloadingType="NONE" />

  <DataBase CountryISO3="ALL" Type="GEOCODING" Path="c:\addressdoctor\5"
    PreloadingType="NONE" />

  <DataBase CountryISO3="ALL" Type="SUPPLEMENTARY" Path="c:\addressdoctor\5"
    PreloadingType="NONE" />
</SetConfig>
```

Parameters.xml ファイルのサンプルは次のとおりです。

```
<?xml version="1.0" encoding="iso-8859-1"?>
<!DOCTYPE Parameters SYSTEM 'Parameters.dtd'>
<Parameters
  WriteXMLEncoding="UTF-16LE"
```

```

WriteXMLBOM="NEVER">
<Process
  Mode="BATCH"
  EnrichmentGeoCoding="ON"
  EnrichmentCASS="ON"
  EnrichmentSERP="ON"
  EnrichmentSNA="ON"
  EnrichmentSupplementaryGB="ON"
  EnrichmentSupplementaryUS="ON" />
<Input
  Encoding="UTF-16LE"
  FormatType="ALL"
  FormatWithCountry="ON"
  FormatDelimiter="PIPE" />
<Result
  AddressElements="STANDARD"
  Encoding="UTF-16LE"
  CountryType="NAME_EN"
  FormatDelimiter="PIPE" />
</Parameters>

```

5. 構成ファイル SetConfig.xml で、Informatica Address Verification 5 のロック解除コードを指定します。

SetConfig.xml ファイルおよび Parameters.xml ファイルの詳細については、Informatica Address Verification 5 のドキュメントを参照してください。

6. 次の場所から、Informatica Address Verification 5 のライブラリをコピーします。

Windows: <infadm_install_directory>\hub\cleanse\lib\upgrade\AddressDoctor

UNIX: <infadm_install_directory>/hub/cleanse/lib/upgrade/AddressDoctor

7. JADE.dll（または同等の Informatica Address Verification 4 ライブラリ）を、次の場所にある Informatica Address Verification 5 ライブラリに置き換えます。

Windows: <infadm_install_directory>\hub\cleanse\lib

UNIX: <infadm_install_directory>/hub/cleanse/lib

詳細については、以下の場所にある libupdate_readme.txt ドキュメントを参照してください。

Windows: <infadm_install_directory>\hub\cleanse\lib\upgrade

UNIX: <infadm_install_directory>/hub/cleanse/lib/upgrade

8. アプリケーションサーバーを再起動します。

現在実行しているアプリケーションサーバーと同じユーザー名でログインし、アプリケーションサーバー起動中に例外が発生しないことを確認します。

9. Process サーバーを再起動します。

Process サーバーの初期化中に、ターミナルコンソールに次のようなメッセージが表示されます。

```
[INFO ] com.siperian.mrm.cleanse.addressDoctor.Library: Initializing AddressDoctor5
```

10. クレンジング関数というツールを起動します。

11. 書き込みロックを取得します（[書き込みロック] > [ロックの取得]）。

12. Informatica Address Verification クレンジング関数を選択します。

13. **[更新]** ボタンをクリックします。

Informatica Address Verification 5 クレンジング関数が Informatica Address Verification クレンジング関数ノードに追加されます。

一致ポピュレーションの設定

一致ポピュレーションには、マッチプロセスに使用する標準ポピュレーションセットが含まれます。サポートされている国、言語、またはポピュレーションごとに標準ポピュレーションセットがあります。マッチルールに使用する一致ポピュレーションを有効にする必要があります。

一致ポピュレーションは、Informatica MDM Hub のインストールの *population.ysp* ファイルとして用意されています。ポピュレーション名は ysp ファイル名と同じです。Japanese ポピュレーションを追加する際に、Person_Name_Kanji 一致フィールドを使用する場合は、_Kanji をポピュレーション名に追加します。例えば、Japan_Kanji または Japan_i_Kanji になります。この場合、標準の Person_Name 一致フィールドは使用できません。

使用するポピュレーションには、SSA-Name3 バージョンの MDM Hub との互換性が必要です。追加のポピュレーションファイルが必要な場合、または更新されたポピュレーションファイルを新しいバージョンにアップグレードする必要がある場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。この製品で要求する最初のポピュレーションファイルは無料です。他の国用のポピュレーションファイルが必要な場合や、MDM Hub の最新バージョンにアップグレードするために更新されたポピュレーションファイルが必要な場合があります。

カスタムポピュレーションファイルのアップグレード

アップグレードプロセス中に、ポピュレーションファイルがアップグレードされます。ポピュレーションファイルをカスタマイズした場合は、Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせ、アップグレードされたプロパティファイルにカスタマイズを適用します。

一致ポピュレーションの有効化

マッチルールに使用する一致ポピュレーションを有効にする必要があります。

1. <population: ポピュレーション>.ysp ファイルを以下の場所にコピーします。
UNIX の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/resources/match
Windows の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse\resources\match
2. C_REPOS_SSA_POPULATION メタデータテーブルで、ポピュレーションが登録されていることを確認します。
MDM Hub インストールのシードデータベースには、C_REPOS_SSA_POPULATION テーブルに登録されたいくつかのポピュレーションがありますが、有効にはなっていません。
3. C_REPOS_SSA_POPULATION テーブルにポピュレーションが含まれていない場合、それをテーブルに追加して有効にします。
ポピュレーション名は ysp ファイル名と同じです。例えば、ysp ファイルの名前が US.ysp なら、ポピュレーション名は US です。
ポピュレーションをオペレーショナルリファレンスストアに追加するには、以下の手順を実行します。
IBM DB2 または Oracle の場合:
 - a. ポピュレーションを追加するオペレーショナルリファレンスストアスキーマに接続します。
 - b. SQL*Plus で、次のディレクトリにあるスクリプト (add_std_ssa_population.sql) を実行します。
UNIX の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/server/resources/database/custom_scripts/oracle

Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\server\resources
\database\custom_scripts\oracle

- c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
追加するポピュレーションを入力します	ポピュレーションの名前。
ROWID_SSA_POP の値を入力します (例: INFA.0001)。デフォルトは [INFA.0001]	C_REPOS_SSA_POPULATION メタデータテーブルの ROWID_SSA_POP カラムの一意の値デフォルトは INFA.0001 です。

ポピュレーションは C_REPOS_SSA_POPULATION テーブルに登録されています。

- d. 次のコマンドを実行して、ポピュレーションを有効にします。

```
UPDATE c_repos_ssa_population SET enabled_ind = 1 WHERE population_name = '<Your Population>';
COMMIT;
```

Microsoft SQL Server の場合:

- a. 次のディレクトリにある add_std_ssa_population.bat スクリプトを実行します。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\server\resources\database
\custom_scripts\MSSQL

- b. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
CMX_ORS DB ("localhost") の MSSQL インスタンスを持つホスト名	Microsoft SQL Server インスタンスのホスト名
cmx_ors ユーザー名 ("cmx_ors")	オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名。
cmx_ors ユーザーパスワード	オペレーショナルリファレンスストアのパスワード。
ポピュレーション名を入力します (注: Japan ポピュレーションまたは Japan_i ポピュレーションに Person_Name_Kanji を使用する場合は、接尾辞「_Kanji」を名前の最後に追加します)。デフォルトは (" ")	ポピュレーションの名前。
ROWID_SSA_POP の値を入力します (例: INFA.0001)。デフォルトは (INFA.0001)	C_REPOS_SSA_POPULATION メタデータテーブルの ROWID_SSA_POP カラムの一意の値

ポピュレーションは C_REPOS_SSA_POPULATION テーブルに登録されています。

- c. 次のコマンドを実行して、ポピュレーションを有効にします。

```
USE <Operational Reference Store user: オペレーショナル参照ストアユーザー>
GO
UPDATE [dbo].[C_REPOS_SSA_POPULATION] SET ENABLED_IND = 1 WHERE POPULATION_NAME = '<population: ポピュレーション>'
```

4. Process サーバーを再起動します。

5. Hub コンソールにログインし、ポピュレーションが有効になっていることを確認します。
ポピュレーションは、ベースオブジェクトの【一致/マージ設定】ユーザーインタフェースに表示されます。

アップグレードドキュメントディレクトリへのプロセスサーバーのログファイルのコピー

Hub サーバーのログファイルのコピーを保存します。これらのログファイルは、アップグレードのトラブルシューティングを行う場合に使用します。

プロセスサーバーのログファイルをアップグレードドキュメントフォルダにコピーします。これらのファイルは cleanse_match_server_upgrade などの別のフォルダに保存してください。クラスタ内の複数のプロセスサーバーをアップグレードした場合は、プロセスサーバーの各インスタンスのファイルを個別のフォルダに保存します。

次の表に、コピーするログファイルを示します。

ファイル	説明
<cleanse installation directory: クレンジングインストールディレクトリ>/hub/cleanse/Infamdm_Hub_Cleanse_Match_Server_InstallLog.xml	Process サーバーインストールのログファイルが含まれる。
<cleanse installation directory: クレンジングインストールディレクトリ>/hub/cleanse/infamdm_installer_debug.txt	デバッグメッセージと、アップグレードプロセスの実行時に選択したすべてのオプションが含まれる。
<cleanse installation directory: クレンジングインストールディレクトリ>/hub/cleanse/logs/patchInstallSetup.log	patchInstallSetup スクリプトの実行結果が含まれる。
<cleanse installation directory: クレンジングインストールディレクトリ>/hub/cleanse/logs/cmserver.log	Process サーバーのログが含まれる。
アプリケーションサーバーのログファイル。	ツリーの、アプリケーションサーバーのインストールディレクトリ内にあります。

プロセスサーバーのアップグレードの再適用（オプション）

プロセスサーバーのアップグレードが完了した場合に、プロセスサーバーのアップグレードを再適用することはアップグレードプロセスによって許可されません。プロセスサーバーのアップグレードを再適用する例は、アップグレードプロセス中にハードウェアが故障した場合などです。また、このプロシージャは、アップグレードのテストを行って、前のバージョンのソフトウェアに戻す場合にも実行できます。

1. 次のディレクトリにある siperian-mrm.ear ファイルをバックアップします。
 - UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse

- Windows の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse
2. アップグレード手順を繰り返します。インストールコマンドにパラメータ-DSIPERIAN_FORCED_PATCH_INSTALL=true を追加します。
例えば、UNIX でアップグレードをグラフィカルモードで再適用する場合は、次のコマンドを実行します。
hub_cleanse_install.bin -DSIPERIAN_FORCED_PATCH_INSTALL=true

第 7 章

リソースキットのアップグレード インプレースアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [リソースキットのアップグレードの概要, 59 ページ](#)
- [リソースキットのアンインストール（インプレースアップグレード）, 59 ページ](#)
- [リソースキットのインストール, 60 ページ](#)

リソースキットのアップグレードの概要

リソースキットの最新バージョンにアップグレードするには、リソースキットのフルインストールを実行します。リソースキットのパッチインストールは実行できません。

1. インプレースアップグレードを実行している場合は、リソースキットをアンインストールします。
2. 最新バージョンのリソースキットをインストールします。

リソースキットのアンインストール（インプレースアップグレード）

インストールされているリソースキットのバージョンを削除するには、アンインストーラを実行する必要があります。アンインストーラは、リソースキットのディレクトリにあります。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. コマンド プロンプトを開き、次のディレクトリに移動します。
UNIX の場合:<Resource Kit installation directory: Resource Kit インストールディレクトリ>/deploy/
UninstallerData
Windows の場合:<Resource Kit installation directory: Resource Kit インストールディレクトリ>\deploy
\UninstallerData
3. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合:Uninstall_Informatica_MDM_Hub_Resource_Kit.bin

Windows の場合:Uninstall Informatica MDM Hub Resource Kit.exe

4. **【アンインストール】** をクリックします。
【アンインストールの完了】 ウィンドウが表示されます。
5. 前のバージョンのリソースキットをアンインストールします。
6. **【完了】** をクリックします。

リソースキットのインストール

リソースキットをアンインストールした後、リソースキットの現在のバージョンをインストールします。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. 配布ディレクトリのリソースキットインストーラに移動します。デフォルトでは、インストーラは以下のディレクトリにあります。
UNIX の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>/<operating system name: オペレーティングシステム名>/mrresourcekit
Windows の場合:<MDM Hub distribution directory: MDM Hub ディストリビューションディレクトリ>\windows \mrresourcekit
3. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合:hub_resourcekit_install.bin
Windows の場合:hub_resourcekit_install.exe
4. インストールの言語を選択し、**【OK】** をクリックします。
【概要】 ウィンドウが表示されます。
5. **【次へ】** をクリックします。
【ライセンスキー】 ウィンドウが表示されます。
6. **【使用許諾契約に同意する】** オプションを選択し、**【次へ】** をクリックします。
【機能のインストール】 ウィンドウが表示されます。
7. インストールするリソースキットの機能を選択し、**【次へ】** をクリックします。

以下のリソースキットの機能を選択することができます。

サンプルスキーマ

サンプルスキーマをインストールするにはこのオプションを選択します。サンプルアプリケーションをインストールする前に、サンプルスキーマを作成して Hub サーバーに登録する必要があります。

サンプルとユーティリティ

サンプルアプリケーションとサンプルユーティリティをインストールするにはこのオプションを選択します。

デプロイされるサンプルアプリケーションのリストは build.properties ファイルに保存されます。

build.properties ファイルは<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub \resourcekit\samples ディレクトリにあります。

SIF SDK および Javadoc

SIF SDK に関連する Javadoc、ライブラリ、およびリソースをインストールするにはこのオプションを選択します。

BPM SDK

BPM SDK に関連するリソースをインストールするにはこのオプションを選択します。

Jaspersoft

Jaspersoft インストーラをリソースキットのホームにコピーするにはこのオプションを選択します。

SSA-NAME3

SSA-NAME3 インストーラをリソースキットのホームにコピーするにはこのオプションを選択します。

【インストールフォルダの選択】 ウィンドウが表示されます。

8. リソースキットをインストールする場所を選択します。

- デフォルトの場所を選択するには、**【次へ】** をクリックします。
- パスを入力するには、インストールフォルダのパスを入力して **【次へ】** をクリックします。
注: フォルダ名にスペースが含まれているパスを指定すると、インストールは失敗します。
- デフォルトのインストール場所に戻す場合は、**【デフォルトフォルダの復元】** をクリックする。
- 別の場所を指定する場合は、**【選択】** をクリックして **【次へ】** をクリックする。

UNIX の場合は、**【リンクフォルダの選択】** ウィンドウが表示されます。Windows の場合は、**【ショートカットフォルダの選択】** ウィンドウが表示されます。

9. 製品のアイコンまたはリンクを作成する場所を選択するか、製品のアイコンまたはリンクを作成しないオプションを選択して、**【次へ】** をクリックします。

【設定の選択】 ウィンドウが表示されます。

10. 設定オプションを選択し、**【次へ】** をクリックします。

以下の設定オプションを選択することができます。

サンプルの設定

サンプルを設定します。

ソースのみ

サンプルのソースをインストールします。

【サンプルの設定】 を選択した場合は、**【リソースキットのアプリケーションサーバー】** ウィンドウが表示されます。**【ソースのみ】** を選択した場合は、**【インストール前のサマリ】** ウィンドウが表示されます。

11. **【リソースキットのアプリケーションサーバー】** ウィンドウで、リソースキットをインストールするアプリケーションサーバーを選択し、**【次へ】** をクリックします。

選択したアプリケーションサーバーの **【アプリケーションサーバー: ホーム】** ウィンドウが表示されます。

12. アプリケーションサーバーを設定します。

• JBoss の設定:

1. アプリケーションサーバーのインストールディレクトリを指定し、**【次へ】** をクリックします。

【JBoss アプリケーションサーバー: 設定名】 ウィンドウが表示されます。

2. 設定名を指定し、**【次へ】** をクリックします。

デフォルト値は standalone です。

3. リモートポートを指定します。

• WebLogic の設定:

1. MDM Hub で使用するドメインとして、WebLogic ドメインのインストールディレクトリのパスを選択し、**【次へ】** をクリックします。

【WebLogic アプリケーションサーバー: ログイン】 ウィンドウが表示されます。

2. WebLogic Server のログイン情報を入力します。

以下のログインパラメータを設定できます。

ホスト

WebLogic をインストールしたホストコンピュータの名前。

サーバー

WebLogic がデプロイされているドメイン内の WebLogic Server インスタンスの名前。

ユーザー名

WebLogic インストールのユーザー名。

パスワード

WebLogic のユーザー名に対応するパスワード。

ポート番号

WebLogic Server がリスンするポート番号。

- WebSphere の設定:

1. WebSphere Application Server のパスを選択し、**[次へ]** をクリックします。

[警告] ウィンドウが表示されます。

2. インストール条件を満たしていることを確認し、**[OK]** をクリックします。

[WebSphere セキュリティの選択] ウィンドウが表示されます。

3. WebSphere のセキュリティを有効にするかどうかを選択し、**[次へ]** をクリックします。

[いいえ] を選択して **[次へ]** をクリックすると、**[WebSphere Application Server: ポート]** ウィンドウが表示されます。デフォルトは **[いいえ]** です。

サーバー名を設定し、WebSphere Application Server の RMI ポートと SOAP ポートを設定します。クラスタ化環境では、クラスタサーバー名、その対応する SOAP ポート情報、および RMI ポート情報のいずれかを入力します。

[はい] を選択して **[次へ]** をクリックすると、**[WebSphere Application Server: ポートおよびユーザークレデンシャル]** ウィンドウが表示されます。WebSphere のユーザー名と WebSphere のパスワードを指定します。

[Informatica MDM Hub サーバー] ウィンドウが表示されます。

13. Hub サーバーのインストールの情報を入力し、**[次へ]** をクリックします。

Hub Server の以下の情報を指定できます。

サーバー名

Hub サーバーをホストするサーバーの名前。

サーバーの HTTP ポート

Hub サーバーのポート番号。

Informatica MDM の管理パスワード

MDM Hub にアクセスするためのパスワード。

[リソースキットの ORS ID] ウィンドウが表示されます。

14. リストからリソースキットの ORS ID を選択し、**[次へ]** をクリックします。

リストには、作成したオペレーショナル参照ストア ID が表示されています。サンプルスキーマに関連するオペレーショナルリファレンスストア ID を選択します。

サンプルスキーマを登録していない場合、サンプルスキーマのオペレーショナルリファレンスストア ID は表示されません。サンプルのオペレーショナル参照ストアを登録し、インストールを再起動します。

【デプロイメントの選択】 ウィンドウが表示されます。

15. デプロイメントのオプションを選択し、**【次へ】** をクリックします。

以下のいずれかのデプロイメントのオプションを選択することができます。

このインストール中に実行する。

インストール中にリソースキットをデプロイし、設定します。

後でデプロイする。

後で手動でデプロイと設定を行う場合は、このオプションを選択します。

サンプルとユーティリティ機能のインストールが選択済みの場合は、このインストール手順でリソースキットをデプロイ、設定します。このインストール手順でリソースキットをデプロイ、設定しない場合は、変更を行ったときに、後から postInstallSetup スクリプトを使用してサンプルを再デプロイすることはできません。

インストール後のセットアップを手動で実行する場合は、後で postInstallSetup スクリプトを使用して EAR ファイルをデプロイすることはできません。インストールを変更する場合は、手動で EAR ファイルを編集、デプロイする必要があります。

【インストール前のサマリ】 ウィンドウが表示されます。

16. インストール前のサマリを確認してインストールの設定を確定し、**【インストール】** をクリックします。

インストールが完了すると、**【インストールの完了】** ウィンドウが表示されます。

17. **【完了】** をクリックしてリソースキットのインストーラを終了します。

第 8 章

アップグレード後のタスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [アップグレード後のタスク, 64 ページ](#)
- [更新プロパティ, 65 ページ](#)
- [MDM Hub 環境の再起動, 65 ページ](#)
- [インプレースアップグレードのアップグレード後のタスクを実行する, 66 ページ](#)
- [Oracle 互換モードを無効にした状態でデータベースを IBM DB2 に移行, 66 ページ](#)
- [オブジェクト、カラム、および廃止されたオブジェクトへの参照の削除, 76 ページ](#)
- [odjbc6 JAR ファイルの削除, 77 ページ](#)
- [Hub サーバーをデプロイするための PostInstall スクリプトの実行（条件による）, 77 ページ](#)
- [WebSphere 管理セキュリティの設定, 78 ページ](#)
- [プラットフォームトランスフォーメーションに対するクレンジング関数の設定, 86 ページ](#)
- [アップグレードされたメタデータの検証, 87 ページ](#)
- [MDM Hub 環境レポートの確認, 88 ページ](#)
- [更新済のユーザー出口メソッドの実装, 89 ページ](#)
- [EJB プロトコルのための SiperianClient ライブラリクラスのアップグレード, 89 ページ](#)
- [MDM Hub メタデータを準備する, 90 ページ](#)
- [アップグレードテスト, 90 ページ](#)
- [Informatica Data Director および Hub サーバーのプロパティ, 91 ページ](#)

アップグレード後のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらず、環境が適切に構成されていることを確認するため、アップグレード後のタスクを実行します。

更新プロパティ

アップグレードタスク	詳細
プロパティファイルのアプリケーションサーバー設定の更新	<p>アプリケーションサーバーをアップグレードする場合、プロパティファイルのアプリケーションサーバー設定を手動で更新する必要があります。</p> <p><MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin にある build.properties ファイルで、次の設定を更新します。</p> <ul style="list-style-type: none">- SIP.AS.HOME- SIP.AS.SERVER_FOLDER- SIP.AS.DEPLOY_FOLDER <p><MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server にある setSiperianEnv.bat ファイルで、次の設定を更新します。</p> <ul style="list-style-type: none">- SET JBS_HOME- SET JBS_SERVER_DIR- SET JBS_DEPLOY_DIR- SET JBS_CLIENT_CLASSPATH <p><MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\resources にある cmxserver.properties ファイルで、次の設定を更新します。</p> <ul style="list-style-type: none">- cmx.appserver.version <p>ポート番号など、アプリケーションサーバーの他の構成設定を変更していた場合は、cmxserver.properties の設定も更新する必要があります。</p>

MDM Hub 環境の再起動

アップグレードしたら、MDM Hub 環境を再起動します。

アプリケーションサーバーの再起動

アプリケーションサーバーを再起動してから Hub コンソールを起動します。

1. Hub サーバーやプロセスサーバーを実行しているアプリケーションサーバーをシャットダウンします。
2. Hub サーバーやプロセスサーバーを実行するアプリケーションサーバーを起動します。

インプレースアップグレードのアップグレード後のタスクを実行する

アップグレードタスク	詳細
Java のキャッシュをクリアする	<ol style="list-style-type: none">1. Java WebStart のキャッシュをクリアします。手順については、Java のマニュアルを参照してください。2. Java のキャッシュをクリアします。手順については、Java のマニュアルを参照してください。3. Hub コンソールを起動します。
ZooKeeper データディレクトリを削除する	<p>スマート検索を使用する場合は、ZooKeeper データディレクトリを削除します。</p> <p>ZooKeeper データディレクトリは、プロセスサーバーを ZooKeeper サーバーとして設定する場合に設定します。</p>

Oracle 互換モードを無効にした状態でデータベースを IBM DB2 に移行

データベースを、IBM DB2 Oracle 互換モードから Oracle 互換を無効にした IBM DB2 に移行する必要があります。データベースを移行するには、Hub ストアから DDL とデータを抽出し、Oracle 互換を無効にして IBM DB2 インスタンスを更新します。次に、Hub ストアを作成し、抽出した DDL とデータで更新します。

Oracle 互換モードの IBM DB2 データベースを Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースに移行するには、以下の手順を実行します。

1. ターゲットディレクトリを作成します。
2. MDM Hub マスターデータベースの DDL とデータを抽出します。
3. オペレーショナル参照ストアの DDL とデータを抽出します。
4. IBM DB2 の Oracle 互換モードを無効にします。
5. Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースで、Hub ストアを作成します。
6. 抽出したソース DDL とデータで MDM Hub マスターデータベーススキーマを更新します。
7. 抽出したソース DDL とデータでオペレーショナル参照ストアスキーマを更新します。
8. すべてのテーブル制約を満たしていることを確認します。
9. Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースを使用するように、アプリケーションサーバーを設定します。

注: データベース管理ユーザーには、db2admin 以外のユーザーを指定できます。

手順 1. ターゲットディレクトリの作成

ターゲットディレクトリを作成して、MDM Hub マスターデータベースおよびオペレーショナルリファレンスストアスキーマの DDL とデータを保存します。

1. 管理権限で IBM DB2 コマンドウィンドウを開きます。

2. 次の Hub ストアコンポーネント用のディレクトリを作成して、移行スクリプトとデータを保存します。
 - MDM Hub マスターデータベース
 - オペレーショナルリファレンスストア

手順 2. MDM Hub マスターデータベースの DDL とデータの抽出

MDM Hub マスターデータベースの DDL とデータを CMX_SYSTEM.ddl ファイルに抽出します。

1. ディレクトリを、[「手順 1. ターゲットディレクトリの作成」 \(ページ 66\)](#)で作成した MDM Hub マスターデータベースディレクトリに変更します。
2. MDM Hub マスターデータベーススキーマの DDL とデータを抽出するには、次のコマンドを実行します。
`db2look -d <database name> -ct -z CMX_SYSTEM -e -o CMX_SYSTEM.ddl`
CMX_SYSTEM.ddl ファイルが作成されます。
3. エラーがないかどうか CMX_SYSTEM.ddl ファイルをチェックします。
4. CMX_SYSTEM.ddl ファイルで CONNECT TO 文を更新して、ユーザー名とパスワードを含めます。
以下の構文を使用します。
`CONNECT TO <new database name> USER db2admin USING <password>;`
5. MDM Hub マスターデータベーステーブルからデータをエクスポートするには、次のコマンドを実行します。
`db2move <database name> export -u db2admin -p <password> -sn CMX_SYSTEM > db2move_export_cmx_system.out`
db2move_export_cmx_system.out ファイルが作成されます。
6. エラーがないかどうか db2move_export_cmx_system.out ファイルをチェックします。

手順 3. オペレーショナルリファレンスストアの DDL とデータの抽出

オペレーショナルリファレンスストアの DDL とデータを<Operational Reference Store name>.ddl ファイルに抽出します。

1. ディレクトリを、作成したターゲットオペレーショナルリファレンスストアディレクトリに変更します。
2. オペレーショナルリファレンスストアスキーマの DDL とデータを抽出するには、次のコマンドを実行します。
`db2look -d <database name> -ct -z <Operational Reference Store name> -e -o <Operational Reference Store name>.ddl`
<Operational Reference Store name>.ddl ファイルが作成されます。
3. エラーがないかどうか<Operational Reference Store name>.ddl ファイルをチェックします。
4. <Operational Reference Store name>.ddl ファイルで CONNECT TO 文を更新して、ユーザー名とパスワードを含めます。
以下の構文を使用します。
`CONNECT TO <new database name> USER <Operational Reference Store name> USING <password>;`
5. オペレーショナルリファレンスストアテーブルに付与された権限を抽出するには、次のコマンドを実行します。
`db2look -d <database name> -x -z <Operational Reference Store name> -o <Operational Reference Store name>2.ddl`
<Operational Reference Store name>2.ddl ファイルが作成されます。
6. エラーがないかどうか<Operational Reference Store name>2.ddl ファイルをチェックします。

7. <Operational Reference Store name>2.ddl ファイルで次の行を編集します。
次から
CONNECT TO <database name>;
次に変更します。
CONNECT TO <new database name> USER <Operational Reference Store name> USING <password>;
8. オペレーショナルリファレンスストアテーブルからデータをエクスポートするには、次のコマンドを実行します。
db2move <database name> export -u db2admin -p <password> -sn <Operational Reference Store name> >
db2move_export_<Operational Reference Store name>.out
db2move_export_<Operational Reference Store name>.out ファイルが作成されます。
9. エラーがないかどうか db2move_export_<Operational Reference Store name>.out ファイルをチェックします。

手順 4. IBM DB2 の Oracle 互換モードの無効化

MDM Hub マスターデータベースおよびオペレーショナルリファレンスストアスキーマから DDL とデータを抽出した後、IBM DB2 の Oracle 互換モードを無効にします。

1. IBM DB2 の Oracle 互換モードを無効にするには、次のコマンドを実行します。
db2set DB2_COMPATIBILITY_VECTOR=
2. IBM DB2 を停止するには、次のコマンドを実行します。
db2stop
3. IBM DB2 を起動するには、次のコマンドを実行します。
db2start
Oracle 互換で実行する IBM DB2 が無効になります。

手順 5. Hub ストアの作成

Hub ストアは、1 つの MDM Hub マスターデータベースと 1 つ以上のオペレーショナル参照ストアで構成されます。MDM Hub ディストリビューションのスクリプトを使用して、データベースおよび関連するテーブルスペース、および Hub ストアを作成します。

Oracle 互換を無効にした IBM DB2 で、データベース、MDM Hub マスターデータベース、およびオペレーショナル参照ストアを作成します。MDM Hub マスターデータベースとオペレーショナル参照ストアを作成したら、これらにシードをインポートします。

1. データベースおよび関連するテーブルスペースを作成します。
 - a. 配布ディレクトリの以下の場所に変更します。
UNIX の場合: <distribution directory>/database/bin
Windows の場合: <配布ディレクトリ>\database\bin
 - b. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合: sip_ant.sh create_db
Windows の場合: sip_ant.bat create_db

- c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定します。
データベースインスタンス名を入力 [db2]	データベースインスタンスの名前。デフォルトは db2。
データベース名を入力 [SIP97]	データベースの名前。デフォルトは SIP97。
データベースストレージへのパスを入力 [C:\DB2DATA]	データベースを格納する必要があるディレクトリへのパス。デフォルトは C:\DB2DATA。 注: UNIX では、デフォルト値を受け入れます。 database.properties ファイルで指定するデータベースストレージへのパスが使用されます。
DBA ユーザー名を入力 [DB2ADMIN]	管理者ユーザーの名前。デフォルトは DB2ADMIN です。
DBA のパスワードを入力	管理者ユーザーのパスワード。
データベースプロキシロールを作成 [y/n] [y]	データベースプロキシロールを作成するかどうかを指定します。 次のいずれかの値を入力します。 - y. データベースプロキシロールを作成する。 - n. データベースプロキシロールを作成しない。 デフォルトは y です。

このスクリプトはデータベースと必要なテーブルスペースを作成します。

2. MDM Hub マスターデータベースを作成します。
 - a. 配布ディレクトリの以下の場所に変更します。
UNIX の場合: <distribution directory>/database/bin
Windows の場合: <配布ディレクトリ>\database\bin
 - b. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合: sip_ant.sh create_system
Windows の場合: sip_ant.bat create_system
 - c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。デフォルトは localhost です。

プロンプト	説明
データベースのポート番号を入力 [50000]	データベースリスナが使用するポート番号。デフォルトは 50000。
データベースインスタンス名を入力 [SIP97]	データベースインスタンスの名前。デフォルトは SIP97。
MDM Hub マスタデータベーススキーマ名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベーススキーマの名前。デフォルトは cmx_system です。
MDM Hub マスタデータベースのユーザー名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_system です。
MDM Hub マスタデータベースのユーザーパスワードを入力	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのパスワード。
DBA ユーザー名を入力 [DB2ADMIN]	管理者ユーザーの名前。デフォルトは DB2ADMIN です。
DBA のパスワードを入力	管理者ユーザーのパスワード。
データベースプロキシロールを使用 [y/n] [y]	インストール前タスクの実行時に作成したデータベースプロキシロールを使用するかどうかを指定。 次のいずれかの値を入力します。 - y.データベースプロキシロールを使用する。 - n.データベースプロキシロールを使用しない。 デフォルトは y です。

3. オペレーショナル参照ストアを作成します。
 - a. 配布ディレクトリの以下の場所に変更します。
 UNIX の場合: <distribution directory>/database/bin
 Windows の場合: <配布ディレクトリ>\database\bin
 - b. 次のコマンドを実行します。
 UNIX の場合: sip_ant.sh create_ors
 Windows の場合: sip_ant.bat create_ors
 - c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
オペレーショナル参照ストアスキーマのホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。デフォルトは localhost です。
オペレーショナル参照ストアスキーマのポート番号を入力 [50000]	データベースリスナが使用するポート番号。デフォルトは 50000。

プロンプト	説明
オペレーショナル参照ストアのデータベースインスタンス名を入力 [SIP97]	データベースインスタンスの名前。デフォルトは SIP97。
オペレーショナル参照ストアのスキーマ名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアデータベースの名前。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアスキーマのユーザー名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアスキーマのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。
DBA ユーザー名を入力 [DB2ADMIN]	管理者ユーザーの名前。デフォルトは DB2ADMIN です。
DBA のパスワードを入力	管理者ユーザーのパスワード。
データベースプロキシロールを使用 [y/n] [y]	インストール前タスクの実行時に作成したデータベースプロキシロールを使用するかどうかを指定。 次のいずれかの値を入力します。 - y.データベースプロキシロールを使用する。 - n.データベースプロキシロールを使用しない。 デフォルトは y です。

4. シードを MDM Hub マスターデータベースにインポートします。
 - a. 配布ディレクトリの以下の場所に変更します。
UNIX の場合: <distribution directory>/database/bin
Windows の場合:<配布ディレクトリ>\database\bin
 - b. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合: sip_ant.sh import_system
Windows の場合: sip_ant.bat import_system
 - c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
データベースホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
データベースのポート番号を入力 [50000]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 50000。
データベースインスタンス名を入力 [SIP97]	データベースの名前。デフォルトは SIP97。

プロンプト	説明
MDM Hub マスタデータベーススキーマ名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベーススキーマの名前。デフォルトは cmx_system です。
MDM Hub マスタデータベーススキーマのユーザー名を入力 [cmx_system]	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_system です。 注: UNIX の場合、ユーザー名は 8 文字以下にします。
MDM Hub マスタデータベーススキーマのユーザーパスワードを入力	MDM Hub マスタデータベースにアクセスするためのパスワード。
ロケール名を入力 [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。デフォルトは en_US。
接続 URL [jdbc:db2://localhost:50000/SIP97:currentSchema=CMX_SYSTEM;]	IBM DB2 の接続 URL。デフォルトは jdbc:db2://localhost:50000/SIP97:currentSchema=CMX_SYSTEM。
データベースプロキシロールを使用 [y/n] [y]	インストール前タスクの実行時に作成したデータベースプロキシロールを使用するかどうかを指定。 次のいずれかの値を入力します。 - y. データベースプロキシロールを使用する。 - n. データベースプロキシロールを使用しない。 デフォルトは y です。

5. シードをオペレーショナル参照ストアにインポートします。
 - a. 配布ディレクトリの以下の場所に変更します。
UNIX の場合: <distribution directory>/database/bin
Windows の場合: <配布ディレクトリ>\database\bin
 - b. 次のコマンドを実行します。
UNIX の場合: sip_ant.sh import_ors
Windows の場合: sip_ant.bat import_ors
 - c. 以下の表に説明する内容に従ってプロンプトに回答します。

プロンプト	説明
データベースタイプを入力 (ORACLE、MSSQL、DB2)	データベースタイプ。DB2 を指定する。
オペレーショナル参照ストアスキーマのホスト名を入力 [localhost]	データベースを実行しているホストの名前。
オペレーショナル参照ストアスキーマのポート番号を入力 [50000]	データベースリスナーが使用するポート番号。デフォルトは 50000。

プロンプト	説明
データベース名を入力 [SIP97]	データベースの名前。デフォルトは SIP97。
オペレーショナル参照ストアのスキーマ名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアのデータベースの名前。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアスキーマのユーザー名を入力 [cmx_ors]	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのユーザー名。デフォルトは cmx_ors。
オペレーショナル参照ストアスキーマのユーザーパスワードを入力	オペレーショナル参照ストアにアクセスするためのパスワード。
ロケール名を入力 [en_US]	オペレーティングシステムのロケール。デフォルトは en_US。
オペレーショナル参照ストアのタイムラインの粒度の整数コードを入力: 5 (年)、4 (月)、3 (日)、2 (時間)、1 (分)、0 (秒) [3]	使用するタイムラインの単位を指定する。デフォルトは日 (日数)。 注: タイムラインの精度は、一度設定すると変更することはできません。
データベースプロキシロールを使用 [y/n] [y]	インストール前タスクの実行時に作成したデータベースプロキシロールを使用するかどうかを指定。 次のいずれかの値を入力します。 - y. データベースプロキシロールを使用する。 - n. データベースプロキシロールを使用しない。 デフォルトは y です。

手順 6. ソースの DDL とデータを使った MDM Hub マスターデータベーススキーマの更新

Oracle 互換を無効にした IBM DB2 で MDM Hub マスターデータベースを作成し、シードをインポートしたら、ソース DDL とデータで更新します。

- ディレクトリを MDM Hub マスターデータベースディレクトリに変更します。
- 適用可能な DDL の変更を MDM Hub マスターデータベーススキーマに適用するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 -tvf CMX_SYSTEM.ddl >CMX_SYSTEM.out
CMX_SYSTEM.out ファイルが作成されます。
```

- エラーがないかどうか CMX_SYSTEM.out ファイルをチェックします。
既存のテーブルまたはインデックスのエラーは無視できます。
- MDM Hub マスターデータベーステーブルにデータを読み込むには、次のコマンドを実行します。
db2move <new database name> load -lo REPLACE -u db2admin -p <password> db2move_load_cmx_system.out
db2move_load_cmx_system.out ファイルが作成されます。

- 新しいデータベースに接続するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 connect to <new database name> user db2admin using <password>
```

- SET INTEGRITY SQL コマンドのスクリプトを生成するには、次のコマンドを実行します。

```
UNIX の場合: db2 "select 'SET INTEGRITY FOR ' CONCAT trim(BOTH FROM tabschema) CONCAT '.' CONCAT
trim(BOTH FROM tablename) CONCAT ' IMMEDIATE CHECKED@' from syscat.tables where tabschema='CMX_SYSTEM' and
status='C'" > cmx_system_check.sql
```

Windows の場合: db2 select 'SET INTEGRITY FOR ' CONCAT trim(BOTH FROM tabschema) CONCAT '.' CONCAT trim(BOTH FROM tablename) CONCAT ' IMMEDIATE CHECKED@' from syscat.tables where tabschema='CMX_SYSTEM' and status='C' > cmx_system_check.sql

cmx_system_check.sql スクリプトが生成されます。

7. cmx_system_check.sql を調べて、SQL 文のみが含まれていることを確認します。

8. SET INTEGRITY スクリプトを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 -td@ -vf cmx_system_check.sql
```

データベーステーブル間の相互依存性がカバーされるように、スクリプトを 3 回実行します。

手順 7. ソースの DDL とデータを使ったオペレーショナルリファレンスストアの更新

Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースでオペレーショナルリファレンスストアを作成し、シードをインポートした後、ソース DDL とデータでオペレーショナルリファレンスストアを更新します。

1. 新しいデータベースに接続するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 CONNECT TO <new database name> USER db2admin USING <password>
```

2. db2move コマンドに特権を付与するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 GRANT EXECUTE ON PACKAGE NULLID.DB2MOVE TO USER <Operational Reference Store user>
```

3. db2commo コマンドに特権を付与するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 GRANT EXECUTE ON PACKAGE NULLID.DB2COMMO TO USER <Operational Reference Store user>
```

4. データベースへの接続を切断するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 CONNECT RESET
```

5. ディレクトリをオペレーショナルリファレンスストアディレクトリに変更します。

6. 適用可能な DDL の変更をオペレーショナルリファレンスストアスキーマに適用するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 -tvf <Operational Reference Store>.ddl > <Operational Reference Store>.out
```

<Operational Reference Store>.out ファイルが作成されます。

7. <Operational Reference Store>.out ファイルをチェックします。

既存のテーブルまたはインデックスのエラーはすべて無視します。

8. オペレーショナルリファレンスストアの必要な権限を生成するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 -tvf <Operational Reference Store>2.ddl > <Operational Reference Store>2.out
```

9. エラーがないかどうか<Operational Reference Store>2.out ファイルをチェックします。

10. オペレーショナルリファレンスストアスキーマに入力するには、次のコマンドを実行します。

```
db2move <new database name> load -lo REPLACE -u <Operational Reference Store user> -p <password>>
db2move_load_<Operational Reference Store name>.out
```

db2move_load_<Operational Reference Store>.out ファイルが作成されます。

11. 新しいデータベースに接続するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 connect to <new database name> user <Operational Reference Store user> using <password>
```

12. SET INTEGRITY SQL コマンドのスクリプトを生成するには、次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: db2 "select 'SET INTEGRITY FOR ' CONCAT trim(BOTH FROM tabschema) CONCAT '.' CONCAT trim(BOTH FROM tablename) CONCAT ' IMMEDIATE CHECKED@' from syscat.tables where tabschema='<OPERATIONAL REFERENCE STORE USER>' and status='C'" > <Operational Reference Store>_check.sql

Windows の場合:db2 select 'SET INTEGRITY FOR ' CONCAT trim(BOTH FROM tabschema) CONCAT '.' CONCAT trim(BOTH FROM tablename) CONCAT ' IMMEDIATE CHECKED@' from syscat.tables where tabschema='<OPERATIONAL REFERENCE STORE USER>' and status='C' > <Operational Reference Store>_check.sql

<OPERATIONAL REFERENCE STORE USER>の値を大文字で指定します。

<Operational Reference Store>_check.sql スクリプトが生成されます。

13. <Operational Reference Store>_check.sql を調べて、SQL 文のみが含まれることを確認します。

14. SET INTEGRITY スクリプトを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
db2 -td@ -vf <Operational Reference Store>_check.sql
```

データベーステーブル間の相互依存性がカバーされるように、スクリプトを 5 回実行します。

手順 8. テーブル制約の調整の確認

すべてのテーブル制約が満たされ、テーブルがチェック保留状態でないことを確認します。

1. SYSIBM.SYSTABLES の CONST_CHECKED カラムのすべてのフィールドが Y に設定されていることを確認します。

テーブルがチェック保留状態である場合、CONST_CHECKED カラムのフィールドは N に設定されています。

2. テーブルがチェック保留状態である場合は、テーブルに対して次の SET INTEGRITY コマンドを実行します。

```
set integrity for <schema_name.table_name> immediate checked
```

すべてのテーブル制約が満たされ、チェック保留状態は削除されます。

手順 9. データベースを使用するようにアプリケーションサーバーの設定

アプリケーションサーバーが、Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースを使用するようにします。MDM Hub 実装に使用するアプリケーションサーバーを設定します。JBoss または WebSphere を設定できます。

JBoss の設定

Oracle 互換モードを無効にした状態で IBM DB2 内のデータベースを使用するように、JBoss アプリケーションサーバーを設定します。

1. 次の JBoss インストールディレクトリから、standalone-full.xml ファイルを開きます。

UNIX の場合:<JBoss_install_dir>/standalone/configuration/standalone-full.xml

Windows の場合:<JBoss_install_dir>\standalone\configuration\standalone-full.xml

2. java:jboss/datasources/jdbc/siperian-cmx_system-ds JNDI のデータベース名を、Oracle 互換モードを無効にした状態で IBM DB2 で作成したデータベースの名前に変更します。

データベース名を変更するには、JNDI 名の<xa-datasource>要素を見つけ、データベース名の<xa-datasource-property name="">要素を新しいデータベースのものに変更します。

次のコードは、データベース名の xa-datasource-property name 要素を示しています。

```
<xa-datasource jndi-name="java:jboss/datasources/jdbc/siperian-cmx_system-ds" pool-name="jdbc/siperian-cmx_system-ds" enabled="true" use-java-context="true" spy="false" use-ccm="true">
```

.

.

.

```
<xa-datasource-property name="<New Database Name>">
```

```
.  
. .  
.  
<xa-datasource>
```

3. standalone-full.xml ファイルを保存して閉じます。
4. JBoss アプリケーションサーバーを起動します。
5. Oracle 互換モードを無効にした状態で IBM DB2 内のデータベースをカタログ化し、Oracle 互換モードを有効にした状態でその IBM DB2 で作成されたデータベースのカタログを削除します。
6. MDM Hub コンソールにログインし、リポジトリマネージャツールを起動して、メタデータ検証を実行します。

WebSphere の設定

Oracle 互換を無効にした IBM DB2 データベースを使用するように、WebSphere アプリケーションサーバーを設定します。

1. WebSphere 管理コンソールを開きます。
2. リソースナビゲータで、JDBC を展開して **【データソース】** を選択します。
【データソース】 ページが表示されます。
3. データソース接続のリストから、データソース接続を選択します。
siperian-cmx_system-ds の新しいデータベース名を設定してから、影響を受けた他のデータソース接続の新しいデータベース名を設定します。
4. 共通および必須データソースプロパティセクションの **【データベース名】** フィールドで、新しいデータベース名を指定します。
5. **【適用】** をクリックしてから **【保存】** をクリックします。
6. 影響を受けたすべてのデータソース接続について、[3](#) から [5](#) の手順を繰り返します。

オブジェクト、カラム、および廃止されたオブジェクトへの参照の削除

アップグレードタスク	詳細
REL_START_DATE、REL_END_DATE、および HUID テーブルへの参照の更新	REL_START_DATE および REL_END_DATE システムカラムならびに HUID テーブルの参照を更新します。アップグレードプロセスによって、階層マネージャベースオブジェクトで使用するパッケージおよびビューに含まれる REL_START_DATE および REL_END_DATE カラムの参照が削除されます。REL_START_DATE の参照に代わって、PERIOD_START_DATE の参照が作成されます。また、REL_END_DATE の参照に代わって、PERIOD_END_DATE の参照が作成されます。

odjbc6 JAR ファイルの削除

JBoss 環境で、次の場所から odjbc6.jar ファイルを削除します。

```
<JBoss install location>\modules\com\activevos\main  
<JBoss install location>\modules\com\informatica\mdm\jdbc\main  
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\lib
```

Hub サーバーをデプロイするための PostInstall スクリプトの実行（条件による）

インストール時に postInstallSetup スクリプトをスキップした場合は、このスクリプトを実行します。インストール後のプロセスにより、Hub サーバーアプリケーションがデプロイされ、データソースが作成され、JMS メッセージキューが設定されます。

管理対象サーバーを含む WebLogic Server 環境を使用し、管理サーバーと管理対象サーバーが異なるマシンにある場合は、すべてのデプロイメントファイルを管理サーバーの MDM Hub インストールディレクトリにコピーします。詳細については、『*MDM Multidomain Edition インストールガイド*』を参照してください。

- ▶ コマンドプロンプトを開き、postInstallSetup スクリプトをディレクトリ<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server で実行します。

注: MDM Hub インストーラにバンドルされている ActiveVOS をインストールしなかった場合は、コマンドに ActiveVOS のユーザー名とパスワードを含めないでください。UNIX でパスワードに感嘆符 (!) を含める場合、感嘆符の前にバックスラッシュを付ける必要があります。例えば、パスワードが!! cmx!! の場合、次のパスワードを入力します: \! \!cmx\! \!

WebSphere（セキュリティ無効）の場合:

```
./postInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>  
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>  
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>  
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>  
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere（セキュリティ有効）の場合:

```
./postInstallSetup.sh -Dwebsphere.password=<WebSphere password>  
-Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>  
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>  
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>  
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>  
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

JBoss の場合:

```
./postInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>  
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>  
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>  
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>  
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebLogic の場合:

```
./postInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<WebLogic password>  
-Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password>  
-Davos.username=<ActiveVOS Console username>  
-Davos.password=<ActiveVOS Console password>  
-Davos.jdbc.database.username=<ActiveVOS database username>  
-Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

重要: WebLogic 12.2.1.3 以降の環境で、ActiveVOS をインストールすることにした場合、または WebLogic T3S プロトコルを使用することにした場合は、決定に一致するオプションを追加します。

- インストールした ActiveVOS。-Dinstall.avos.patch=true
- 使用した T3S プロトコル。-Dweblogic.naming.protocol=t3s

ActiveVOS コンソールの資格情報は、アプリケーションサーバーの管理者ユーザーの資格情報と同じです。

ActiveVOS データベースの資格情報は、create_bpm スクリプトを実行するために使用した資格情報と同じです。

管理対象サーバーがある WebLogic 環境にデプロイする場合、WebLogic Server 管理コンソールでデプロイメントのターゲットとしてすべての管理対象サーバーを指定するようにします。

詳細については、『*MDM Multidomain Edition インストールガイド*』および WebLogic ドキュメントを参照してください。

WebSphere 管理セキュリティの設定

WebSphere 管理セキュリティを設定して、WebSphere 管理コンソールへの MDM Hub のアクセスを制御できます。

WebSphere 管理セキュリティを設定するには、次の手順を実行します。

1. オペレーショナルリファレンスストア（ORS）を登録解除します。
2. EAR ファイルをアンインストールし、WebSphere からデータソースを削除します。
3. WebSphere 管理コンソールで WebSphere 管理セキュリティを有効にします。
4. Hub サーバーおよびプロセスサーバーのプロパティを設定します。
5. Hub サーバーおよびプロセスサーバーの PostInstallSetup スクリプトを実行します。
6. ORS を登録します。

ORS の登録時には WebSphere 資格情報を入力します。ORS の確認後は、資格情報を入力する必要はありません。

オペレーショナルリファレンスストアの登録解除

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）を登録解除するには、MDM Hub コンソールでデータベースツールを使用します。

1. MDM Hub コンソールで、**【書き込みロック】** > **【ロックの取得】** の順にクリックします。
2. **【設定】** ワークベンチで、**【データベース】** ツールを選択します。
【データベース情報】 ページが表示されます。
3. データベースのリストから、登録を解除する ORS を選択します。
4. **【データベースの登録解除】** をクリックします。
データベースツールに、ORS の登録解除を確認するメッセージが表示されます。
5. **【はい】** をクリックします。

EAR ファイルのアンインストールおよびデータソースの削除

EAR ファイルをアンインストールしてデータソースを削除するには、WebSphere 管理コンソールを使用します。

1. WebSphere 管理コンソールを使用して、次のデプロイメントファイルのデプロイを解除します。

デプロイメントファイル名	説明
siperian-mrm.ear	必須。Hub サーバーアプリケーション。
provisioning-ear.ear	必須。プロビジョニングツールアプリケーション。
entity360view-ear.ear	オプション。エンティティ 360 フレームワーク。
informatica-mdm-platform-ear.ear	オプション。Informatica Platform アプリケーション。

2. WebSphere 管理コンソールを使用して siperian-mrm-cleanse.ear ファイルのデプロイを解除します。
3. WebSphere 管理コンソールを使用して、MDM Hub マスターデータベースのすべてのデータソースとオペレーショナルリファレンスストアを削除します。
4. アプリケーションサーバーを再起動します。

詳細については、WebSphere のマニュアルを参照してください。

WebSphere 管理コンソールでの WebSphere 管理セキュリティの有効化

WebSphere 管理コンソールで WebSphere 管理セキュリティを有効にする必要があります。WebSphere 管理セキュリティを有効する場合は、WebSphere アプリケーションセキュリティを無効にします。

詳細については、WebSphere のマニュアルを参照してください。

Hub サーバーとプロセスサーバーのプロパティの設定

Hub サーバーとプロセスサーバーのプロパティファイルを設定し、WebSphere 管理セキュリティを有効にする必要があります。

1. アプリケーションサーバーを停止します。
2. Hub サーバーで WebSphere セキュリティを有効にします。
 - a. 次のディレクトリで、cmxserver.properties を開きます。
UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/resources
Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\resources
 - b. cmx.websphere.security.enabled を true に設定します。

3. プロセスサーバーで WebSphere セキュリティを有効にします。
 - a. 次のディレクトリで `cmxcleanse.properties` を開きます。
 UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/resources
 Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse\resources
 - b. `cmx.websphere.security.enabled` を `true` に設定します。
4. Hub サーバーで WebSphere ユーザー名を設定します。
 - a. 次のディレクトリで `build.properties` を開きます。
 UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
 Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\bin
 - b. `websphere.username` を WebSphere 管理ユーザー名に設定します。
5. プロセスサーバーで WebSphere ユーザー名を設定します。
 - a. 次のディレクトリで `build.properties` を開きます。
 UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse/bin
 Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse\bin
 - b. `websphere.username` を WebSphere 管理ユーザー名に設定します。
6. SQL* Plus で、次のコマンドを実行して `c_repos_cleanse_match_server.is_secured` を 1 に設定します。

```
UPDATE c_repos_cleanse_match_server set is_secured = 1 where rowid_cleanse_match_server='<Insert value here>';
COMMIT;
```
7. アプリケーションサーバーを起動します。

Hub サーバーの PostInstallSetup スクリプトの手動実行

Hub サーバーの PostInstallSetup スクリプトを実行する必要があります。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 次のディレクトリにある PostInstallSetup スクリプトに移動します。
 UNIX の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server
 Windows の場合:<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server
3. 次のコマンドを実行します。
 UNIX の場合:`postinstallsetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub マスターデータベース> -Dwebsphere.password=<WebSphere administrative user password>`
 Windows の場合: `postinstallsetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub マスターデータベース> -Dwebsphere.password=<WebSphere administrative user password>`
4. アプリケーションサーバーを再起動します。

プロセスサーバーの PostInstallSetup スクリプトの実行

プロセスサーバーの PostInstallSetup スクリプトを実行する必要があります。

1. コマンドプロンプトを開きます。
2. 次のディレクトリにある PostInstallSetup スクリプトに移動します。

UNIX の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse

Windows の場合: <MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\cleanse

3. 次のコマンドを実行します。

UNIX の場合: postinstallsetup.sh -Dwebsphere.password=<websphere administrative user password>

Windows の場合: postinstallsetup.bat -Dwebsphere.password=<websphere administrative user password>

4. アプリケーションサーバーを再起動します。

オペレーショナルリファレンスストアの登録

オペレーショナルリファレンスストアを登録するには、Hub コンソールを使用します。

1. 設定ワークベンチにある**データベースツール**を起動します。
2. **【書き込みロック】** > **【ロックの取得】**の順にクリックします。
3. **【データベースの登録】**をクリックします。
Informatica MDM Hub 接続ウィザードが表示され、データベースタイプの選択が求められます。
4. Microsoft SQL Server、Oracle、または IBM DB2 を選択して **【次へ】** をクリックします。
5. Microsoft SQL Server で、データベースの接続プロパティを設定します。
 - a. **【接続プロパティ】** ページで、接続プロパティを指定し、**【次へ】** をクリックします。

以下の表に、接続プロパティの種類と説明を示します。

プロパティ	説明
データベース表示名	Hub コンソールに表示する必要があるオペレーショナルリファレンスストアの名前。
マシン識別子	Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに割り当てられるプレフィックス。
データベースホスト名	Microsoft SQL Server データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
ポート	Microsoft SQL Server データベースのポート。デフォルトは 1433。
スキーマ名	オペレーショナルリファレンスストアの名前。
パスワード	オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名に関連付けられているパスワード。
Dynamic Data Masking ホスト	Dynamic Data Masking をホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。
DDM 接続 URL	オプション。Dynamic Data Masking サーバーの URL。Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。

- b. **【接続プロパティ】** ページで、接続プロパティを指定し、**【次へ】** をクリックします。
- c. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。

以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。
登録後にデータソースを作成	登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。

6. Oracle 環境で、データベースの接続プロパティを設定します。

- a. Oracle の接続方式を選択して、**【次へ】** をクリックします。

次の表に、選択できる Oracle の接続方式を示します。

接続方式	説明
サービス	サービス名を使用して Oracle に接続します。
SID	Oracle のシステム ID を使用して Oracle に接続します。

サービス名と SID 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。

【接続プロパティ】 ページが表示されます。

- b. 選択する接続タイプの接続プロパティを指定し、**【次へ】** をクリックします。

以下の表に、接続プロパティの種類と説明を示します。

プロパティ	説明
データベース表示名	Hub コンソールに表示する必要があるオペレーショナルリファレンスストアの名前。
マシン識別子	Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに割り当てられるプレフィックス。
データベースホスト名	Oracle データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
SID	サーバー上で実行される Oracle データベースのインスタンスを参照する Oracle システム識別子。 【SID】 フィールドは、 【SID】 接続タイプを選択した場合に表示される。
サービス	Oracle データベースへの接続に使用する Oracle サービスの名前。 【サービス】 フィールドは、 【サービス】 接続タイプを選択した場合に表示される。
ポート	Oracle データベースサーバー上で実行される Oracle リスナの TCP ポート。デフォルトは 1521。

プロパティ	説明
Oracle TNS 名	<p>ネットワーク上で認識されているデータベースの名前（アプリケーションサーバーの TNSNAMES.ORA ファイルで定義）。</p> <p>例: mydatabase.mycompany.com</p> <p>Oracle TNS 名は、Oracle データベースのインストール時に設定します。Oracle TNS 名の詳細については、Oracle のマニュアルを参照してください。</p>
スキーマ名	オペレーショナルリファレンスストアの名前。
ユーザー名	<p>オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名。デフォルトでは、これがオペレーショナルリファレンスストアを作成するために使用するスクリプトで指定するユーザー名です。このユーザーが、Hub ストア内のすべてのオペレーショナルリファレンスストアデータベースオブジェクトの所有者となる。</p> <p>オペレーショナルリファレンスストアでプロキシユーザーが設定されている場合は、代わりにプロキシユーザーを指定できます。</p>
パスワード	<p>オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名に関連付けられているパスワード。</p> <p>Oracle の場合、パスワードでは大文字と小文字の区別がない。</p> <p>デフォルトでは、これがオペレーショナルリファレンスストアを作成するときに指定するパスワードです。</p> <p>オペレーショナルリファレンスストアでプロキシユーザーが設定されている場合は、代わりにプロキシユーザーのパスワードを指定できます。</p>
Dynamic Data Masking ホスト	Dynamic Data Masking をホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。
DDM 接続 URL	オプション。Dynamic Data Masking サーバーの URL。Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。

注: スキーマ名とユーザー名は、どちらもオペレーショナルリファレンスストアを作成するときに指定したオペレーショナルリファレンスストアの名前です。この情報が必要な場合はデータベース管理者に問い合わせます。

サマリページが表示されます。

- c. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。

以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	<p>接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。次のリストに、Oracle 接続タイプの接続 URL のフォーマットを示します。</p> <p>サービス接続タイプ</p> <p><code>jdbc:oracle:thin:@//database_host:port/service_name</code></p> <p>SID 接続タイプ</p> <p><code>jdbc:oracle:thin:@//database_host:port:sid</code></p> <p>サービス接続タイプの場合のみ、別の接続 URL をカスタマイズして後でテストできます。</p>
登録後にデータソースを作成	<p>登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。</p> <p>注: このオプションを選択しない場合、手動でデータソースを設定する必要があります。</p>

- d. サービス接続タイプには、デフォルトの URL を変更する場合、**【編集】** ボタンをクリックし、URL を指定して **【OK】** をクリックします。

7. IBM DB2 環境で、データベースの接続プロパティを設定します。

- a. 接続プロパティを指定して **【次へ】** をクリックします。

以下の表に、接続プロパティの種類と説明を示します。

プロパティ	説明
データベース表示名	Hub コンソールに表示する必要があるオペレーショナルリファレンスストアの名前。
マシン識別子	Hub ストアインスタンスからのレコードを一意に識別するためにキーに割り当てられるプレフィックス。
データベースサーバー名	IBM DB2 データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
データベース名	作成するデータベースの名前
データベースホスト名	IBM DB2 データベースをホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。
スキーマ名	オペレーショナルリファレンスストアの名前。

プロパティ	説明
ユーザー名	オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名。デフォルトでは、これがオペレーショナルリファレンスストアを作成するために使用するスクリプトで指定するユーザー名です。このユーザーが、Hub Store 内のすべてのオペレーショナルリファレンスストアデータベースオブジェクトの所有者となります。 オペレーショナルリファレンスストアでプロキシユーザーが設定されている場合は、代わりにプロキシユーザーを指定できます。
パスワード	オペレーショナルリファレンスストアのユーザー名に関連付けられているパスワード。 IBM DB2 の場合、パスワードでは大文字と小文字が区別される。 デフォルトでは、これがオペレーショナルリファレンスストアを作成するときに指定するパスワードです。 オペレーショナルリファレンスストアでプロキシユーザーが設定されている場合は、代わりにプロキシユーザーのパスワードを指定できます。
Dynamic Data Masking ホスト	Dynamic Data Masking をホストするサーバーの IP アドレスまたは名前。 Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。
DDM 接続 URL	オプション。Dynamic Data Masking サーバーの URL。 Dynamic Data Masking を使用しない場合は、空のままにする。

注: スキーマ名とユーザー名は、どちらもオペレーショナルリファレンスストアを作成するときに指定したオペレーショナルリファレンスストアの名前です。この情報が必要な場合はデータベース管理者に問い合わせます。

【サマリ】 ページが表示されます。

- b. サマリを確認し、追加の接続プロパティを指定します。

以下の表に、設定可能な追加の接続プロパティを示します。

プロパティ	説明
接続 URL	接続 URL。接続ウィザードでは、デフォルトで接続 URL が生成されます。接続 URL のフォーマットを次の例に示す。 <code>jdbc:db2://database_host:port/db_name</code>
登録後にデータソースを作成	登録後にアプリケーションサーバーのデータソースを作成する場合は選択します。 注: このオプションを選択しない場合、手動でデータソースを設定する必要があります。

8. **【完了】** をクリックします。

【データベースの登録】 ダイアログボックスが表示されます。

9. **【OK】** をクリックします。

【アプリケーションサーバーログイン】 ダイアログボックスが表示されます。

10. WebSphere 管理ユーザー名とパスワードを入力します。

11. **【OK】** をクリックします。

MDM Hub で ORS が登録されます。

12. アプリケーションサーバーを再起動します。

13. 登録したオペレーショナルリファレンスストアを選択し、**【データベース接続のテスト】** ボタンをクリックしてデータベース設定をテストします。
[データベースのテスト] ダイアログに、データベース接続テストの結果が表示されます。
14. **【OK】** をクリックします。
ORS が登録され、データベースへの接続がテストされます。

プラットフォームトランスフォーメーションに対するクレンジング関数の設定

設定したプラットフォームトランスフォーメーションを使用する場合は、クレンジング関数ツールに IDQ ライブラリを追加します。これにより、プラットフォームトランスフォーメーションの代わりに、ライブラリ内のクレンジング関数を使用できます。

1. Hub コンソールを起動して、**クレンジング関数ツール**を開始します。
2. 書き込みロックを取得します。
3. **【クレンジング関数】** を右クリックして、**【IDQ ライブラリの追加】** をクリックします。
【IDQ ライブラリの追加】 ダイアログボックスが表示されます。
4. 以下のプロパティを指定します。

プロパティ	説明
ライブラリ名	IDQ ライブラリの名前。名前は、クレンジング関数リストでフォルダ名として表示されます。
IDQ WSDL URI	プラットフォームトランスフォーメーションに関連付けられた WSDL の URI。
IDQ WSDL サービス	プラットフォームトランスフォーメーションに関連付けられた WSDL のサービス。
IDQ WSDL ポート	プラットフォームトランスフォーメーションに関連付けられた WSDL のポート。
説明	クレンジング関数ツールに表示するライブラリの説明テキスト。

5. **【OK】** をクリックします。
IDQ ライブラリが **【クレンジング関数】** ナビゲータに表示されます。
6. **【更新】** をクリックして、IDQ ライブラリを生成します。
クレンジング関数ツールでは、プラットフォームトランスフォーメーションに関連付けられた WSDL を取得し、IDQ ライブラリを生成し、クレンジング関数リストに利用可能なクレンジング関数を表示します。
7. クレンジング関数をテストします。
プラットフォームトランスフォーメーションの代わりに、クレンジング関数を使用できるようになりました。IDQ ライブラリ内のクレンジング関数は、プラットフォームトランスフォーメーションに関連付けられた Web サービスを呼び出すことができます。

アップグレードされたメタデータの検証

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）に検証エラーがないことを確認します。この結果を、アップグレード前に得られた検証結果と比較します。メタデータを検証するため、Hub コンソールでリポジトリマネージャを使用します。

注: 前バージョンの MDM Hub からのアップグレード後も、マッピングのないステージングテーブルが含まれていた古いデータベースの検証エラーが発生する場合があります。Hub コンソールのリポジトリマネージャツールで、**【修復】** ボタンをクリックしてこのような修復可能な問題を修正します。

メタデータの検証

オペレーショナルリファレンスストア（ORS）リポジトリのメタデータを検証するには、Hub コンソールでリポジトリマネージャツールを使用します。

1. Hub コンソールの**設定**ワークベンチから、**リポジトリマネージャ**ツールを選択します。
2. **リポジトリマネージャ**ツールから、**【検証】** タブを選択します。
3. **【検証するリポジトリを選択】** リストから、リポジトリを選択します。
4. **【検証】** ボタンをクリックします。
5. **【検証チェックの選択】** ダイアログボックスから、実行する検証チェックを選択します。**【OK】** をクリックします。
リポジトリマネージャツールにより、リポジトリが検証され、すべての問題が **【検出された問題】** ペインに表示されます。
6. **【修復】** ボタンをクリックして、修復可能な問題を修正します。
7. 修正後も ORS が **【不明】** 状態の場合は、アプリケーションサーバーのシステムクロックとデータベースマシンを同期します。

検証結果の保存

検証プロセスを実行したら、検証結果を HTML ファイルとして保存できます。

1. **Hub コンソール**の**リポジトリマネージャ**ツールから、**【検証】** タブを選択します。
2. **【保存】** ボタンをクリックします。
3. **【保存】** ダイアログボックスから、検証結果を保存するディレクトリに移動します。
4. わかりやすい HTML ファイル名を指定します。**【保存】** をクリックします。
リポジトリマネージャによって、指定した場所に検証結果が HTML ファイルとして保存されます。

メタデータ検証メッセージの解決

検証ツールを実行した後に、検証メッセージが表示されることがあります。

次のエラーメッセージは、最も一般的な検証メッセージです。

警告 SIP-PV-10703 パッケージ'EMPLOYEE_DETAILS_PKG'がデータベースビューと同期されていません。

データベースビューと同期化するには、リポジトリマネージャから修復プロセスを実行します。

ビュー 'C_EMPLOYEE_DETAILS_MTIP' - プロキシユーザーロールの SELECT 特権が付与されていません。またはルート MTIP の SIP-MV-11410- SQL が正しくありません。

MTIP ビューを再作成します。

1. Hub コンソールで、設定ワークベンチを開き、**エンタープライズマネージャ**をクリックします。
2. 書き込みロックを取得します。
3. **【ORS データベース】** タブを選択します。
4. データベースを選択します。
5. **【プロパティ】** タブを選択します。
6. **【MTIP の再生成が必要】** というプロパティを見つけて、**【MTIP の再生成】** ボタンをクリックします。

ビュー 'EMPLOYEE_DETAILS_PKG' - プロキシユーザーロールの SELECT 特権が付与されていません。

この特権が含まれるようにプロキシユーザーロールを更新します。

1. Hub コンソールで、セキュリティアクセススマネージャワークベンチを開き、**【ロール】** をクリックします。
2. 書き込みロックを取得します。
3. プロキシユーザーロールを選択します。
4. **【リソース特権】** タブをクリックします。
5. メッセージで参照されているパッケージまたはテーブルを特定します。
6. **【読み取り】** チェックボックスをオンにします。

SIP-PV-11105 - ビューに対するプロキシユーザーロールの SELECT 特権が付与されていません。

ビュー 'C_REPOS_USER_GROUP_ALL' - プロキシユーザーロールの SELECT 特権が付与されていません。

データベース移行スクリプトにより、プロキシユーザーロールが作成されましたが、プロキシユーザーにはリポジトリビューに対する特権が付与されていません。データベースから、リポジトリビューに対するプロキシユーザーの SELECT 特権を付与します。

MDM Hub 環境レポートの確認

Hub コンソールのエンタープライズマネージャツールを使用して、Hub サーバー、プロセスサーバー、MDM Hub マスターデータベース、およびオペレーショナルリファレンスストアのデータベースに対する MDM Hub の現在の設定を確認します。コンポーネントのバージョン履歴を確認してください。

環境レポートのコピーをアップグレードドキュメントフォルダ upgradedoc に保存します。

MDM Hub 環境レポートの保存

MDM Hub 環境レポートを保存するには、Hub コンソールでエンタープライズマネージャツールを使用します。

1. Hub コンソールの **【設定】** ワークベンチで **エンタープライズマネージャツール** を選択します。
2. **エンタープライズマネージャツール** で **【環境レポート】** タブを選択します。
3. **【保存】** をクリックします。
4. **【Hub 環境レポートの保存】** ダイアログボックスで、環境レポートを保存するディレクトリに移動します。
5. **【保存】** をクリックします。

更新済のユーザー出口メソッドの実装

マージ後、アンマージ前およびアンマージ後のユーザー出口用の、更新済のユーザー出口メソッドを実装する必要があります。これらのユーザー出口のメソッドは、バージョン 9.7.1 で変更されました。

マージ後ユーザー出口では、次のメソッドを使用します。

```
void processUserExit(UserExitContext userExitContext, Map<String, List<String>> baseObjectRowIds) throws Exception;
```

アンマージ前ユーザー出口では、次のメソッドを使用します。

```
void processUserExit(UserExitContext userExitContext, Set<UnmergeKey> unmergeKeys) throws Exception;
```

アンマージ後ユーザー出口では、次のメソッドを使用します。

```
void processUserExit(UserExitContext userExitContext, Set<PostUnmergeResponse> responses) throws Exception;
```

ユーザー出口の実装の詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition Configuration Guide*』を参照してください。

EJB プロトコルのための SiperianClient ライブラリクラスのアップグレード

EJB プロトコルを使用して、サービス統合フレームワーク（SIF）要求を通じて MDM Hub と通信する場合は、最新バージョンの SiperianClient ライブラリクラスを使用する必要があります。カスタムの JNDI ルックアップメソッドを使用する場合は、EJB3 の規則に準拠するようにそのルックアップメソッドを更新してください。

1. 既存の SiperianClient ライブラリクラスを最新バージョンの SiperianClient ライブラリクラスに置き換えます。

SiperianClient ライブラリクラスは、以下のディレクトリにある siperian-api.jar ファイルに含まれています。

- <リソースキットのインストールディレクトリ>\sdk\sifsdk\lib
- <MDM Hub のインストールディレクトリ>\hub\server\lib

2. カスタムの JNDI ルックアップメソッドを使用する場合は、EJB3 の規則に準拠するようにそのルックアップメソッドを更新してください。

MDM Hub メタデータを準備する

アップグレードタスク	詳細
一致トークンの再生成	ベースオブジェクトごとに一致トークンの生成バッチジョブを実行します。一致トークンの生成バッチジョブは、プロセスサーバーのアップグレード時に更新する SSA-Name3 ライブラリファイルに基づいて、一致トークンを生成します。
スマート検索データの再インデックス処理	スマート検索データにアクセント記号付き文字（â、î など）が含まれている場合は、スマート検索データの初期インデックス処理バッチジョブを実行して、データの再インデックス処理を行うことができます。データの再インデックス処理を行うと、スマート検索要求で、アクセント記号付き文字が含まれるレコードを返すことができるようになります。
メタデータキャッシュの構成（省略可能）	バージョン 10.1 以前では、MDM Hub は、メタデータキャッシュに JBoss Cache を使用していました。これらのバージョンのいずれからアップグレードすると、MDM Hub サーバーは、JBoss Cache 構成ファイルではなく、Infinispan 構成ファイルを使用します。JBoss Cache と同様の結果を得るには、場合によっては Infinispan キャッシュを設定する必要があります。 詳細については、「 メタデータキャッシュの構成（オプション） 」（ページ 124）を参照してください。
カスタムインデックスを再登録します。	移行後にカスタムインデックスを再登録する必要があります。カスタムインデックスを再登録するには、registerCustomIndex SIF API を使用します。 RegisterCustomIndex SIF API の詳細については、『 <i>Informatica MDM Multidomain Edition サービス統合フレームワークガイド</i> 』を参照してください。 registerCustomIndex SIF API を実行する SOAP および Java のコードサンプルについては、KB 500116（ https://kb.informatica.com/howto/6/Pages/19/500116.aspx?myk=500116 ）を参照してください。

アップグレードテスト

アップグレードされた Informatica MDM Hub 実装をテストします。Informatica MDM Multidomain Edition のすべての実装は固有のもので、テスト要件は開発、テスト、およびプロダクション環境によって異なります。提案されたアップグレードテストがお使いの環境に適さない場合は、独自のテストを設計できます。テスト作業は、実装固有の要件を満たすように設計してください。

Informatica Data Director のアップグレードテスト

お使いの環境に適用した Informatica Data Director アップグレードの以下のテストを実行します。

1. Informatica Data Director コンフィギュレーションマネージャを起動し、Informatica Data Director アプリケーションインスタンスをデプロイします。
2. Informatica Data Director にログインします。
3. 複数の検索を実行します。
4. 複数のタスクを作成、処理します。
5. テストレコードを挿入します。
6. テストレコードをコピーし、もう 1 つのテストレコードを作成します。
7. 検索を実行して、これら 2 つのレコードを見つけます。

8. 2つのテストレコードをマージ、アンマージします。

MDM Hub アップグレードテスト

お使いの環境に対し、Hub コンソールのアップグレードの以下のテストを実行します。

1. Hub コンソールを起動します。
2. **【設定】** ワークベンチの中の **【ユーザー】** ツールを選択し、既存のユーザーのプロパティを表示します。
3. **【モデル】** ワークベンチの中の **【スキーマビューア】** ツールを選択し、オペレーショナルリファレンスストアに接続します。 **【スキーマビューア】** でスキーマを確認します。
4. **【モデル】** ワークベンチの中の **【スキーマ】** ツールを選択し、ベースオブジェクトの **【一致/マージ設定】** を表示します。
5. **【ユーティリティ】** ワークベンチで **【バッチビューア】** ツールを選択します。可能な場合は、ステージバッチジョブ、ロードバッチジョブ、マッチバッチジョブ、およびマージバッチジョブのテストバッチジョブを実行します。
6. **【ユーティリティ】** ワークベンチで Process サーバーツールを選択します。登録されている Process サーバーへの接続をテストします。
7. **【モデル】** ワークベンチで **【クレンジング関数】** ツールを選択します。外部クレンジングエンジンごとにテスト用クレンジング関数を実行します。
8. **【データスチュワード】** ワークベンチで **【データマネージャ】** ツールを選択します。一致する2つのテストレコードを作成します。
9. **【データスチュワード】** ワークベンチで **【マージマネージャ】** ツールを選択します。2つのテストレコードを探し、マージして、その後、テストレコードのマージ解除を行います。

カスタムコードのアップグレードのテスト

カスタムクライアントアプリケーションなどのカスタムコードがある場合は、それが予期したとおりに動作することを確認するテストを実行します。

Informatica Data Director および Hub サーバーのプロパティ

アップグレードプロセスでは、Informatica Data Director (IDD) に影響を与える Hub サーバーのプロパティ値が保持されます。

以前のバージョンからアップグレードする場合、アップグレード前の `cmxserver.properties` ファイルには、バージョン 10.0.0 以降で追加されたいくつかのプロパティが含まれていません。新しい Hub サーバーのプロパティによって、[データ] ワークスペース、エンティティ 360 フレームワーク、およびスマート検索を有効にするかどうかが制御されます。アップグレードプロセスにより、プロパティが `cmxserver.properties` ファイルに追加され、プロパティの値が設定されて、IDD アプリケーションの動作が以前のバージョンと同じになります。

次の表に、データワークスペース、エンティティ 360 フレームワーク、およびスマート検索のプロパティの説明と、デフォルト値を示します。

プロパティ	デフォルト値	説明
cmx.dataview.enabled	true	IDD アプリケーション開発者がサブジェクト領域モデルを実装すると、IDD ユーザーは [データ] ワークスペースを使用して、マスタデータを検索、編集、および管理します。このプロパティでは、[データ] ワークスペースと関連要素が IDD アプリケーションに表示されるかどうかを指定します。
cmx.e360.view.enabled	false	開発者がエンティティ 360 フレームワークを実装すると、IDD ユーザーは [検索] ボックスを使用してエンティティを検索し、エンティティワークスペースを使用してマスタデータを編集および管理します。このプロパティでは、エンティティワークスペースと関連要素が IDD アプリケーションに表示されるかどうかを指定します。
cmx.e360.match_xref.view.enabled	false	エンティティ 360 フレームワークの [相互参照] ビューと [一致するレコード] ビューを有効にするには、このプロパティを true に設定します。 ビジネスエンティティに基づく ActiveVOS ワークフローアダプタを使用する場合に限り、true に設定します。
cmx.ss.enabled	false	[検索] ボックスを有効にするには、このプロパティを true に設定し、スマート検索を設定します。

第 9 章

アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク

- [アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク, 93 ページ](#)

アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらず、環境が適切に構成されていることを確認するため、アプリケーションサーバーに対して ActiveVOS のインストール後のタスクを実行します。

アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスクについては、ご使用の環境に対応した『*Informatica MDM Multidomain Edition インストールガイド*』の「アプリケーションサーバーに対する ActiveVOS のインストール後のタスク」の章を参照してください。

第 10 章

ビジネスエンティティアダプタ用の ActiveVOS アップグレード後タスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク, 94 ページ](#)
- [ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定, 95 ページ](#)
- [ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定, 95 ページ](#)
- [カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新, 96 ページ](#)
- [ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定, 100 ページ](#)
- [カスタム BeMDMWorkflow プロジェクト（インプレースアップグレード）, 101 ページ](#)
- [マージ解除ワークフローおよびマージワークフローのトリガの設定（インプレースアップグレード）, 102 ページ](#)
- [Add the Entity 360 Framework Task Manager, 102](#)

ビジネスエンティティアダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらず、ビジネスエンティティに基づいて ActiveVOS ワークフローアダプタを使用する場合は、環境が適切に構成されていることを確認するため、ビジネスエンティティアダプタに対して ActiveVOS のアップグレード後のタスクを実行します。

ビジネスエンティティワークフローアダプタの ActiveVOS URN の設定

ActiveVOS サーバーには、内部的に使用する 2 つの定義済みの Uniform Resource Name (URN) があります。URN マッピングの URL は、ActiveVOS サーバーが動作しているホスト名とポート番号に変更する必要があります。

1. ActiveVOS コンソールを起動します。ブラウザで、正しいホスト名とポート番号に置き換えて、以下の URL を入力します。
暗号化接続: `https://[host]:[port]/activevos`
非暗号化接続: `http://[host]:[port]/activevos`
2. ActiveVOS コンソールのホームページで、**[Administration] > [Configure Server] > [URN Mappings]** をクリックします。
3. 以下の URN について、ActiveVOS サーバーのホスト名とポート番号を反映するようにパスを更新します。

URN	URL パス
ae:internal-reporting	暗号化接続: <code>https://[host]:[port]/activevos/internalreports</code> 非暗号化接続: <code>http://[host]:[port]/activevos/internalreports</code>
ae:task-inbox	暗号化接続: <code>https://[host]:[port]/activevos-central/avc</code> 非暗号化接続: <code>http://[host]:[port]/activevos-central/avc</code>

4. **urn:mdm:service** が MDM Hub サーバーのホスト名とポート番号にマッピングされていることを確認します。
暗号化接続: `https://[host]:[port]/cmx/services/BeServices`
非暗号化接続: `http://[host]:[port]/cmx/services/BeServices`

ActiveVOS プロトコルの HTTPS への設定

ActiveVOS と MDM Hub の間の安全な通信を有効にするには、Hub コンソールの Workflow Manager で HTTPS にプロトコルを設定します。

最初に、HTTPS 通信用のアプリケーションサーバーを設定する必要があります。

1. Hub コンソールを起動します。
2. 書き込みロックを取得します。
3. 設定ワークベンチの **[Workflow Manager]** をクリックします。
4. Workflow Manager で **[ワークフローエンジン]** タブをクリックします。
5. ActiveVOS ワークフローエンジンを選択し、**[編集]** ボタンをクリックします。
6. **[ワークフローの編集]** ダイアログボックスで、プロトコルを HTTPS に設定します。
7. WebLogic 環境では、**[ワークフローの編集]** ダイアログボックスで、abAdmin ロールに属するユーザーのユーザー名およびパスワードを入力します。

カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新

バージョン 10.0 HotFix 2 より前のワークフローをカスタマイズした場合は、各ワークフローの ActiveVOS .BPEL ファイルでプレゼンテーションパラメータを更新する必要があります。

次の表では、ビジネスエンティティワークフローアダプタを使用する環境において、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータについて説明します。

パラメータ	ビジネスエンティティワークフローアダプタの式
hubUsername	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubUsername/text()</code>
hubPassword	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubPassword/text()</code>
securityPayload	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:securityPayload/text()</code>
orsId	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:orsId/text()</code>
taskTypeName	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name/text()</code>
taskTypeDisplayName	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayName/text()</code>
taskTypeDescription	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:description/text()</code>
pendingBVT	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:pendingBVT</code>
taskTypeDataUpdateType	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:dataUpdateType/text()</code>
taskTypeDisplayType	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayType/text()</code>
defaultApproval	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:defaultApproval</code>
taskDataTaskId	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskId/text()</code>
taskDataOwnerUID	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:ownerUID/text()</code>
taskDataGroups	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:groups/mdmavxsd:groups/text()</code>
dueDate	<code>let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:dueDate/text() let \$out :=</code>
status	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:status/text()</code>

パラメータ	ビジネスエンティティワークフローアダプタの式
taskDataPriority	length(\$out) > 0))), string-length(\$out) + (string-length(\$in)) * xsd:int((string-length(\$out) = 0)))
taskDataSubjectAreaUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:subjectAreaUID/text()
taskDataTitle	let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:title/text() let \$out :=
taskDataComments	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:comments/text()
taskDataInteractionId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:interactionId/text()
taskDataCreator	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:creator/text()
createDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:createDate
taskDataUpdatedBy	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:updatedBy/text()
lastUpdateDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:lastUpdateDate
workflowVersion	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:workflowVersion/text()
beRowId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:rowId/text()
bePkeySrcObject	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:pkeySrcObject/text()
beSystem	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:system/text()
beRowidXref	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:rowidXref/text()
beTableUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:tableUID/text()
taskTypeCreationType	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:creationType/text()

次の表では、サブジェクト領域ワークフローアダプタを使用する環境において、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータについて説明します。

パラメータ	タイプ	サブジェクト領域のワークフローアダプタの式
subjectareauuid	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:subjectAreaUID
title	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:title
creator	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:creator
mdmtasktype	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
orsId	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:orsId
duedate	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:dueDate
tasktypename	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
taskTypeDisplayName	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayName
taskTypeDescription	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:description
taskTypePendingBVT	ブール	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:pendingBVT
taskTypeDataUpdateType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:dataUpdateType
taskTypeDisplayType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayType
priorityOut	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:priority
workflowVersion	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:workflowVersion/text()
<sif:encrypted>true</sif:encrypted>	ブール	\$ProcessTaskResponse/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:hubPassword/text ()

カスタマイズしたビジネスエンティティの ActiveVOS ワークフローの更新

ビジネスエンティティの ActiveVOS ワークフローをカスタマイズした場合は、各ワークフローの ActiveVOS .BPEL ファイルで、プレゼンテーションパラメータと sif:encrypted プロパティを更新する必要があります。

1. sif:encrypted を true に設定してパスワードの暗号化を有効にします。
2. プレゼンテーションパラメータを更新して、タスクのフィルタリングの問題を回避します。

次の表は、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータを示しています。

パラメータ	式
hubUsername	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubUsername/text()</code>
hubPassword	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubPassword/text()</code>
securityPayload	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:securityPayload/text()</code>
orsId	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:orsId/text()</code>
taskTypeName	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:name/text()</code>
taskTypeDisplayName	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:displayName/text()</code>
taskTypeDescription	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:description/text()</code>
pendingBVT	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:pendingBVT</code>
taskTypeDataUpdateType	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:dataUpdateType/text()</code>
taskTypeDisplayType	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:displayType/text()</code>
defaultApproval	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:defaultApproval</code>
taskDataTaskId	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskId/text()</code>
taskDataOwnerUID	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:ownerUID/text()</code>
taskDataGroups	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:groups/mdmavxsd:groups/text()</code>
dueDate	<code>let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:dueDate/text() let \$out :=</code>
status	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:status/text()</code>
taskDataPriority	<code>length(\$out) > 0))), string-length(\$out) + (string-length(\$in)) * xsd:int((string- length(\$out) = 0)))</code>
taskDataSubjectAreaUID	<code>\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:subjectAreaUID/text()</code>
taskDataTitle	<code>let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:title/text() let \$out :=</code>

パラメータ	式
taskDataComments	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:comments/text()
taskDataInteractionId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:interactionId/text()
taskDataCreator	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:creator/text()
createDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:createDate
taskDataUpdatedBy	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:updatedBy/text()
lastUpdateDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:lastUpdateDate
workflowVersion	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:workflowVersion/ text()
beRowId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:rowId/text()
bePkeySrcObject	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/ mdmavxsd:pkeySrcObject/text()
beSystem	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:system/ text()
beRowidXref	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/ mdmavxsd:rowidXref/text()
beTableUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:tableUID/ text()
taskTypeCreationType	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:creationType/text()

.BPEL ファイルの更新の詳細については、ActiveVOS のマニュアルを参照してください。

ActiveVOS 用の MDM Identity Service の設定

埋め込み ActiveVOS を使用している場合は、MDM Identity Service を使用するように ActiveVOS を設定してください。ActiveVOS 用の MDM Identity Service を設定するには、ActiveVOS コンソールを使用して、MDM Hub ワークフローエンジンユーザーのパスワードを Identity Service のパスワードに設定します。

1. ActiveVOS コンソールで、**[管理] > [サービスの設定] > [Identity Service]** を選択します。

2. [プロバイダ設定] セクションで、[有効] チェックボックスを有効にして、[プロバイダタイプ] から [MDM] を選択します。
3. [接続] タブで、ユーザー名を admin として MDM Hub ユーザーのパスワードを入力します。
注: 後で管理者ユーザーのパスワードを変更する場合、ActiveVOS ID サービス設定で新しいパスワードを入力する必要があります。
4. [更新] をクリックします。
5. ActiveVOS が admin ユーザーとして MDM Hub にログインできるかどうか、[テストのユーザー] として指定したユーザーのロールのリストを ActiveVOS が取得できるかどうかをテストします。
 - a. [テスト] タブを選択します。
 - b. [テストのユーザー] フィールドに、ロールに割り当てられた MDM Hub ユーザーを入力します。
 - c. [テスト設定] をクリックします。
注: オペレーショナル参照ストアが設定されておらず、テストのユーザーがロールに属していない場合、テストは失敗します。

カスタム BeMDMWorkflow プロジェクト（インプレースアップグレード）

BeMDMWorkflow プロジェクトのワークフローをカスタマイズした場合は、プロジェクトを更新してから再デプロイすることを確認します。

1. Informatica ActiveVOS Designer でプロジェクトエクスプローラを使用して、**BeCommonMDM > wsdl > cs.wsdl** に移動します。
2. **cs.wsdl** を右クリックして、[アプリケーションから開く] > [テキストエディタ] を選択します。
3. テキストエディタで次のコードに移動します。

```
<xsd:complexType name="TaskFilter">
  <xsd:sequence>
```
4. 次のコードを追加します。

```
<xsd:element minOccurs="0" name="overdueOnly" type="xsd:boolean" />
```
5. Informatica ActiveVOS Designer で、エクスポートする BeCommonMDM プロジェクトを開きます。
6. [ファイル] > [エクスポート] をクリックします。
[エクスポート] ダイアログボックスが開きます。
7. [Orchestration] の下で、[コントリビューション-ビジネスプロセスアーカイブ] を選択します。[次へ] をクリックします。
8. [デプロイメント URL] フィールド（[サーバーデプロイメントオプション] の下）に、ActiveVOS インスタンスの URL を入力します。[完了] をクリックします。
9. [デプロイメントの完了] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。

マージ解除ワークフローおよびマージワークフローのトリガの設定（インプレースアップグレード）

MDM Multidomain Edition バージョン 10.2 で導入された、マージ解除ワークフローおよびマージワークフローのトリガを設定する必要があります。マージ解除ワークフローおよびマージワークフローのトリガを設定するには、プロビジョニングツールを使用します。

詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

Add the Entity 360 Framework Task Manager

When you use the business entity ActiveVOS workflow adapter, you use the Entity 360 framework Task Manager and Entity 360 framework task inbox.

Update the Informatica Data Director configuration to replace the legacy task inbox. You can add the Entity 360 framework task inbox to the **Home** page and record views. For more information about designing the Informatica Data Director user interface, see the 『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』.

第 11 章

サブジェクト領域アダプタ用の ActiveVOS アップグレード後タスク

この章では、以下の項目について説明します。

- [サブジェクト領域アダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク, 103 ページ](#)
- [ActiveVOS URN の更新, 104 ページ](#)
- [ActiveVOS の信頼されたユーザーの確認, 104 ページ](#)
- [サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの Informatica Data Director タスク設定の更新, 105 ページ](#)
- [カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新, 107 ページ](#)
- [サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの再デプロイ, 111 ページ](#)
- [ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成ファイルの生成, 111 ページ](#)

サブジェクト領域アダプタに対する ActiveVOS のアップグレード後のタスク

クリーンアップグレードまたはインプレースアップグレードを実行するかどうかにかかわらずサブジェクト領域に基づいて ActiveVOS ワークフローアダプタを使用する場合は、環境が適切に構成されていることを確認するため、サブジェクト領域アダプタに対して ActiveVOS のアップグレード後のタスクを実行します。

ActiveVOS URN の更新

HTTP Secure (HTTPS) プロトコルを使用して MDM Hub と ActiveVOS の間の通信を保護するには、URN パスの URL を http から https に変更します。

1. ActiveVOS コンソールを起動します。ブラウザで、正しいホスト名とポート番号に置き換えて、以下の URL を入力します。
保護されている接続。https://<host>:<port>/activevos
保護されていない接続。http://<host>:<port>/activevos
2. ActiveVOS コンソールのホームページで、**[Administration] > [Configure Server] > [URN Mappings]** をクリックします。
3. 以下の URN について、ActiveVOS サーバーのホスト名とポート番号を反映するようにパスを更新します。

URN	URL パス
ae:internal-reporting	保護されている接続。https://<host>:<port>/activevos/internalreports 保護されていない接続。http://<host>:<port>/activevos/internalreports
ae:task-inbox	保護されている接続。https://<host>:<port>/activevos-central/avc 保護されていない接続。http://<host>:<port>/activevos-central/avc

4. **MDMHost:InfMDM** が MDM Hub サーバーのホスト名とポート番号にマップされていることを確認します。
保護されている接続。https://<host>:<port>/cmx/services/SifService
保護されていない接続。http://<host>:<port>/cmx/services/SifService

ActiveVOS の信頼されたユーザーの確認

Hub コンソールで、ActiveVOS ワークフローエンジン設定に信頼されたユーザーが指定されていることを確認します。

1. Hub コンソールの設定ワークベンチで **[Workflow Manager]** をクリックします。
2. **[ワークフローエンジン]** タブを選択します。
3. 書き込みロックを取得します。
4. **[ActiveVOS]** を選択し、**[編集]** ボタンをクリックします。
5. **[ワークフローの編集]** ダイアログボックスで、信頼されたユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。
6. **[OK]** をクリックします。

サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの Informatica Data Director タスク設定の更新

タスクマネージャでサブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用するには、Informatica Data Director の構成ファイルを更新する必要があります。サブジェクト領域に基づいた ActiveVOS ワークフローを使用している場合、ビジネスエンティティに基づいた ActiveVOS ワークフローに移行することはできません。

Informatica Data Director の構成ファイルで以下のタスクパラメータを設定できます。

taskType

タスクタイプを示します。

taskTypeID

プロセス名です。

name

taskType の名前です。この名前は、ActiveVOS ワークフロー設定内のタスクの名前と同じにする必要があります。

サブジェクト領域ベースの ActiveVOS アダプタの IDD 設定の更新

ビジネスエンティティベースのタスクマネージャでサブジェクト領域ベースの ActiveVOS ワークフローアダプタを使用するには、Informatica Data Director 構成ファイルを更新します。Informatica Data Director 構成ファイルを更新しないと、タスクの作成にタスクマネージャを使用できません。

次のコードサンプルは、サブジェクト領域ベースの ActiveVOS タスクを MDM Multidomain Edition で提供されるワークフローの Informatica Data Director 構成ファイルに設定する方法を示します。

```
<tasks includeUnassignedTasks="true">
<!-- Task Definitions -->
<taskType taskTypeId="IDDMergeTask" name="AVOSMerge" displayName="Merge" creationType="MERGE"
displayName="MERGE">
  <description>Merge two records together.</description>
</taskType>

<taskType taskTypeId="IDDUndermergeTask" name="AVOSUndermerge" displayName="Undermerge" creationType="UNDERMERGE"
displayName="UNDERMERGE">
  <description>Undermerge an XREF record from a Base Object record.
</description>
</taskType>

<taskType taskTypeId="IDDOneStepApprovalTask" name="AVOSFinalReview" displayName="Final review" creationType="NONE" pendingBVT="true">
  <description>Update a record and require the user to go through an approval process before completing the task.
</description>
</taskType>

<taskType name="Notification" displayName="Notification" creationType="NONE" displayName="NORMAL">
  <description>Notification step in the workflow</description>
</taskType>

<taskType taskTypeId="IDDTwoStepApprovalTask" name="AVOSReviewNoApprove"
displayName="NORMAL" displayName="Review no approve" creationType="NONE"
defaultApproval="true" pendingBVT="true">
  <description>Update a record and require the user to go through an approval process
before completing the task.
</description>
</taskType>

<taskType taskTypeId="IDDUndermergeWithApprovalTask" name="Update" displayName="NORMAL" displayName="Update"
```

```

creationType="CREATE" pendingBVT="true">
  <description>Update a record and do not require the user to go through an approval
    process before completing the task. The approval step is optional.
  </description>
</taskType>

</tasks>

```

サブジェクト領域ワークフローアダプタのタスクトリガの設定

タスクマネージャでサブジェクト領域に基づいた ActiveVOS ワークフローを使用するには、タスクトリガを設定する必要があります。タスクトリガを設定しない場合は、タスクがタスクマネージャに表示されません。

トリガを設定するには、プロビジョニングツールを使用して [詳細設定] ページからタスク構成ファイルを編集します。詳細については、『*Informatica MDM Multidomain Edition プロビジョニングツールガイド*』を参照してください。

以下の startWorkflow 属性を設定すると、タスクトリガを設定できます。

プロセス

ActiveVOS ワークフロープロセスの名前。

taskKind

プロセスに必要なユーザーインタフェースのタイプを定義します。REVIEW、MERGE、または UNMERGE を定義できます。taskKind は、ActiveVOS ワークフローエンジンによって返されます。

taskTemplate

使用するタスクテンプレートの名前。

firstTask Type

ワークフローの最初のタスク。オプション。このパラメータにより、タスク作成時にそのタスクを割り当てられます。

2 段階承認のコードサンプル

次のコードサンプルは、2 段階承認タスクのためのサブジェクト領域に基づいた ActiveVOS アダプタの startWorkflow 要素設定を示します。

```

<trigger name="DefaultApproval">
  <startWorkflow process="IDDTwoStepApprovalTask" taskKind="REVIEW" taskTemplate="DefaultApproval"
    firstTaskType="AVOSReviewNoApprove"/>
  <event name="CreateBE"/>
  <event name="UpdateBE"/>
  <role name="*/>
</trigger>

```

1 段階承認のコードサンプル

次のコードサンプルは、1 段階承認タスクのためのサブジェクト領域に基づいた ActiveVOS アダプタの startWorkflow 要素設定を示します。

```

  <trigger name="DefaultApproval">
    <startWorkflow process="IDDOneStepApprovalTask" taskKind="REVIEW" taskTemplate="DefaultApproval"
      firstTaskType="AVOSFinalReview"/>
    <event name="CreateBE"/>
    <event name="UpdateBE"/>
    <role name="*/>
  </trigger>

```

承認を伴う更新のコードサンプル

次のコードサンプルは、承認を伴う更新タスクのためのサブジェクト領域に基づいた ActiveVOS アダプタの startWorkflow 要素設定を示します。

```
<trigger name="DefaultApproval">
  <startWorkflow process="IDDUpdateWithApprovalTask" taskKind="REVIEW" taskTemplate="DefaultApproval"
    firstTaskType="Update"/>
  <event name="CreateBE"/>
  <event name="UpdateBE"/>
  <role name="*/>
</trigger>
```

マージのコードサンプル

次のコードサンプルは、マージタスクのためのサブジェクト領域に基づいた ActiveVOS アダプタの startWorkflow 要素設定を示します。

```
<trigger name="Matched">
  <startWorkflow process="IDDMergeTask" taskKind="MERGE" taskTemplate="MergeTaskGenerator"
    firstTaskType="AVOSMerge"/>
  <event name="MatchedBE"/>
  <role name="SYSTEM"/>
</trigger>
```

カスタマイズしたワークフローのプレゼンテーションパラメータの更新

バージョン 10.0 HotFix 2 より前のワークフローをカスタマイズした場合は、各ワークフローの ActiveVOS .BPEL ファイルでプレゼンテーションパラメータを更新する必要があります。

次の表では、ビジネスエンティティワークフローアダプタを使用する環境において、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータについて説明します。

パラメータ	ビジネスエンティティワークフローアダプタの式
hubUsername	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubUsername/text()
hubPassword	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:hubPassword/text()
securityPayload	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:securityPayload/text()
orsId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:orsId/text()
taskTypeName	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:name/text()
taskTypeDisplayName	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:displayName/text()
taskTypeDescription	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:description/text()
pendingBVT	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:pendingBVT

パラメータ	ビジネスエンティティワークフローアダプタの式
taskTypeDataUpdateType	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:dataUpdateType/text()
taskTypeDisplayType	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:displayType/text()
defaultApproval	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:defaultApproval
taskDataTaskId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskId/text()
taskDataOwnerUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:ownerUID/text()
taskDataGroups	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:groups/mdmavxsd:groups/text()
dueDate	let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:dueDate/text() let \$out :=
status	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:status/text()
taskDataPriority	length(\$out > 0))), string-length(\$out) + (string-length(\$in)) * xsd:int((string- length(\$out) = 0)))
taskDataSubjectAreaUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:subjectAreaUID/text()
taskDataTitle	let \$in := \$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:title/text() let \$out :=
taskDataComments	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:comments/text()
taskDataInteractionId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:interactionId/text()
taskDataCreator	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:creator/text()
createDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:createDate
taskDataUpdatedBy	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:updatedBy/text()
lastUpdateDate	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:lastUpdateDate
workflowVersion	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:workflowVersion/ text()

パラメータ	ビジネスエンティティワークフローアダプタの式
beRowId	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:rowId/text()
bePkeySrcObject	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/ mdmavxsd:pkeySrcObject/text()
beSystem	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:system/ text()
beRowidXref	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/ mdmavxsd:rowidXref/text()
beTableUID	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskData/ mdmavxsd:taskRecords/mdmavxsd:INFARecordKey[1]/mdmavxsd:tableUID/ text()
taskTypeCreationType	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/mdmavxsd:taskType/ mdmavxsd:creationType/text()

次の表では、サブジェクト領域ワークフローアダプタを使用する環境において、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータについて説明します。

パラメータ	タイプ	サブジェクト領域のワークフローアダプタの式
subjectareauuid	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:subjectAreaUID
title	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:title
creator	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:creator
mdmtasktype	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
orsId	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:orsId
duedate	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:dueDate
tasktypename	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
taskTypeDisplayName	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayName
taskTypeDescription	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:description
taskTypePendingBVT	ブール	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:pendingBVT
taskTypeDataUpdateType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:dataUpdateType

パラメータ	タイプ	サブジェクト領域のワークフローアダプタの式
taskTypeDisplayType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayType
priorityOut	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:priority
workflowVersion	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:workflowVersion/text()
<sif:encrypted>true</sif:encrypted>	ブール	\$ProcessTaskResponse/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:hubPassword/text ()

カスタマイズしたサブジェクト領域の ActiveVOS ワークフローの更新

サブジェクト領域の ActiveVOS ワークフローをカスタマイズした場合は、各ワークフローの ActiveVOS .BPEL ファイルで、プレゼンテーションパラメータと sif:encrypted プロパティを更新する必要があります。

1. sif:encrypted を true に設定してパスワードの暗号化を有効にします。
2. プレゼンテーションパラメータを更新して、タスクのフィルタリングの問題を回避します。

次の表は、ActiveVOS プロジェクトで追加または更新する必要があるプレゼンテーションパラメータを示しています。

パラメータ	タイプ	式
subjectareaid	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:subjectAreaUID
title	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:title
creator	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:creator
mdmtasktype	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
orsId	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:orsId
duedate	文字列	\$InfaTask/mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:dueDate
tasktypename	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:name
taskTypeDisplayName	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayName
taskTypeDescription	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:description
taskTypePendingBVT	ブール	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:pendingBVT
taskTypeDataUpdateType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:dataUpdateType

パラメータ	タイプ	式
taskTypeDisplayType	文字列	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskType/mdmavxsd:displayType
priorityOut	string	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:taskData/mdmavxsd:priority
workflowVersion	string	\$ProcessTaskRequest/mdmavxsd:INFATask/ mdmavxsd:workflowVersion/text()

.BPEL ファイルの更新の詳細については、ActiveVOS のマニュアルを参照してください。

サブジェクト領域に基づく ActiveVOS ワークフローの再デプロイ

バージョン 10.0 HotFix 2 では、サブジェクト領域に基づいたワークフローアダプタ用の ActiveVOS ワークフローが変更されました。サブジェクト領域に基づいたワークフローアダプタを使用する場合、リソースキットで提供されるデフォルトワークフローを再デプロイする必要があります。タスクワークフローが含まれる Informatica ActiveVOS プロジェクトを MDM Hub サーバーにデプロイするには、まず CommonMDM プロジェクトをエクスポートし、次に MDMWorkflow プロジェクトをエクスポートします。

1. Informatica ActiveVOS Designer で、エクスポートする BeCommonMDM プロジェクトを開きます。
2. **【ファイル】 > 【エクスポート】** をクリックします。
【エクスポート】 ダイアログボックスが開きます。
3. **【Orchestration】** の下で、**【コントリビューション-ビジネスプロセスアーカイブ】** を選択します。**【次へ】** をクリックします。
4. **【デプロイメント URL】** フィールド (**【サーバーデプロイメントオプション】** の下) に、ActiveVOS インスタンスの URL を入力します。**【完了】** をクリックします。
5. **【デプロイメントの完了】** ダイアログボックスで、**【OK】** をクリックします。
6. BeMDMWorkflow プロジェクトについてすべての手順を繰り返します。
BeMDMWorkflow プロジェクトをエクスポートする前に、BeCommonMDM プロジェクトをエクスポートする必要があります。

ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成ファイルの生成

ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成ファイルを生成するには、Informatica Data Director コンフィギュレーションマネージャを使用します。

1. コンフィギュレーションマネージャの **【アプリケーション】** ペインで、ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成内に構成を生成する Informatica Data Director アプリケーションを選択します。

2. **【ビジネスエンティティスキーマの生成】** をクリックします。

コンフィギュレーションマネージャによって、ビジネスエンティティとビジネスエンティティサービスの設定が生成されます。

3. コンフィギュレーションマネージャに、ビジネスエンティティおよびビジネスエンティティサービス構成の生成中に発生した問題のメッセージが表示されます。メッセージは、コンフィギュレーションマネージャが生成処理中に問題を解決したかどうかを示し、および問題解決のためにコンフィギュレーションマネージャが行った変更について説明します。コンフィギュレーションマネージャが問題を解決しなかった場合は、問題と、問題解決のために行える推奨アクションを書き留めます。

付録 A

トラブルシューティング

- [アップグレードプロセスのトラブルシューティング, 113 ページ](#)

アップグレードプロセスのトラブルシューティング

アップグレードに失敗したか、アップグレード中に問題が発生した場合は、次の情報を利用して問題のトラブルシューティングを行います。

EAR ファイルが JBoss 環境で許可される時間内にデプロイされない。

オペレーションリファレンスストアの数が増えると、EAR ファイルのデプロイメント時間も長くなります。EAR ファイルのデプロイメント時間が、JBoss 環境で許可される時間を超えると、アップグレードは失敗します。

この問題を解決するには、EAR ファイルのデプロイメント時間に対応するように、許可されるデプロイメント時間を増やします。許可される時間のデフォルトは 600 秒です。

1. `deploy.wait.time` プロパティ（次のディレクトリの `build.properties` ファイル内）の値を増やします。
`<infamdm installation directory>/hub/server/bin`
2. 次のディレクトリに移動します。 `<JBoss installation directory>/standalone/configuration`
3. `standalone-full.xml` ファイルに次のコードを設定してタイムアウト値を増やします。

```
<subsystem xmlns="urn:jboss:domain:deployment-scanner:1.1">
  <deployment-scanner path="deployments" relative-to="jboss.server.base.dir" scan-interval="5000"
    deployment-timeout="1200"/>
</subsystem>
```

Hub サーバーのアップグレードが失敗しました。

この問題を解決するには、EAR ファイルを再デプロイして Hub サーバーのアップグレードを再試行します。

注: JBoss 環境で JBoss の実行中に `standalone-full.xml` ファイルの中のデータソースの設定を手動で変更すると、`patchInstallSetup` スクリプトを実行したときに設定の変更が失われます。

1. 次のディレクトリに移動します。 `<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server`
2. 次のコマンドを実行して、Hub サーバーアプリケーションをデプロイし、アプリケーションサーバーの設定に変更を適用します。

注: 使用する環境に埋め込み ActiveVOS がない場合は、コマンドに ActiveVOS のユーザー名とパスワードを含める必要はありません。

UNIX の場合:

WebLogic

```
patchInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<WebLogic password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ有効)

```
patchInstallSetup.sh -Dwebsphere.password=<WebSphere password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ無効)

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

注: UNIX でパスワードに感嘆符 (!) を含める場合、感嘆符の前にバックスラッシュを付ける必要があります。例えば、パスワードが!!cmx!!の場合は、\!\\cmx\\! \\と入力します。

Windows の場合:

WebLogic

```
patchInstallSetup.bat -Dweblogic.password=<WebLogic password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ有効)

```
patchInstallSetup.bat -Dwebsphere.password=<WebSphere password> -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

WebSphere (セキュリティ無効)

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<MDM Hub Master database password> -Davos.username=<ActiveVOS Console username> -Davos.password=<ActiveVOS Console password> -Davos.jdbc.database.password=<ActiveVOS database password>
```

ActiveVOS コンソールの資格情報は、アプリケーションサーバーの管理者ユーザーの資格情報と同じです。

ActiveVOS データベースの資格情報は、create_bpm スクリプトを実行するために使用した資格情報と同じです。

WebLogic 環境でプロセスサーバーのアップグレードが失敗しました。

WebLogic 環境でプロセスサーバーをアップグレードする場合、次のエラーでアップグレードが失敗することがあります。

```
Unable to start application, deployment error msg: weblogic.management.ManagementException: [Deployer: 149196]Rejecting start request for application siperian-mrm-cleanse.ear because stop request is running for the application.
```

問題を解決するには、WebLogic 管理コンソールを使用して siperian-mrm-cleanse.ear ファイルを手動でデプロイしてから、アプリケーションサーバーを再起動します。

プロセスサーバーのアップグレードが失敗しました。

この問題を解決するには、EAR ファイルを再デプロイしてプロセスサーバーのアップグレードを再試行します。

注: JBoss の実行中に standalone-full.xml 中のデータソースの設定を手動で変更すると、patchInstallSetup スクリプトを実行したときに設定の変更が失われます。

1. 次のディレクトリに移動します。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/cleanse
2. 次のコマンドを実行して、プロセスサーバーアプリケーションをデプロイし、アプリケーションサーバーの設定に変更を適用します。

UNIX の場合:

WebLogic

```
patchInstallSetup.sh -Dweblogic.password=<WebLogic password: WebLogic パスワード> -  
Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

WebSphere

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.sh -Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

Windows の場合:

WebLogic

```
patchInstallSetup.bat -Dweblogic.password=<WebLogic password: WebLogic パスワード> -  
Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

WebSphere

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

JBoss

```
patchInstallSetup.bat -Ddatabase.password=<your database password: データベースパスワード>
```

注: UNIX でパスワードに感嘆符 (!) を含める場合、感嘆符の前にバックスラッシュを付ける必要があります。例えば、パスワードが!!cmx!!の場合は、\!\!cmx\!\!と入力します。

Informatica プラットフォームのアップグレードが失敗する。

Informatica プラットフォームが正常にインストールされたことを確認するには、次のナレッジベースの記事を参照してください。 <https://kb.informatica.com/faq/7/Pages/14/306938.aspx?myk=KB%20306938>

Informatica プラットフォームのインストールが正常に行われなかった場合のトラブルシューティングを行うには、次のナレッジベースの記事を参照してください。

<https://kb.informatica.com/faq/7/Pages/14/306941.aspx?myk=KB%20306941>

オペレーショナル参照ストアをアップグレードする際、Oracle でエラー ORA-20005 が生成される。

sip_ant updateorsdatabase を実行するとエラー ORA-20005 が発生する場合は、以下の手順を実行します。

1. 次のコマンドを実行し、必要な権限を付与します。

```
exec dbms_java.grant_permission(upper('ORS_USER'),'SYS:java.net.SocketPermission','*',  
'connect,resolve');
```
2. 次のコマンドを実行して、Oracle に Java クラスがロードされていることを確認します。

```
select dbms_java.longname(object_name), status from user_objects where object_type='JAVA CLASS';
```

3. これらのクラスがロードされていない場合は、次のコマンドを実行してこれらのクラスを再ロードします。

```
loadjava -verbose -force -resolve -oracleresolver -user &ors_name/&ors_passwd@&tns_name siperian-  
cleansecaller.jar  
loadjava -verbose -force -resolve -oracleresolver -user &ors_name/&ors_passwd@&tns_name siperian-  
dbutil.jar
```

Hub ストアのアップグレードが失敗しました。

部分的にアップグレードされたスキーマで Hub ストアのアップグレードを再実行することはできません。アップグレードが失敗した場合は、フルバックアップからデータベースをリストアし、Hub ストアのアップグレードを再度実行します。

カラム名に予約語が含まれていることが原因で Hub ストアのアップグレードが失敗する場合は、名前を変更したカラムにデータを移行するスクリプトについて、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

英語以外のロケールを使用してアップグレードすると、一部のテーブルは英語で表示され、一部のテーブルはロケールの言語で表示される。

Hub ストアデータベース環境を英語以外のロケールに設定する場合は、必ず文字セットを Unicode に変更したうえで、アップグレードスクリプトを実行して MDM Hub マスターデータベースとオペレーショナル参照ストアをアップグレードします。アップグレード時に、テーブルのメタデータはすべて翻訳キーを使用して英語に翻訳されます。Unicode 文字セットを選択していない場合は、一部のテーブルのみが翻訳されます。

Hub コンソールが JBoss 環境で起動できない

JBoss 環境では、JBoss アプリケーションサーバーが再起動しない場合、Hub コンソールを起動することはできません。MDM Hub により、リポジトリレイヤが初期化されなかったことを示すエラーが生成されます。

問題を解決するには、バッチファイルで以下のコードを実行して JBoss を再起動します。

```
rmmdir C:\<JBoss installation directory>\standalone\tmp /s /q  
mkmdir C:\<JBoss installation directory>\standalone\tmp  
C:\<JBoss installation directory>\bin\standalone.bat -c standalone-full.xml -b 0.0.0.0
```

Hub コンソールが DB2 環境で起動できない

DB2 データソースを含む MDM Hub 環境で Hub コンソールが起動できず、以下のエラーが表示されたとします。

SIP-09070: SIP-10318: データアクセスエラーにより、ユーザーを取得できませんでした。

SIP-10324: データオブジェクトをロードしようとしたときに、予期せぬ例外が発生しました。

java.lang.NullPointerException

この問題は、MDM Hub の管理者ユーザー名とアプリケーションサーバーの管理者ユーザー名における大文字と小文字の不一致によって発生します。例えば、MDM Hub の管理者ユーザーが DB2ADMIN（大文字）であるのに対し、アプリケーションサーバーの管理者ユーザーが db2admin（小文字）である場合がこれに該当します。

この問題を解決するには、アプリケーションサーバーのユーザー名を MDM Hub のユーザー名と厳密に一致させる必要があります。

注: 大文字と小文字の区別に関連する問題を回避するには、DB2 用のユーザー名を定義する際にすべて大文字を使用することをお勧めします。

例えば、WebSphere を使用する場合には、ユーザー名を WebSphere コンソールで設定します。

1. WebSphere コンソールを開きます。
2. [リソース] > [データソース] > [siperian-cmx_system-ds] > [カスタムプロパティ] .
3. [ユーザー] フィールドに DB2ADMIN と大文字で入力します。

4. [パスワード] フィールドにこのユーザーのパスワードを入力します。
5. [適用] をクリックしてから [保存] をクリックします。
6. WebSphere を再起動します。
7. Hub コンソールを起動し、ログインします。

IDD では、ユーザーが従来のデータビューを使用して、サブジェクト領域に基づくレコードを表示できない。

IDD のレコードを表示するデフォルトのページは、ビジネスエンティティに基づくエンティティビューです。

従来のデータビューを使用するには、cmxserver.properties ファイルで dataview.enabled を true に設定します。

詳細については、次のハウツー記事「*Migrating IDD Applications to the Business Entity Data Model*」を参照してください。

IDD がエラー SIP-BV-11500 で失敗する。

次のエラーが発生すると、IDD が失敗することがあります。SIP-BV-11500 Fatal Error Operational Reference Store localhost-orcl-MDM_SAMPLE does not have a workflow engine configured.Each Operational Reference Store must have a workflow engine configured for use with the IDD even if workflow will not be used.

この問題を解決するには、プライマリワークフローアダプタが構成されていることを確認します。

詳細については、次の KB の記事を参照してください。

<https://kb.informatica.com/solution/23/Pages/55/381456.aspx?myk=381456>

メタデータを検証するときに、オブジェクトがデータベースではなくメタデータに存在することを示すエラーが表示される。

リポジトリマネージャを使用して問題を修正すると、次のエラーが発生します。ORA-00955 既存のオブジェクトによって名前がすでに使用されています。

この問題を解決するには、エラーが発生したテーブルに対して、プロキシロールの正しい権限が付与されていることを確認します。必要なアクセス許可の一覧を取得するには、エラーが発生しないテーブルを参照してください。

Windows で、一致トークンの生成時に、エラーが発生する。

Generate Match Tokens プロセスで、クラス ssa.ssaname3.jssan3cl が初期化できないというエラーが返される。

1. SSA-NAME3 の DLL (dynamic linked library) ファイルが含まれるディレクトリ<MDM installation directory>/hub/cleanse/lib へのパスが PATH 環境変数に含まれているかを確認します。
2. MDM Hub の検索および一致を実行するプロセスサーバーに Visual Studio 2015 の Microsoft Visual C++再頒布可能パッケージがインストールされているかを確認します。
3. Visual Studio 2015 の Microsoft Visual C++再頒布可能パッケージがインストールされている場合は、依存性チェッカー (Dependency Walker (depends.exe) など) を使用して jssan3cl.dll をロードし、Visual C++再頒布可能パッケージが正常に適用されていることを確認します。

ヒント: Visual Studio 2015 の Visual C++再頒布可能パッケージには、Windows Server にオペレーティングシステムパッチがインストールされていることが必要です。Visual C++再頒布可能パッケージをインストールする前に、オペレーティングシステム要件を確認します。たとえば、Windows Server 2012 のベースラインバージョン以降、Visual C++再頒布可能パッケージを正常にインストールするには、オペレーティングシステムに約 100 個のパッチ (合計約 2 GB) を適用する必要があります。

WebLogic アプリケーションサーバーの Microsoft SQL Server 環境でアップグレードを行った後に、Hub コンソールにログインできない。

Hub コンソールにログインすると、NULL ポインタ例外が発生します。

この問題を解決するには、<Microsoft SQL Server installation directory>\sqljdbc_4.0\enu\xa にある xa_install.sql スクリプトで、削除コマンド、スキーマの作成コマンド、およびロールコマンドをコメントアウトします。スクリプトを実行して、アプリケーションサーバーを再起動します。

WebSphere アプリケーションサーバーに Hub サーバーをインストールすると、アップグレードコンポーネント patchInstallSetup が失敗する。

この問題を解決するには、ファイル<WebSphere profile home>/properties/soap.client.props を開いて com.ibm.SOAP.requestTimeout を大きくしてから、WebSphere サーバプロファイルを再起動します。patchInstallSetup.bat を再度実行します。

IBM AIX 環境で Hub サーバーをアップグレードするとき、entity360view.ear ファイルがデプロイに失敗する。

この問題を解決するには、patchInstallSetup.sh スクリプトを実行します。

付録 B

アップグレードの FAQ（よくある質問）

- [FAQ（よくある質問）](#), 119 ページ

FAQ（よくある質問）

アップグレードするには新しいライセンスファイルが必要ですか？

はい。10.2 より前のバージョンの MDM Multidomain Edition からアップグレードする場合は、新しいライセンスファイルが必要です。

10.0 より前のバージョンのデータベースのユーザーイグジットを使用できますか？

いいえ。データベースレイヤで実行されるデータベースのユーザーイグジットは、バージョン 10.0 以降では廃止されています。

アップグレードプロセス中に DBA のユーザー名とパスワードを提供する必要があるのはなぜですか？

アップグレードプロセスでは、権限の付与やシーケンスの作成など、DBA レベルの権限を必要とするアクションを実行します。アップグレードプロセスでこれらのアクションを実行できるようにするには、DBA 資格情報が必要です。

アップグレードプロセス中に、ActiveVOS の既存のバージョンはどうなりますか？

ActiveVOS がインストールされている環境でインプレースアップグレードを実行すると、アップグレードプロセスによって、環境に最新バージョンの ActiveVOS がインストールされます（まだインストールされていない場合）。必要な ActiveVOS のバージョンを確認するには、Informatica Network で製品可用性マトリックス (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview>) を参照してください。

ActiveVOS がインストールされていない環境では、MDM アップグレードプロセス中に ActiveVOS をインストールすることは必須ですか？

いいえ。アップグレードプロセス中に、ActiveVOS をインストールするかどうかを選択するように求められます。

このバージョンでは、Informatica Data Director の推奨画面解像度が変更されていますか？

いいえ。推奨画面解像度は変更されていません。Informatica Data Director の推奨画面解像度は 1280 x 1024 です。

バージョン 10.2 以降でスマート検索を有効にすることは必須ですか？

ビジネスエンティティを構成していて、サブジェクト領域の構成がない場合は、スマート検索を使用する必要があります。従来の Informatica Data Director の実装でサブジェクト領域を定義している場合は、従来の検索のみが使用できます。

Informatica MDM Multidomain Edition バージョン 10.2 以降にアップグレードするときに、Informatica Data Quality をアップグレードする必要がありますか？

はい。環境内で Informatica Data Quality (IDQ) を使用する場合は、バージョン 10.1 の IDQ にアップグレードする必要があります。システム要件については、Informatica Network で製品可用性マトリックス (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview>) を参照してください。

MDM Hub のセキュリティをカスタマイズする方法は？

MDM Hub のセキュリティのカスタマイズの詳細については、*Informatica MDM Multidomain Edition セキュリティガイド*とハウツー記事「*Using the Security Configuration Utility in MDM Multidomain Edition*」を参照してください。

Java 8 はサポートされていますか？

はい。Informatica MDM Multidomain Edition バージョン 10.2 は Java 8 をサポートしています。システム要件については、Informatica Network で製品可用性マトリックス (<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices/overview>) を参照してください。

注: ActiveVOS には Java 7 が必要です。

Informatica プラットフォームをインストールしないと、なぜ Informatica プラットフォーム EAR ファイルがデプロイされるのですか？

Informatica プラットフォーム EAR は、MDM Hub がプラットフォームと通信できるようにデプロイされます。Informatica プラットフォームがインストールされていない場合、EAR ファイルはパッシブアプリケーションとしてデプロイされます。

Informatica プラットフォームのステージングを使用するために移行した場合、デルタ検出、物理削除の検出、および監査証跡を設定できますか？

デフォルトでは、Informatica プラットフォームステージングにはこれらの機能のサポートは含まれていません。これらの機能を提供するには、MDM Hub の外部で独自のカスタマイズを作成します。

付録 C

既存の ActiveVOS タスクの処理

この付録では、以下の項目について説明します。

- [既存の ActiveVOS タスクの処理の概要, 121 ページ](#)
- [移行プロパティ, 121 ページ](#)
- [移行スクリプトの実行プロパティファイルを指定, 122 ページ](#)
- [移行スクリプトの実行プロパティをコマンドラインに指定, 123 ページ](#)

既存の ActiveVOS タスクの処理の概要

MDM Multidomain Edition バージョン 10.1 より前に作成された ActiveVOS タスクを使用するには、移行スクリプトを実行して必要なプレゼンテーションパラメータをタスクに入力します。移行スクリプトを実行しないと、タスクがタスクマネージャに表示されません。バージョン 10.1 にアップグレードする前に作成されたすべてのタスクが処理されるまで、移行スクリプトを実行します。

移行スクリプトには、いくつかのプロパティを設定する必要があります。プロパティは、ビルドファイルに追加することも、コマンドラインに追加することもできます。

移行プロパティ

次の表に、移行プロパティを示します。

プロパティ	説明
avos.jdbc.database.driver.jar	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバが含まれる JAR ファイルへのパス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に<infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.driver.class	ActiveVOS データベースの JDBC ドライバクラス。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に<infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。

プロパティ	説明
avos.jdbc.database.url	ActiveVOS データベースの接続 URL。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に<infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.username	ActiveVOS データベースのユーザー名。 このパラメーターは、Hub サーバーのインストール時に<infamdm installation directory>\conf\avos.install.properties に avos プレフィックスなしで入力されます。
avos.jdbc.database.password	ActiveVOS データベースのパスワード。
avos.ws.protocol	ActiveVOS サーバー接続のプロトコル。http または https になります。
avos.ws.host	ActiveVOS が実行されるアプリケーションサーバーのホスト名。
avos.ws.port	アプリケーションサーバー接続のポート番号。
avos.ws.trusted.username	信頼されたユーザーのユーザー名。 注: 信頼されたユーザーは、MDM Multidomain Edition のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.ws.trusted.password	信頼されたユーザーのパスワード。 注: 信頼されたユーザーは、MDM Multidomain Edition のインストールおよびアップグレードプロセスの一環として作成されます。
avos.hub.username	すべてのタスク管理ロールに属する MDM Hub スーパーユーザー。
avos.ws.pagesize	1 つのデータベーストランザクションで処理され、ActiveVOS からバッチロードされるタスクの数。
avos.ws.statuses	オプション。処理する ActiveVOS タスクステータスのカンマ区切りリスト。例えば、READY や IN_PROGRESS などです。デフォルトではすべてのタスクが処理されます。

移行スクリプトの実行プロパティファイルを指定

ワークフローに関連するロールに属する MDM ユーザーを作成します。移行プロパティを Hub サーバーの build.properties ファイルに追加してから、MDM Hub マスターデータベースを移行スクリプトコマンドで実行します。移行後も、タスク所有者は自身が割り当てたタスクでのアクションを継続できます。

移行スクリプトは定期的に行われます。サブジェクト領域のワークフローアダプタについてのタスクがすべて処理されたら、スクリプトを実行する必要がなくなり、この目的のために作成した MDM ユーザーを削除できます。

1. MDM Hub ユーザーを作成し、そのユーザーにワークフローに関与するすべてのロールを割り当てます。
たとえば、事前定義済みワークフローが使用するロールは、DataSteward、Manager、および SrManager です。
2. テキストエディタで次のファイルを開きます。

<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin/build.properties

3. 移行プロパティを build.properties ファイルに追加します。プロパティのリストについては、[「移行プロパティ」 \(ページ 121\)](#)を参照してください。
4. コマンドプロンプトを開きます。
5. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
6. 移行スクリプトコマンドを含むアップグレードスクリプト MDM Hub マスターデータベースを実行します。
 - UNIX の場合: sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks
 - Windows の場合: sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks

移行スクリプトの実行プロパティをコマンドラインに指定

ワークフローに関連するロールに属する MDM ユーザーを作成します。コマンドプロンプトを開き、目的のプロパティを指定してスクリプトを実行します。移行後も、タスク所有者は自身が割り当てたタスクでのアクションを継続できます。

移行スクリプトは定期的に実行します。サブジェクト領域のワークフローアダプタについてのタスクがすべて処理されたら、スクリプトを実行する必要がなくなり、この目的のために作成した MDM ユーザーを削除できます。

1. MDM Hub ユーザーを作成し、そのユーザーにワークフローに関与するすべてのロールを割り当てます。
たとえば、事前定義済みワークフローが使用するロールは、DataSteward、Manager、および SrManager です。
2. コマンドプロンプトを開きます。
3. 次のディレクトリに移動します。
<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/bin
4. 移行スクリプトコマンドと移行プロパティを含むアップグレードスクリプト MDM Hub マスターデータベースを実行します。プロパティのリストについては、[「移行プロパティ」 \(ページ 121\)](#)を参照してください。
たとえば、次のコマンドのいずれか 1 つを実行できます。

- UNIX の場合:

```
sip_ant.sh migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!!  
-Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100  
-Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
```

- Windows の場合:

```
sip_ant.bat migrate-avos-sa-tasks -Davos.jdbc.database.password=!!cmx!!  
-Davos.ws.protocol=http -Davos.ws.host=localhost -Davos.ws.port=8080 -Davos.ws.pagesize=100  
-Davos.ws.trusted.username=avos -Davos.ws.trusted.password=avos -Davos.hub.username=admin
```

メタデータキャッシュの設定

- [メタデータキャッシュの構成（オプション）](#) , 124 ページ

メタデータキャッシュの構成（オプション）

メタデータキャッシュは、データオブジェクト、リポジトリオブジェクト、検索トークンなどのアイテムを管理します。MDM Hub は、Infinispan を使用してメタデータキャッシュを実行します。Infinispan は、Hub サーバーと共にインストールされます。Hub サーバーによって使用されるキャッシュの場合、Infinispan 構成ファイルにはデフォルトの属性値が含まれます。

バージョン 10.1 以前では、MDM Hub は、メタデータキャッシュに JBoss Cache を使用していました。これらのバージョンのいずれかからアップグレードすると、MDM Hub サーバーは、JBoss Cache 構成ファイルではなく、Infinispan 構成ファイルを使用します。

JBoss Cache 構成ファイルが以前のバージョンの MDM Hub で編集されていた場合は、Infinispan 構成ファイルを編集する必要がある場合があります。ファイルが編集された理由によって異なります。

ネットワークポリシー

組織のネットワークポリシーに対応するために JBoss Cache ファイルを編集した場合は、Infinispan ファイルと jgroups* ファイルを同じポリシー変更で更新します。

パフォーマンス

キャッシュのパフォーマンスを向上させるために JBoss Cache ファイルを編集した場合は、まず、Infinispan のデフォルト値で MDM Hub を実行してみます。パフォーマンスの問題が発生した場合は、変更された値を JBoss Cache 構成ファイルから Infinispan 構成ファイルにコピーします。それでもパフォーマンスの問題が発生する場合は、Infinispan をよく理解し、環境により適した値に調整します。

Infinispan 属性

次の表は、デフォルトの Infinispan 属性値をまとめたもので、属性が以前の JBoss 属性にどのようにマップされるかを示しています。

Infinispan 要素と属性	デフォルト 値	説明	JBoss 属性
locking acquire-timeout	60000	Hub サーバーがロックの取得を試みる最大時間。	lockAcquisitionTimeout
transaction stop-timeout	30000	キャッシュが停止すると、この属性は、Hub サーバーがリモートおよびローカルのトランザクションを完了するまでに Infinispan が待機する最大時間を設定します。	sync replTimeout
transport cluster	infinispan-cluster	基になるグループ通信クラスタの名前。	clustering
transport stack	UDP	構成の種類: UDP または TCP。構成は、jgroups-udp.xml ファイルおよび jgroups-tcp.xml ファイルで定義されます。	jgroupsConfig
transport node-name	\$node\$	現在のノードの名前。Hub サーバーがこの属性を設定します。 node-name のデフォルトはホスト名と乱数の組み合わせです。この番号により、同じホスト上の複数のノードを区別します。	--
transport machine	\$machine\$	ノードが実行されるコンピュータの ID。Hub サーバーがこの属性を設定します。	--
expiration lifespan	--	キャッシュエントリの最大寿命（ミリ秒単位）。キャッシュエントリが寿命を超えると、クラスタ内のエントリは有効期限切れになります。パフォーマンスを最適化する場合がある場合は、DISABLE_WHEN_LOCK、DATA_OBJECTS、および REPOS_OBJECTS の各キャッシュの寿命を長くします。 例えば、寿命を 1 時間（3600000）から 1 日（86400000）に増やすことができます。 各キャッシュには、この属性の独自のデフォルト値があります。デフォルト値を検索するには、infinispanConfig.xml ファイルを開きます。	eviction timeToLive
expiration interval	--	寿命を確認するための最大間隔。パフォーマンスを最適化する場合がある場合は、DISABLE_WHEN_LOCK、DATA_OBJECTS、および REPOS_OBJECTS の各キャッシュの間隔を長くします。 例えば、間隔を 5 秒（5000）から 5 分（300000）に増やすことができます。 各キャッシュには、この属性の独自のデフォルト値があります。デフォルト値を検索するには、infinispanConfig.xml ファイルを開きます。	eviction timeToLive

Infinispan 属性の編集

メタデータキャッシュ属性を設定するには、Hub サーバーの `infinispanConfig.xml` ファイルを編集します。Infinispan 設定のヘルプについては、Infinispan のマニュアルを参照してください。

注: プロセスサーバーには、Infinispan 設定ファイルもあります。デフォルトの属性値は十分に機能するはずですが、プロセスサーバーのパフォーマンスに問題があることに気付く場合は、属性値を微調整できます。

1. 次のディレクトリに移動します。<MDM Hub installation directory: MDM Hub のインストールディレクトリ>/hub/server/resources
2. 次のファイルのバックアップコピーを作成します。infinispanConfig.xml
3. `infinispanConfig.xml` ファイルを開き、Infinispan バージョン番号を見つけます。これは `xsi:schemaLocation` 属性内にあります。
4. その Infinispan バージョンのマニュアルを確認します。

注: 次の URL で、パスに # が含まれている場合は、バージョン番号を置き換えます。#.

- 設定スキーマを表示するには、ファイルの `xsi:schemaLocation` 属性に含まれている URL に移動します。
 - 属性の詳細を知るには、<https://docs.jboss.org/infinispan/<#.#.x>/configdocs/> に移動してください。
 - Infinispan の詳細を知るには、<http://infinispan.org/docs/<#.#.x>/> に移動し、「Frequently Asked Questions」リンクを選択します。
5. ファイルを編集して保存します。

索引

A

ActiveVOS

URN、設定 [95](#), [104](#)

自動インストーラのプロパティ [41](#)

C

cmxserver.log ファイル [45](#), [57](#)

H

hub_cleanse_install.bin [48](#)

hub_cleanse_install.exe [48](#)

hub_install.bin [35](#)

hub_install.exe [35](#)

Hub サーバー

アップグレードの再適用 [46](#)

グラフィカルモードでのアップグレード [35](#)

サイレントアップグレード [41](#), [43](#)

サイレントプロパティファイル [41](#)

Hub サーバーのアップグレード

コンソールモード [38](#)

ログファイル [45](#)

概要 [34](#)

Hub ストアのアップグレード

オペレーショナル参照ストア

アップグレード [29](#)

マスターデータベース [25](#)

概要 [24](#)

I

IBM DB2 データベース

Oracle 互換の無効化 [66](#)

移行 [66](#)

infamdm_installer_debug.txt ファイル [45](#), [57](#)

Infinispan

設定 [126](#)

Informatica Data Director

アップグレードテスト [90](#)

M

MDM Hub

アップグレードテスト [91](#)

MDM Hub マスタデータベースのアップグレード

Verbose モード [25](#)

サイレントモード [28](#)

P

postInstallSetup.log ファイル [45](#), [57](#)

U

URN

ActiveVOS の設定 [95](#), [104](#)

W

WebSphere 管理セキュリティ

EAR ファイルのアンインストール [79](#)

Hub サーバーの PostInstallSetup スクリプトの実行 [80](#)

プロセスサーバーの PostInstallSetup スクリプトの実行 [80](#)

WebSphere セキュリティ

ORS の登録解除 [78](#)

あ

アップグレード

ガイドライン [10](#)

環境の再起動 [65](#)

マスターデータベース [25](#)

概要 [9](#), [10](#)

アップグレードプロセス

インプレースアップグレード [11](#)

クリーンアップグレード [11](#)

アップグレードテスト

Hub コンソールのツール [91](#)

Informatica Data Director [90](#)

概要 [90](#)

アンインストール

リソースキット [59](#)

い

一致ポピュレーション

有効化 [55](#)

お

オペレーショナルリファレンスストア

登録 [19](#)

オペレーショナル参照ストアのアップグレード

Verbose モード [29](#)

サイレントモード [32](#)

か

カスタムコード、テスト [91](#)
環境レポート
 確認 [88](#)
 保存 [88](#)

け

検証結果
 保存 [87](#)

さ

サイレントアップグレード
 Hub サーバーの [43](#)
 プロセスサーバーのサイレントアップグレードの実行 [52](#)

て

テスト
 アップグレードテスト [90](#)
 カスタムコード [91](#)

と

トラブルシューティング
 インストール後のプロセス [113](#)

は

はじめに [7](#)

ふ

プロセスサーバー
 アップグレードの再適用 [57](#)

プロセスサーバー (続く)
 グラフィカルモードでのアップグレード [48](#)
 コンソールモードでのアップグレード [50](#)
 サイレントアップグレード [51](#)
 サイレントプロパティファイル [51](#)
プロセスサーバーのアップグレード
 ログファイル [57](#)
 概要 [47](#)

め

メタデータの検証
 検証チェック [87](#)
メタデータ
 検証 [87](#)
 検証メッセージ、解決 [87](#)

り

リソースキット
 アップグレード [59](#)
 アンインストール [59](#)

ろ

ログファイル
 Cleanse Match Server のアップグレード [57](#)
 cmxserver.log ファイル [45](#), [57](#)
 Hub サーバーのアップグレード [45](#)
 Infamdm_Cleanse_Match_Server_InstallLog.xml ファイル [57](#)
 infamdm_installer_debug.txt ファイル [45](#), [57](#)
 Infamdm_Server_InstallLog.xml ファイル [45](#)
 postInstallSetup.log ファイル [45](#), [57](#)
 アプリケーションサーバーのログファイル [45](#), [57](#)